

尺度遺跡 III

南阪奈道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004年2月

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

尺度遺跡は、羽曳野市尺度に所在し、石川と羽曳野丘陵に挟まれた低地に位置する遺跡です。この遺跡は、南阪奈道路建設に伴って、平成8年度から当センターが調査を実施してきました。その結果、旧石器時代から中世にわたる各時代の遺構・遺物が検出され、遺跡の実態が明らかになってきました。

その成果は、既刊の『尺度遺跡I』・『尺度遺跡II』に記述したように、弥生時代中期の水田跡や、古墳時代初頭の首長居館とも考えられる方形区画をもつ集落域および畠・井堰・水路などの生産域が検出され、それぞれの時期の人々の活動を知る上で重要な資料が得られました。

今回の調査では、南北320mの範囲にトレンチを入れた結果、古墳時代初頭の集落域の北限を知ることができ、南側においても、同様に集落域の拡がりを確認することができました。

その結果、尺度遺跡の集落は、東西350m、南北200mの範囲に拡がることがわかり、さらに、南側では、自然流路を挟み集落域が存在することが明らかとなりました。

最後に、発掘調査および遺物整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご配慮をいただきました地元関係各位をはじめ、大阪府富田林土木事務所、大阪府教育委員会、羽曳野市教育委員会に深く感謝して序の言葉とします。

2004年2月

財團法人大阪府文化財センター

理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、羽曳野市尺度、藏之内に所在する尺度遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、主要地方道 美原太子線（南阪奈道路）の建設に伴うものである。財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育委員会の指導の下、大阪府富田林土木事務所から平成15年2月28日～平成16年2月27日の間委託を受けた。平成15年3月20日～8月29日まで現地調査を、平成15年9月1日～平成16年2月27日まで遺物整理を行ない、平成16年2月27日、本書の刊行をもって完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

調査部

部長 玉井 功

調整課

課長 赤木克視

調整係 係長 森屋直樹

調整係 主査 山上 弘 技師 山元 建

南部調査事務所

所長 藤田憲司

南部第二係 係長 森屋美佐子

南部調査事務所主任技師 立花正治〔写真〕

南部第二係 技師 島崎久恵

同非常勤職員 秋山敦子 川田嘉代子 中村慎子

松永しのぶ 山口純枝 行川 勝

久禮孝志〔写真〕

4. 植物遺体の同定については、中部調査事務所 主査 山口誠治によるものである。
5. 発掘調査および報告書作成作業の過程で地元羽曳野市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとして関係各位に御協力・御教示を賜った。記して謝意を表したい。
6. 本書の執筆、編集は島崎が行った。
7. 本書に関わる出土遺物、実測図等調査記録、写真は財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1. 本書で用いる標高はすべて東京湾平均海面で、図中では原則的にT. P. + およびmを省略した。
2. 本書に掲載した遺構図、その他の図に付した座標値はkmをすべて省略した。なお、使用測地系は日本測地系（改正前）である。
3. 本書に掲載した遺構図、その他の図に付した北方位はすべて国土座標第VI系の座標北を示す。
4. 現地調査、及び遺物整理は『遺跡調査基本マニュアル』財團法人 大阪府文化財センター（2003. 08改訂）に準拠して行っている。ただし、地区割については日本測地系（改正前）を使用しているためこれに準らない。第I、II区画は1万分の1地形図の大E-6-14である。
5. 土色は農林水産省農林水産技術土木会議事務局監修『新版 標準土色帖』2002を用いた。
6. 遺構番号については遺構の種別に関わらず、全てのトレンチをとおして通し番号を、その後に遺構名を付した。この番号は調査時の番号と同一である。ただし、個別遺構の集合体である掘立柱建物、櫛列は遺構名の後ろに1から番号を付け直している。
7. 掲載遺物については、各図の中で通し番号を付した。各個体は図●-1というように図番号の後にハイフン（-）で番号を結んで表した。なお、図版、観察表の遺物番号はこれに一致する。また、図版掲載のみの遺物については、aから小文字アルファベットを付している。
8. 遺構図は各図にスケールを付しているが、縮尺は全体図を1/200に統一し、遺構図が1/40、掘立柱建物、竪穴住居が1/60を原則としている。
9. 遺物図の縮尺は、各図にスケールを付しているが、原則として、土器1/4、石器1/2で掲載している。

目 次

序文

例言

凡例

| | |
|------------------|----|
| 第1章 調査に至る経過..... | 1 |
| 第2章 遺跡をとりまく環境 | |
| 第1節 地理的環境..... | 2 |
| 第2節 歴史的環境..... | 4 |
| 第3節 既往の調査..... | 6 |
| 第3章 調査の成果 | |
| 第1節 調査の方法..... | 9 |
| 第2節 基本層序..... | 11 |
| 第3節 調査の概要..... | 17 |
| 1 トレンチ..... | 17 |
| 2 トレンチ..... | 19 |
| 3 トレンチ..... | 23 |
| 4 トレンチ..... | 27 |
| 5 トレンチ..... | 54 |
| 6 トレンチ..... | 61 |
| 出土石器..... | 64 |
| 第4章 まとめ..... | 66 |

挿表目次

| | | | |
|---------------------|----|---------------------|----|
| 表1 掘載遺物一覧 (1) | 70 | 表4 陶器遺物一覧 (4) | 73 |
| 表2 掘載遺物一覧 (2) | 71 | 表5 陶器遺物一覧 (5) | 74 |
| 表3 掘載遺物一覧 (3) | 72 | | |

挿図目次

| | | | |
|------------------------------------|----|----------------------------------|----|
| 図1 南阪奈道路と尺度道路..... | 1 | 図36 4トレンチ 暫立柱建物1 平・断面図..... | 39 |
| 図2 地形分類図..... | 2 | 図37 4トレンチ ピット 平・断面図..... | 40 |
| 図3 遺物分布図..... | 3 | 図38 4トレンチ 17、18号土坑 平・断面図..... | 41 |
| 図4 断面の調査トレンチ配置図..... | 6 | 図39 4トレンチ 小溝群1 平・断面図..... | 42 |
| 図5 国土地理とそれにともなう地区割..... | 9 | 図40 4トレンチ 小溝群2 平・断面図..... | 43 |
| 図6 トレンチ配置図..... | 10 | 図41 4トレンチ 出土遺物..... | 44 |
| 図7 1トレンチ 西浦区断面図..... | 13 | 図42 4トレンチ 1号土坑 平・断面図..... | 45 |
| 図8 2トレンチ 西浦区断面図..... | 14 | 図43 4トレンチ 3号井 出土遺物 (1) | 46 |
| 図9 5トレンチ 西浦区断面図..... | 15 | 図44 4トレンチ 3号井 出土遺物 (2) | 47 |
| 図10 6トレンチ 西浦区断面図..... | 16 | 図45 4トレンチ 3号井 出土遺物 (3) | 48 |
| 図11 1トレンチ 第4面 遺物分布図..... | 17 | 図46 4トレンチ 3号井 出土遺物 (4) | 49 |
| 図12 1トレンチ 第4面 遺物分布図..... | 18 | 図47 4トレンチ 3号井 出土遺物 (5) | 50 |
| 図13 2トレンチ 第4面 遺物分布図..... | 19 | 図48 4トレンチ 3号井 出土遺物 (6) | 51 |
| 図14 2トレンチ 45.46井戸 平・断面図..... | 19 | 図49 4トレンチ 土坑 平・断面図..... | 52 |
| 図15 2トレンチ 47井戸 36井戸 出土遺物..... | 21 | 図50 4トレンチ 7、8土坑 出土遺物 | 53 |
| 図16 2トレンチ 55面 遺物分布図..... | 22 | 図51 5トレンチ 第3面 遺物分布図 (左) | 55 |
| 図17 2トレンチ 97土坑 平・断面図..... | 22 | 図52 5トレンチ 186走路 断面図 | 55 |
| 図18 3トレンチ 10号土坑 出土遺物..... | 23 | 図53 5トレンチ 140土坑 断面図 | 55 |
| 図19 3トレンチ 84面 遺物分布図..... | 23 | 図54 5トレンチ 匂合層 出土遺物 | 55 |
| 図20 3トレンチ 254土坑 平・断面図 | 23 | 図55 5トレンチ 第4面 遺物分布図 (右) | 55 |
| 図21 3トレンチ 226土坑 平・断面図 | 24 | 図56 5トレンチ 185号穴住居 平・断面図 | 56 |
| 図22 3トレンチ 226土坑 平・断面図、出土遺物 | 24 | 図57 5トレンチ 185号穴住居 遺物出土状況図 | 56 |
| 図23 3トレンチ 8号土坑 平・断面図、出土遺物 | 26 | 図58 5トレンチ 185号穴住居 出土遺物 | 57 |
| 図24 4トレンチ 第1面 遺物分布図..... | 27 | 図59 5トレンチ 墓例2、3 平・断面図 | 58 |
| 図25 4トレンチ 3号出土遺物 | 28 | 図60 5トレンチ 161、184、195号 断面図 | 59 |
| 図26 4トレンチ 第3面 遺物分布図 | 29 | 図61 5トレンチ 161、195号 出土遺物 | 60 |
| 図27 4トレンチ 2号、6深掘、5浅 断面図 | 29 | 図62 5トレンチ 小溝群3 平・断面図 | 61 |
| 図28 4トレンチ 3号 出土遺物 | 30 | 図63 6トレンチ 匂合層 出土遺物 | 62 |
| 図29 4トレンチ 3号 出土遺物 | 30 | 図64 6トレンチ 第4面 遺物分布図 | 63 |
| 図30 4トレンチ 4-2号 土坑遺物 | 31 | 図65 墓 平・断面・遺物出土状況図 | 63 |
| 図31 4トレンチ 第5面 遺物分布図 | 32 | 図66 6トレンチ ピット 断面図 | 63 |
| 図32 4トレンチ 9号穴住居 平・断面図 | 34 | 図67 6トレンチ 溝 出土遺物 | 64 |
| 図33 4トレンチ 10号穴住居 平面図 (1) | 35 | 出上石器 | 65 |
| 図34 4トレンチ 10号穴住居 平面図 (2)・断面図 | 36 | 全体図 (付1) | |
| 図35 4トレンチ 壊穴住居 出土遺物 | 38 | | |

図版目次

| | |
|--|--|
| 図版1 1. 調査区分上二山を望む 2. 調査区分南阪奈道路 | 2, 18面 断面 (東から) 3, 29面 断面 (北西から) 4, 39面 遺物出土状況 (東から) 5, 56カット 断面 (東から) |
| 図版2 4-1トレンチ 1. 地層の乱れ (4トレンチ第2面) 2. 同上 断面 3. 1トレンチ北側 第4面 遺構検出状況 (南から) 4. 1トレンチ南側 第4面 遺構検出状況 (南から) 5. 1トレンチ 253土坑 断面 (西から) | 図版10 4トレンチ 1, 43井戸 遺物出土状況 (東から) 2, 7土坑 遺物出土状況 (北東から) 3, 43井戸 断面 (南東から) 4, 73号坑 断面 (東から) |
| 図版3 2トレンチ 1. 第4面 遺構検出状況 (西から) 2. 47井戸 遺物出土状況 (南から) 3. 47井戸 断面 (南から) 4. 46井戸 断面 (北から) | 図版11 4-5トレンチ 1, トレンチ40号列 検出状況 (北西から) 2, 4トレンチ 35号列 検出状況 (南東から) 3, 4トレンチ 40号列 断面 (南東から) 4, 5トレンチ 第3面 遺構検出状況 (南から) 5, 5トレンチ 第4面 遺構検出状況 (南から) 6, 5トレンチ 第4面 調査区分中央 (北東から) |
| 図版4 2-3トレンチ 1. 2トレンチ 第5面 遺構検出状況 (北から) 2. 2トレンチ 97号土坑 断面 (南から) 3. 3トレンチ 第4面 遺構検出状況 (西から) 4. 3トレンチ 228号土坑 断面 (南から) 5. 3トレンチ 246号土坑 断面 (南から) 6. 3トレンチ 245号土坑 遺物出土状況 (東から) | 図版12 5トレンチ 1, 185号穴住居 断面 (北から) 2, 185号穴住居 遺物出土状況 (東から) 3, 195号 遺物出土状況 (東から) 4, 161号 深溝 (東から) 5, 小溝群 検出状況 (北から) 6, 墓例2 検出状況 (南から) |
| 図版5 4トレンチ 1. 第1面 遺構検出状況 (北から) 2. 第3面 遺構検出状況 (南から) 3. 第2面 遺構検出状況 (北から) 4, 5溝 断面 (東から) | 図版13 6トレンチ 1, 6トレンチ南面 第4面 遺構検出状況 (北から) 2, 6トレンチ北面 第4面 遺構検出状況 (南東から) 3, 155号墓断面 (南東から) 4, 155号墓 検出状況 (南西から) |
| 図版6 4トレンチ 1. 第4面 遺構検出状況 (北から) 2. 第3面 遺構検出状況 (北から) | 図版14 2-3トレンチ 遺構出土遺物 図版15 4トレンチ 遺構出土遺物 (1) 図版16 4トレンチ 遺構出土遺物 (2) 図版17 4トレンチ 遺構出土遺物 (3) 図版18 4トレンチ 遺構出土遺物 (4) 図版19 4トレンチ 遺構出土遺物 (5) 図版20 5トレンチ 遺構出土遺物 (1) 図版21 5トレンチ 遺構出土遺物 (2) 図版22 3層出土遺物 (1) 図版23 3層出土遺物 (2) |
| 図版7 4トレンチ 1, 9号穴住居 検出状況 (北西から) 2, 9号穴住居 完掘状況 (南西から) 3, 9号穴住居内19号土坑 断面 (南東から) 4, 9号穴住居内19号ピット 断面 (東から) | 図版24 その他の遺物 |
| 図版8 4トレンチ 1, 10号穴住居 検出状況 (南東から) 2, 10号穴住居 完掘状況 (南から) 3, 10号穴住居内68号土坑 完掘状況 (北西から) 4, 10号穴住居内76号 検出状況 (西から) | |
| 図版9 4トレンチ 1, 16号 完掘状況 (北から) | |

第1章 調査に至る経過

今回の調査は、南阪奈道路（主要地方道 美原太子線）の建設に伴うものである。南阪奈道路は、大阪府南河内郡美原町丹上で近畿自動車道松原那智勝浦線と接続し、南河内を横断し、奈良県北葛城郡新庄町弁之庄で国道165号線に接続する自動車専用道路である。道路建設予定地は、多くの遺跡や、遺物散布地が知られており、これまでにも発掘調査が行われている。

今回の調査区は、大阪府羽曳野市尺度に所在する。調査地は尺度地区遺物散布地として周知されていたが、路線内の発掘調査を行うにあたって、調査地の西側に位置する周知の尺度遺跡と合わせて尺度遺跡と呼称されることになった。

尺度遺跡範囲内の道路予定地の内、大阪外環状線より西側については1996～1998年に、大阪外環状線より東側については1998～2000年に、それぞれ当センターが調査を実施した。

遺跡の主要遺構面は古墳時代前期初頭のものである。首長居館として注目された建物群を囲む方形区画をはじめ、周溝をもつ竪穴住居、掘立柱建物、溝、井戸、畠等が検出されており、当時の集落の空間利用を知る良好な資料が得られた。それぞれの調査成果については『尺度遺跡I』・『尺度遺跡II』の報告書が刊行されている。

今回の調査区は、1996～1998年の調査区に接しており、南阪奈道路側道と国道170号線（大阪外環状線）の交差点建設に伴い、国道170号線西側の拡幅工事に先立って実施したものである。調査は財團法人 大阪府文化財センターが大阪府教育委員会の指導のもと、大阪府富田林土木事務所の委託を受けて実施した。現地調査は2003年3月～8月、その後整理作業を行い、2004年2月本報告書の刊行をもって事業は終了した。



図1 南阪奈道路と尺度遺跡

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

尺度遺跡は羽曳野市尺度地内に所在する。遺跡は羽曳野丘陵とその東面を侵食する小河川や開析谷によって形成された扇状地から氾濫原にかけて立地する。北側には高屋城跡や古市古墳群が立地する中位～低位段丘面が広がり、南側は東阪田遺跡や喜志遺跡が立地する中位段丘面が張り出す。そのため、遺跡は西側の羽曳野丘陵を含め、3方を高所に囲まれた湾状の低地に立地することになる。遺跡の東側は西浦東遺跡が立地し、南河内を北流する石川に至る。周辺の地理的環境については、既刊の尺度遺跡の報告書に詳しい。ここでは、「尺度遺跡Ⅱ」で作成された地形分類図をもとに簡単に触ることとする。

尺度遺跡が立地するのは低地面Ⅰにあたる。低地面Ⅰは大きく3つに分けられる。Ⅰaは羽曳野丘陵の脇にあたり、弧状の等高線が互いに接している状況がみられる。丘陵を侵食してもたらされた砂礫や土砂が堆積して形成された扇状地と考えられる。発掘調査でも開析谷やその埋没過程で形成された河川が検出されている。低地面Ⅰbでは、これらの丘陵部から流れる河川や段丘面Ⅰを集水域とする河川がみられる。旧大乗川も段丘面Ⅰを集水域としており、誉田断層に沿って北流していたと考えられる。発掘調査でも、旧大乗川と考えられる河川が検出されている。Ⅰcは東側の低地面Ⅱに向かって緩やかに傾斜している。

尺度遺跡の主要遺構である古墳時代初頭の集落が立地するのは低地面Ⅰaの末端にあたり、舌状あるいは扇状に張り出した微高地上にあたる。

集落の東側、低地面Ⅰb面は、住居などの遺構は希薄で、北西から南東に流れる河川があり、更に東側を北流する旧大乗川に合流すると考えられる。

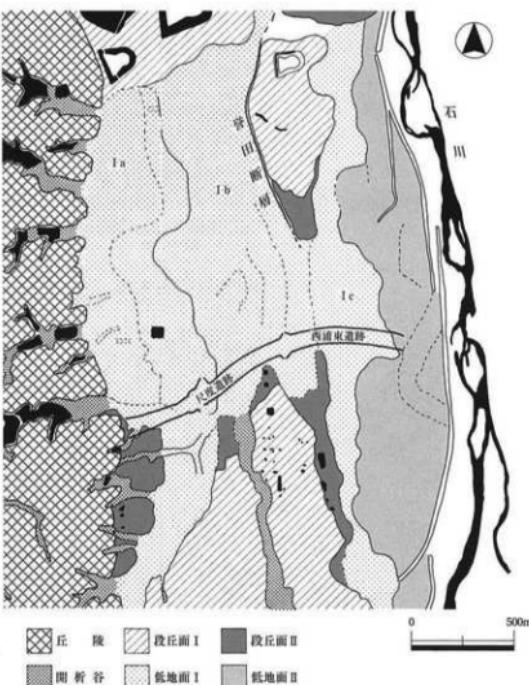


図2 地形分類図（2002「尺度遺跡Ⅱ」所収図より一部改変）



- 1 雨ヶ池古墳
- 2 ヒンジヨ池西古墳（大塚古墳）
- 3 墓穴古墳
- 4 善正寺跡
- 5 №48地点古墳
- 6 小口山古墳
- 7 鬼ヶ池南古墳
- 8 奎ヶ塚古墳
- 9 空田白鳥遺跡
- 10 前の山古墳
- 11 榮町遺跡
- 12 チンチン山遺跡
- 13 西琳寺跡
- 14 古市遺跡
- 15 石兜遺跡
- 16 塚生野南塚古墳
- 17 枝屋廐

- 18 白髪山古墳
- 19 白髪山遺跡
- 20 小白髪山古墳
- 21 高屋丘遺跡
- 22 高屋稜山古墳
- 23 高屋道跡
- 24 八幡山古墳
- 25 高屋城跡
- 26 城山道跡
- 27 大黒散布地
- 28 德楽山古墳石櫛
- 29 乃木寺北古墳
- 30 西浦古墓群
- 31 西浦遺跡
- 32 西浦ツヅミ田遺跡
- 33 大黒寺遺跡
- 34 大黒道跡
- 35 鞣ヶ谷第1散布地
- 36 6々塚河原古城
- 37 鹿之内西古墳
- 38 鹿之内道跡
- 39 鹿之内東道跡
- 40 德樂山古墳
- 41 鹿之内古墓
- 42 犀牛センター散布地
- 43 天智の坂古墳
- 44 戸戸山古墳
- 45 西浦銅鐸出土地
- 46 尺鹿道跡
- 47 西浦東道跡
- 48 東尾田遺跡
- 49 鞣ヶ谷道跡
- 50 奎井第1散布地
- 51 大黒城址
- 52 平2号古墳
- 53 茶臼山古墳
- 54 平1号古墳
- 55 喜志道跡
- 56 通治条里道跡
- 57 審志西道跡
- 58 審志南道跡
- 59 宮前社裏山古墳群
- 60 庫々池道跡
- 61 桜井北道跡
- 62 岸井津路
- 63 喜志城跡
- 64 宮前山古墳3号墳
- 65 宮前山古墳1号墳
- 66 真名井古墳
- 67 宮前山古墳2号墳

※この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「古市」（昭和63年7月30日発行）を使用したものである。道跡の範囲については大阪府教育委員会「大阪府文化財分布図」（2001年3月発行）を参照した。

図3 遺跡分布図

第2節 歴史的環境

尺度遺跡の位置する石川流域では旧石器時代から現代に至るまで、多くの遺跡が分布している。ここでは、周辺の歴史的環境について概観することにする。

旧石器時代

石川右岸、二上山北麓は石器の材料であるサヌカイトの産地として知られており、今池遺跡をはじめとして、石器製作址が検出された。

石川左岸では、羽曳野丘陵縁辺部の段丘面上で国府遺跡、翠島園遺跡、はざみ山遺跡といった府下を代表する後期旧石器時代の遺跡がみられる。国府遺跡は国府型ナイフ形石器の標識遺跡として、学術的にも重要な遺跡である。翠島園遺跡では大規模な石器製作跡が検出され、石器製作についての具体的な内容が明らかになった。はざみ山遺跡では住居跡が検出されている。

尺度遺跡近辺では、北側の段丘面上に位置する城山遺跡で後世の包含層からの出土ではあったが、ナイフ形石器、翼状剥片など後期旧石器が出土している。また、尺度遺跡では丘陵裾部でナイフ形石器、翼状剥片、チップ、石核等が出土し、この地点での小規模な石器製作が想定できる。

縄文時代

周辺では当該期の遺跡はあまり多くはない。縄文時代前期では国府遺跡で土坑墓が検出されており、石川流域における当該期の中心的遺跡と考えられる。石川流域では他に錦織遺跡、高向遺跡が知られる。

中期にはいっても、遺跡は依然として少ないが、石川上流の宮山遺跡で竪穴住居が検出されている。

後期にはいると、尺度遺跡周辺でも遺跡がみられる。城山遺跡では当該期の遺物が出土しており、尺度遺跡の東側の低地面に位置する西浦東遺跡では縄文時代後期の屋外炉、落ち込み状遺構が検出され、キャンプサイト的な性格が考えられている。西浦東遺跡では縄文時代晩期の遺物も出土している。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡は現在の石川と大和川合流地点周辺で集中しているが、国府遺跡で土器棺墓が検出されている他は、遺物の出土のみで遺構が伴わないものが多い。尺度遺跡近辺では東阪田遺跡で前期の遺物が出土している。

中期にはいると、周辺でも遺跡数の増加がみられる。尺度遺跡南側の段丘上に位置する喜志遺跡では濠をめぐらす集落が検出されている。未完成を含めた多数の石器が出土していることから、石器製作を行っていた集落と考えられている。また、環濠の西側には水田の存在が推定されている。喜志西遺跡では方形周溝墓が検出されており、喜志遺跡の墓域と考えられている。北側の段丘上でも城山遺跡で集落がみられる。竪穴住居が検出された他、石器製作を行っていたと考えられる各工程の石器が出土している。喜志遺跡より上流の中野、甲田南遺跡でも、中期中葉～後葉にかけての集落がみられ、竪穴住居、方形周溝墓などが検出されている。

一方、石川右岸では、この時期の遺跡は少ないが、お旅山遺跡では前期～中期の遺物が出土しており、周辺に集落があった可能性が高いと考えられる。

後期には、丘陵上に集落が増加する状況がみられる。石川右岸の丘陵上では、玉手山、五十村、御嶽山、東山、寛弘寺、尾平、駒ヶ谷遺跡などいわゆる高地性集落がみられる。

石川左岸においても、尺度遺跡（高地性）、農林センター散布地、藏之内遺跡、石曳遺跡など丘陵上

の集落がみられる。尺度遺跡は削平され、その実態は不明であるが、農林センター散布地、藏之内遺跡を含めて、いくつかの尾根に分かれて居住している小集団が集まって、一つの集落を構成していた可能性が指摘されている。また、石曳遺跡では、竪穴住居、溝、土坑が検出されている。その他、羽曳野市立西浦小学校の建築に際して突縫紐Ⅱ式近畿ⅣBに分類される銅鐸が出土している。

古墳時代

古墳時代前期初頭、庄内式期には再び低地～段丘上で遺跡が増加する。ただし、駒ヶ谷遺跡のように、弥生時代後期から継続する遺跡もみられる。弥生時代末から古墳時代にかけての土器棺墓が検出されている。石川左岸では首長居館として、注目された尺度遺跡がみられる。右岸では、伽山、上所、神山遺跡など段丘上で集落がみられる。続く布留式期の集落は、石川左岸では、西浦銅鐸出土地で当該期の可能性が考えられる竪穴住居が確認されている他、東阪田遺跡で布留式土器が出土している。石川右岸では、庄内式期の集落が継続してみられる。

古墳時代前期には、石川右岸の丘陵西縁部で丸山古墳、御旅山古墳、通法寺裏山古墳が、左岸では真名井古墳、鍋塚古墳が築造される。

古墳時代中期には最大の前方後円墳である誉田御廟山古墳（応神陵古墳）をはじめとして、古市古墳群が造営される。喜志遺跡では二次堆積層からではあるが多量の円筒埴輪、形象埴輪が出土している。出土地周辺の字名が「高塚」であることもあわせて、古墳が存在した可能性が指摘されている。

後期には群集墳が現れる。周辺では、石川右岸に飛鳥千塚古墳群が築造される。飛鳥川を挟んだ対岸の段丘上には藏塚古墳があり、飛鳥千塚の造営氏族の盟主墳の可能性が指摘されている。その他、一須賀古墳群などが知られる。

その後、南河内地域では終末期古墳が数多く築造される。石川左岸でも、ヒチンジョ池古墳、小口山古墳、お亀石古墳などが知られ、尺度遺跡の北側の丘陵上にも、徳樂山古墳が築造される。

古市古墳群内では「古市大溝」といわれる人工的な水路がみられる。6世紀中頃あるいは7世紀初頭に掘削された説があり、その機能についても灌漑水路、運河の説がある。

古代以降

羽曳野丘陵～石川流域では古代の官道沿いに多くの古代寺院や官衙関連遺跡が存在している。周辺では、野中寺、西琳寺、善正寺、はざみ山遺跡、野々上遺跡、駒ヶ谷遺跡などがあげられる。

尺度遺跡の北側、羽曳野丘陵東側の段丘上では西浦遺跡、藏之内東遺跡、ツヅミ田遺跡などで古代の遺構がみられる。西浦遺跡では奈良時代から平安時代に所属すると考えられる掘立柱建物が検出されている。藏之内東遺跡では、8世紀中頃から9世紀前半頃の遺物が多く出土しており、掘立柱建物、溝、土坑が検出されている。特に二彩陶器や瓦、製塙土器が出土しており、一般的の集落とは異なる性格をもつ可能性が考えられる。これらの遺跡は近年の調査で明らかになったもので、各遺跡は周辺に更に広がる可能性が高い。また、これらの遺跡の東側、丘陵上に位置する石曳遺跡では飛鳥～奈良時代の掘立柱建物が検出されている。注目される遺構として火葬墓があげられる。羽曳野丘陵東斜面に位置する西浦古墓でも奈良時代の火葬墓が3基検出されている。善正寺に近いことから、その関連が指摘されている。

農林センター散布地では、基段状の施設が検出され、式内社戸刈神社の旧社殿遺構と考えられている。

尺度遺跡より北側の段丘上には、中世屈指の城郭遺跡である高屋城が位置している。

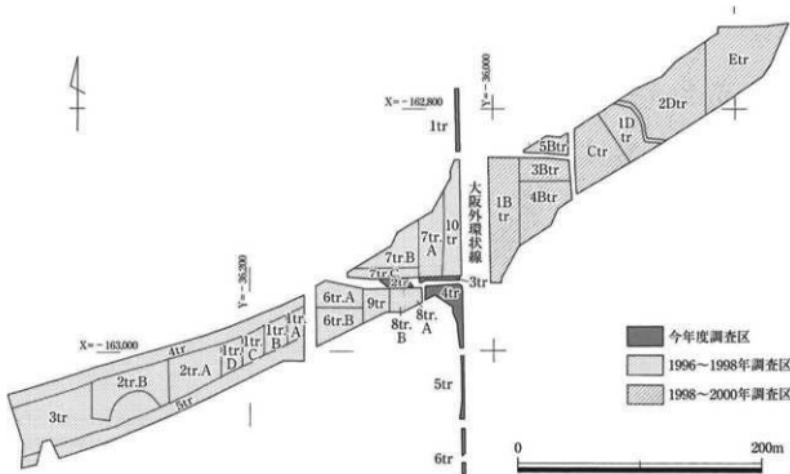
第3節 既往の調査

今回の調査地はこれまで、数次にわたる尺度遺跡の発掘調査地に接している。そこで、既往の調査の概要について簡単に触れておきたい。調査位置については図4を参照されたい。なお、本報告書では大阪外環状線より西に位置する1996-1998年調査区については『尺度I』、東に位置する1998-2000年調査区については『尺度II』として表すこととする。

尺度遺跡は、弥生時代後期の高地性集落として捉えられていたが、丘陵部分の削平等によって、その存在は不明瞭であった。丘陵裾部から低地面にかけては、尺度地区遺物散布地として周知されていた。1971年に（財）元興寺仏教民俗資料研究所が周辺の分布調査を行っており、1974年に同研究所が確認調査を実施、1975年には（財）文化財センターが分布調査を行ない、尺度地区散布地の範囲が広がることが確認された。その後、南阪奈道路建設予定が本格化し、1996年、（財）大阪府文化財調査研究センター（現（財）大阪府文化財センター）が行った道路建設に先立つ確認調査で低地部分において遺構の存在が確認され、1996年～2000年にかけて数次の調査を実施した（図4）。また、これらの調査が行われるにあたって、尺度地区遺物散布地を含めて尺度遺跡と呼称されることとなった。

南阪奈道路建設予定地は羽曳野丘陵から石川にかけて東西にはしり、結果として調査区は低地面を東西に横断する形となった。調査では地形にあわせた土地利用をみることができ、各時代において、多くの成果を得ている。『尺度I』3トレンチ、5、4トレンチ西側は丘陵裾部分にあたり、開析谷、流路が検出されている。『尺度I』2トレンチから『尺度II』のB地区は低地面I aにあたる。『尺度II』Cトレンチから東は低地面I bにあたる。なお、これより東側から石川左岸にかけては、西浦東遺跡として調査が行われ、報告書が刊行されている。

以下、時代ごとに調査成果をみていくこととする。



旧石器時代

羽曳野丘陵斜面にあたる『尺度Ⅰ』4トレンチで、後期旧石器が出土した。国府型ナイフ形石器の他、折損した翼状剥片、チップ、石核が見られ、小規模な石器製作址と考えられる。

縄文時代

『尺度Ⅱ』調査区では縄文時代後期～晩期の遺物が出土している。遺構、遺物は主に低地面Ⅰbで確認でき、E地区北端で縄文時代後期の炉跡が検出された。東側に位置する西浦東遺跡でも、北白川上層式の遺物が出土しており、炉跡、落込み状遺構が検出された。定住的な集落が形成された痕跡が見出せなかつたことから、キャンプサイト的性格が指摘されている。当該期の遺構が一帯に分布していると考えられる。

弥生時代

遺構は少ないものの、広範囲において、遺構、遺物がみられる。

弥生時代中期

低地面Ⅰa末端に位置する『尺度Ⅰ』10トレンチ、7トレンチA、『尺度Ⅱ』B地区で土坑が検出された。出土遺物はⅡ様式を中心としている。また、『尺度Ⅱ』では当該期の遺物を含む流路が検出されている。一方低地面Ⅰbに位置する『尺度Ⅱ』D地区では、水田が良好に検出された。遺構の密度は低く、住居跡等は検出されていないが、微高地に水田経営を行っていた集落が存在していたと推測される。

弥生時代後期

『尺度Ⅰ』では丘陵裾部4トレンチ西端で弥生時代後期の遺物を含む流路が検出された。丘陵上に位置したとされる高地性集落は前にも触れたようにその実態が明らかではないが、関連が考えられる。

『尺度Ⅱ』1Bトレンチ南端では竪穴住居を検出している。住居は調査区外に広がるため、規模等は不明であるが、円形を呈する焼失家屋と考えられる。その他、住居周辺では溝、土坑、水路等が検出されている。住居からは遺物の出土はなかったものの、溝、土坑からはまとまって遺物が出土しており、周辺に集落が広がる可能性が高い。これまで、当該期の集落の存在は西の羽曳野丘陵上に確認されていたが、低地面においての集落の存在を示唆するものとして重要な成果といえる。

古墳時代

古墳時代前期初頭（図69）

低地面Ⅰaを中心に庄内式期～布留式期初め頃の集落が良好に検出されている。集落は掘立柱建物と方形区画、周間に溝を巡らす竪穴住居、畠、井戸などで構成されており、特に方形区画をもつことから首長居館として注目された。

方形区画は溝の外肩で36.7m×37.6m、ほぼ正方形に推定でき、その内部は大部分が調査区外にあたるため不明であるが、北東～南西辺沿いに掘立柱建物がみられる。建物は2棟が並列した3時期の変遷が考えられている。その他、区画内には溝に沿って杭列がみられる。

方形区画の周囲には多くの竪穴住居がみられる。竪穴住居は方形で、基本的に周囲に溝を巡らしており、更に排水溝がのびている。この状況は尺度集落では、一般的であったことが分かる。竪穴住居は2

棟、あるいはそれ以上が切り合っているものが多く、同じ場所に何度も建て替えを行っていたことが分かる。掘立柱建物は方形区画外でも確認できるが、それは区画内と比べて小規模なものである。また、井戸が複数検出されており、それぞれの住居に井戸との組み合わせが考えられる。

他に、それぞれの住居に近接して平行する小溝群が見られる。これは畠痕跡と考えられ、居住域内に畠があったことが分かる。

これまでの調査は、東西方向に長く、その結果、集落の東西の端について、ある程度推定することが可能である。方形区画の中心から、西に約150m、東に約130mの範囲で竪穴住居が展開している。西側は、その竪穴住居を主体とする建物群の端から更に約70mのところで、幅約8mの自然流路が存在しており、それより西側では、当該期の遺構は広がらない。また、東側でも建物群の端から約50mのところで、幅約6mの河道が検出され、堰が構築され、それに伴う水路も検出されている。当該期の水田は検出されなかったが、調査区外に水田が広がっていると考えられる。また、Eトレンチでは畠の痕跡と考えられる小溝群が検出されており、所属時期は明らかではないが、低地面I bでは畠を含めて生産域として利用されていたと考えられる。

古墳時代後期

『尺度I』の丘陵側で検出された流路から取水する用水路が検出されている。飛鳥時代の遺物も含むものの、古墳時代後期には周辺の灌漑が整備され、耕作地として利用されていることが分かる。この流路内からは特に間析谷近くで比較的、遺物が多く出土しており、上流側、丘陵上に集落の存在が指摘されている。『尺度II』でも古墳時代後期の遺物が出土している。しかし、遺構等は希薄で、中世以降の耕作によって、遺構面が削平された可能性が高い。

古代以降

『尺度I』では丘陵裾部の緩斜面をとおって南へ伸びる用水路が掘削される。この水路からは11世紀末～12世紀初頭の遺物が主に出土している。また、調査区西側平端面では南北方向にはしる溝が検出され、時期は不確定ながら、条里との関連が指摘されている。丘陵部を集水域とした灌漑施設を整備し、更に丘陵裾部に至るまで耕作地を拡大、整備しているのが分かる。『尺度II』では、12世紀前葉から中葉の瓦器碗を埋納した土坑が検出されている。

調査地では中世の遺物を含む耕作土が広がっており、中世段階には耕地が広がっていたと考えられる。

第2章参考文献

- 芝野圭之助 笠井敏光 1987 『高屋城跡（城山遺跡）発掘調査概要』 大阪府教育委員会
富田林市教育委員会 1995 『富田林市内遺跡群発掘調査報告 平成6年度』 富田林市教育委員会
羽曳野市史編纂委員会 平成6年 『羽曳野市史』
三宮昌弘 河端智 1999 『尺度遺跡I』 （財）大阪府文化財調査研究センター
羽曳野市教育委員会 2000 『羽曳野市内遺跡調査報告書 平成8年度 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書38』
今村道雄 2000 『尾平遺跡』 大阪府教育委員会
羽曳野市教育委員会 2001 『羽曳野市内遺跡調査報告書 平成10年度 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書42』
若林邦彦 仲原知之 2002 『胸ヶ谷遺跡II』 （財）大阪府文化財調査研究センター
寺川史郎 木嶋崇晴 若林邦彦 2002 『西浦東遺跡』 （財）大阪府文化財調査研究センター
井上智博 中村ますみ 2003 『尺度遺跡II』 （財）大阪府文化財センター

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

地区割 今回の調査は96-98年度に行った尺度遺跡の発掘調査地に隣接している。そのため、世界測地系（測地成果2000）を使用すべきではあったが、前回の調査との関係上、旧来の日本測地系（改正前）による測量を行った。地区割も、前回の調査と同様に、当センターの前身である（財）大阪文化財センターが制定した「遺跡調査基本マニュアル」（財団法人大阪文化財センター 1988）に準じて設定した。

国土座標軸（第VI系）を基準線とし、大阪府全域を6段階で区画を設定している（図5）。

第I区画は、1万分の1地形図の地区割図を利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる（1万分の1地形図1枚分が1区画となる）。南西端を基点として縦軸A～O、横軸0～8で表す。

第II区画は、2500分の1地形図の地区割をそのまま利用する。第I区画を縦、横各4分割、計16分割する。縦1.5km、横2.0kmが1区画となる（2500分の1地形図1枚分が1区画となる）。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。

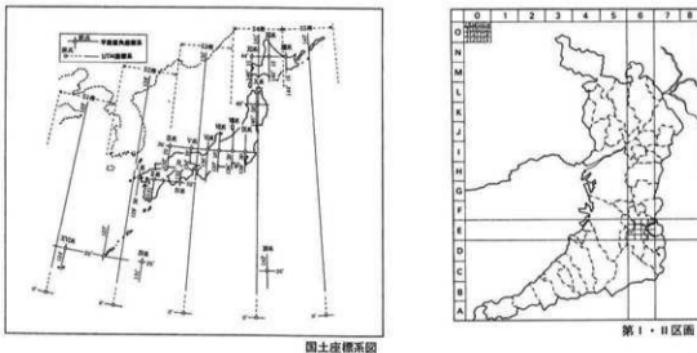


図5 国土座標とそれとともになう地区割

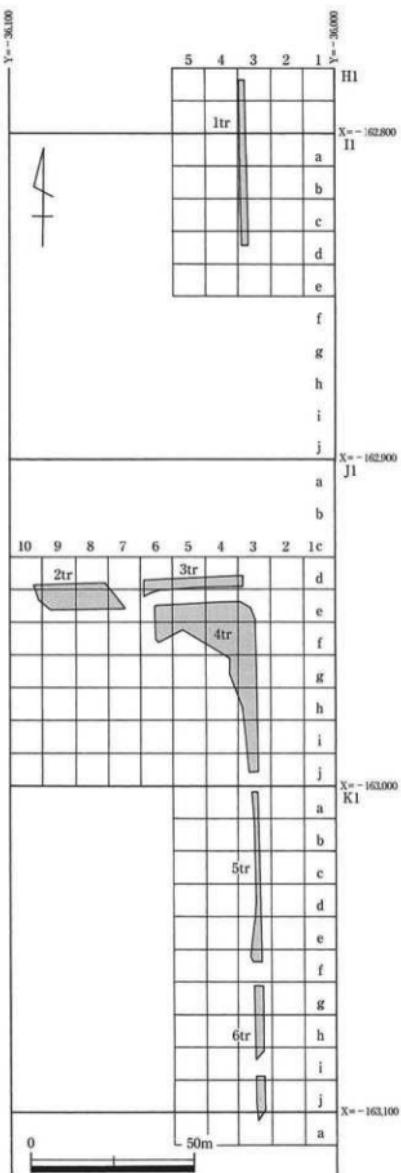


図6 トレンチ配置図

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画を100m単位で縦15、横20分割する区画である。北東端を基点として、縦A～O、横1～20で表す。

第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10m単位で縦、横各10分割する区画である。北東端を基点として、縦a～j、横1～10で表す。

なお、包含層の遺物の取上げもこのグリッドを使用している。

調査区は第I、II区画は大E-6-14にあたる。第III、IV区画は図6のとおりである。なお、今回の調査では第V、VI区画は使用していない。

調査区 調査区は大阪外環状線に沿って南北に約320mと長く、北から1～6の番号を付した(第6図)。

測量 今回の調査では3、4トレンチについては、クレーンを用いた空中写真測量を行い、50分の1の平面図、構造図とそれを縮小編纂した100分の1図を作成した。その他のトレンチについては、50分の1の平面図を作成し、状況にあわせて断面図、平面図、出土状況図等を作成した。

第2節 基本層序

今回の調査区は南北に長く、その結果当調査区を中心となる古墳時代前期初頭の集落の立地する微高地を横断する。集落が検出された面（第4面）は、調査地のもっとも北側にあたる1トレンチで、北に向かって下降しており、微高地の北端にあたると考えられる。北端はT.P.+36.5mを測る。『尺度I』10トレンチから4トレンチ北側にかけては、最も高く、微高地の中央にあたると考えられる。T.P.+37.6mを測る。4トレンチ南側から5トレンチ北側にかけては谷状の地形となり、微高地の南端にあたると考えられ、西側の開析谷から流れ出る河川がみられる。T.P.+37.2m～37.3mを測る。これより南側は谷底平野にあたり、5トレンチ南端から6トレンチ北端にかけてはT.P.+37.5mを測る。6トレンチ南側は、この谷底平野を形成した開析谷からの旧流路にあたると考えられ、南端はT.P.+36.5mを測る。この部分は、耕地化の際に段状に成形されたと考えられ、耕作土が厚く、それ以下の包含層はみられない。

以下、今回の調査区の基本層序を概観するとともに、『尺度I、II』調査区との対応関係についてまとめてみたい。^(註1)各トレンチの状況については第3節の中で触れることとする。

- 1層 盛土、及び現耕土である。『尺度I』の1層に対応する。
- 2層 旧耕作土である。近世までの耕作土と考えられる。『尺度I』の1層、『尺度II』の第1a層に対応する。

以上を機械掘削対象層とした。

3層 旧耕作土である。灰黄褐色、明褐色のシルト混じり細砂を主体とする。マンガンを多く含み、基本的に床土が下層にみられる。耕作土と床土のセットを数枚に細分することが可能である。6トレンチは南側に向かって段をなしており、特に南端は厚く層厚80cmを測る。1トレンチでは北側に向かって段を成して下がる。6トレンチ、5トレンチでは2層に大きく分け、下層を3～2層として掘削した。中世～古墳時代後期の遺物を含み、中世の作土と考えられる。3層上面を第1面とする。

『尺度I』の3層に、『尺度II』の第2a層に対応する。

4層 大きく2層に分層した。上層を4-1層とし、下層を4-2層としている。4-1層は下層に比べて、土壤化が弱く、褐灰色細砂混じりシルトを主体とする。4-1層は4トレンチで確認できたが他のトレンチでは見られなかった。上面は火塙上に立ち上がり、3層に達している。その結果平面では3層が満巻き状に残る（図版2-1、2）。下面でもこの乱れはみられ、4-1層が存在しない部分でも4-2層上面で、同じ痕跡を確認することが出来た。『尺度I』、IIの調査区でも広範囲に確認されている。このような痕跡が広範囲において、同じ面で見られることから、踏み込みといったものではなく、地震の痕跡と考えられる。4-1層からは遺物の出土はなかった。上面を第2面とする。

『尺度I』の4-1層に対応する。

下層である4-2層は2トレンチ～6トレンチ北側で確認することができた。基本的には、黒褐色細砂混シルトであるが、場所によって砂礫を多く含む。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を含む。4トレンチ南側から5トレンチ北側にかけての低い部分では4-2層が厚く、更に細分できる部分が見られる。この間は谷状に落ち込んでいたと考えられ流路が検出された。4トレンチでは3層に細分でき、各土壤化層上面で流路の肩が確認できる。4-2層上面を第3面とする。

『尺度I』の4-2層に、『尺度II』の第3a層に対応する。この第3a層は第3-1a層、第3-

2 a 層、第3 - 3 a 層と3枚の土壤化層に分けられている。第3 - 1 a 層は局所的に存在したもので、今回の調査区に近い西側では第3 - 2 層から今回の6層に対応すると考えられる4 a 層までがひとつの古土壤になっている状況がみられる。

5層 黄色系の砂質土～シルトを主体とする。2トレンチ、5トレンチ中央の狭い範囲で確認された。上面では古墳時代前期初頭の遺構を主に検出している。上面を第4面とする。

『尺度I』の5層に、『尺度II』の第3 - 3 b 層に対応する。

6層 黒褐色シルト～細砂混じりシルトである。2トレンチ、5トレンチで確認できた。いずれも非常に薄く、2、5トレンチとも10cm以下である。4トレンチ、5トレンチの4 - 2 層下層は6層と一体化している可能性も考えられるが、分層することができず、4 - 2 層として掘削している。6層からは遺物は出土していない。この層の下面を第5面とした。

『尺度I』の6層に、『尺度II』の4 a 層に対応する。

7層 黄色系の砂質土～シルトを主体とする。2、5トレンチ中央以外では5、6層は基本的に確認できず4 - 2 層除去面は7層に対応するものと考えられる。遺物の出土はみられない。

調査時には4 - 2 層除去面をすべて5層として扱っていたが、他のトレンチ、調査区との関係を考えれば、7層とするのが妥当であると考え、整理しなおした。なお、今回の調査の大部分が5、6層が残存せず、その結果、7層上面で、第4、5面に対応する遺構が検出された。検出された遺構の大部分が第4面に帰属するもので、今回はこれらの遺構をあわせて第4面で扱っている。

『尺度I』の7層に、『尺度II』の5層に対応する。

また、4トレンチ、1トレンチでは7層以下の堆積状況を確認するために、サブトレンチをいたた。4トレンチでは4 - 2 層以下、7層は黄色系シルトを主体とするが、ラミナがみられる中～粗砂もみられる。上層からの根痕が著しい。また、調査区南半では4 - 2 層直下では黒色系の砂疊混じり細～粗砂が薄くみられる。第4面の遺構はこの上面で検出している。

北側では7層より下層で、土壤化層と考えられる粘性のある黒色系のシルト混じり細砂層が確認された。乾痕が著しい。

1トレンチでは、7層の下層に弱い土壤化層が存在するが、遺物の出土はみられなかった。粗砂～砂疊層を主体としており、北に向かって傾斜している状況がみられた。粗砂～砂疊層の下層には黄色系シルト層がみられる。

註1

『尺度II』では、「古土壤や水田耕作層の扱いについては、土壤化した部分とその母材となる堆積物がセットで存在する場合、前者をa層、後者をb層と呼称し、後者が残存せず、全体が土壤化している場合はa層と呼称した。」としている。

註2

『尺度II』では地震痕跡について、変形して落ち込んだ2 a 層には瓦器椀（13世紀末～14世紀前半）の遺物が含まれていること、15～16世紀中葉の時期の土坑底面が変形していないことから、地震が起ったのはこの間と考えられる、としている。周辺では、高屋城跡で、埴砂が確認され、1510年「浜津河内地震」、1596年「伏見地震」によるものと考えられ、今回の地震痕跡も同一の地震による可能性が指摘されている。

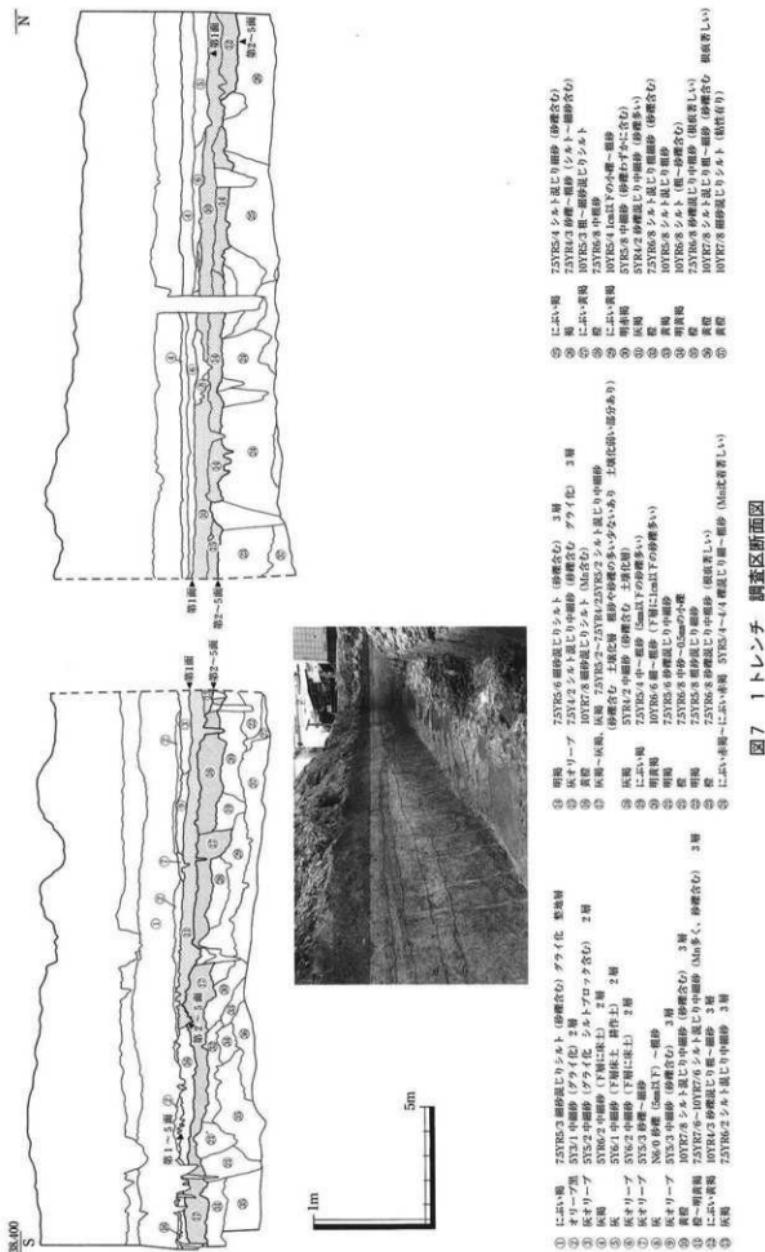


図7 1トレンチ 調査区断面図



図 8-4 ドレンチ調査区断面図

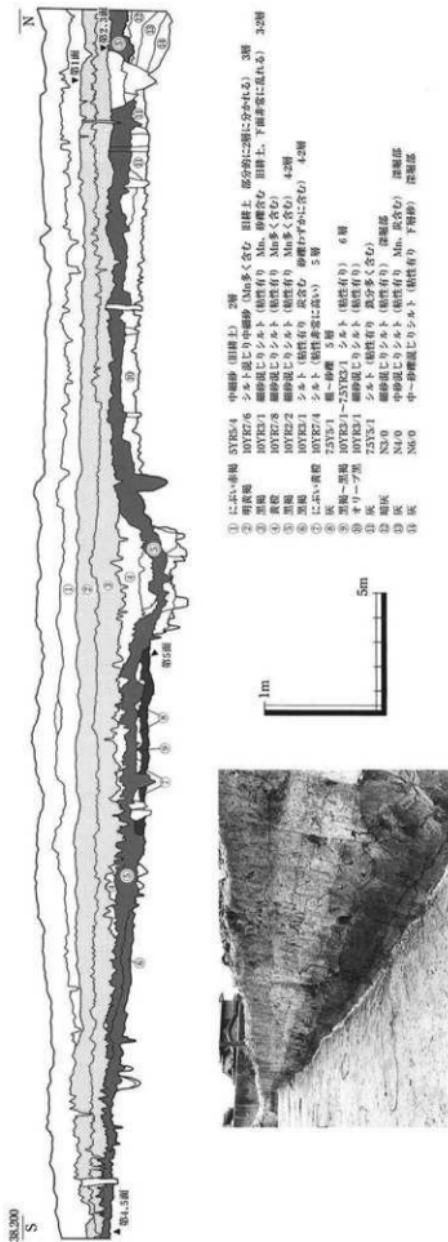
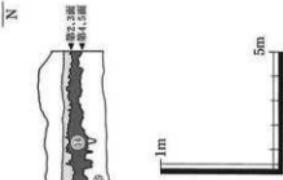


図9 5トレシチ 調査区断面図

38,200
N

| | | |
|------------|---------|----------------------|
| ① 植生 (表土) | 51Y86.6 | 中砂岩 (砂質含む) 34m |
| ② 砂 | 75Y86.2 | 中砂岩 (砂質、Min含む) 28m |
| ③ 砂質粘土 | 51Y86.2 | 中砂岩 (Min含む) 38m |
| ④ 砂質粘土 | 51Y86.6 | 中砂岩 (Min含む) 34m |
| ⑤ 砂質粘土 | 51Y86.6 | 中砂岩 (Min含む) 34m |
| ⑥ 砂質粘土 | 51Y87.6 | 中砂岩 (Min含む) 34m |
| ⑦ 乾燥した砂質粘土 | 51Y87.8 | 中砂岩 (Min含む) 34m |
| ⑧ 乾燥した砂質粘土 | 51Y87.4 | シルト混じり砂岩 (Min含む) 34m |
| ⑨ 乾燥した砂質粘土 | 51Y85.3 | シルト混じり砂岩 (Min含む) 34m |
| ⑩ 乾燥した砂質粘土 | 51Y87.3 | シルト混じり砂岩 (Min含む) 32m |
| ⑪ 乾燥した砂質粘土 | 51Y85.2 | ベース土(がくあひづ) 32m |

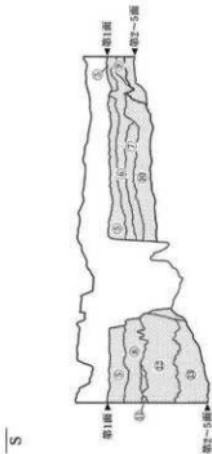


図10 6トレンチ 調査区断面図

第3節 調査の概要

調査の概要について、1トレンチから順に記述する。

1 トレンチ

調査区の最も北に位置するトレンチである。南北に長く幅1.5m、長さ51mを測る。調査区中央は側道、電信柱に近接しているためコンクリートが除去できなかった。

現代の盛土が厚く、層厚80cmを測る。この盛土の下層には、現耕作土（1層）がみられる。トレンチ南側では耕作土の下層に整地層がみられ、その結果、1層上面は南側と北側で約30cmの高低差をもつ。

2層は旧耕作土で、上面はほぼ水平である。

2層までを機械掘削対象層とした。

その下層は更に耕作土が見られる（3層）。約10～15cmの高低差をもって北に向かって下がる棚田がみられ、その結果、3層除去面では、トレンチ北端と南端で約50cmの高低差をもつ。耕作土は床土とセットで複数枚確認できる。3層からは遺物の出土は少なかったものの、瓦器片、中世須恵器片が出土しており、中世段階に耕地化していたことが分かる。

3層上面に対応する第1面では明確な遺構は検出されず、耕作に伴う段や、3層と2層の間に部分的にみられる薄い砂層が、溝状に残る部分があった。

1トレンチでは3層より下層において、遺物包含層を確認できなかった。調査区南側で僅かに7層が確認されたが、層厚約10cmと薄い。3層が北側に向かって下がっていることから、耕地化の際に削平された可能性が高い。

第4面（図11 図版2-3、4）

第4面では南側でピット、土坑を検出した。他に落込み、流路を検出しているが、第4面に帰属するものではないと考えられる。

ピット

252、253ピット（図12）

252ピットは調査区南端で検出した。直径25cm、深さ約20cmを測る。253ピットは252ピットの西側、約1mで検出した。直径約25cm、深さ5cmと浅い。埋土はいずれも明黄褐色の砂疊混じりシルトである。遺物の出土は少なく、時期は不明である。他に調査区南端の西側断面でピットを1基確認した。

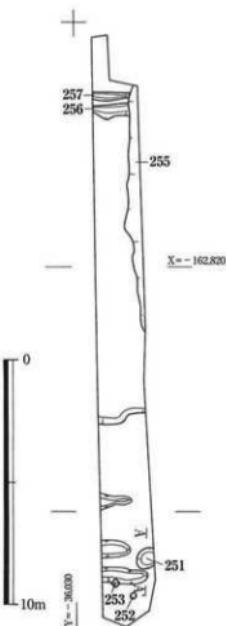
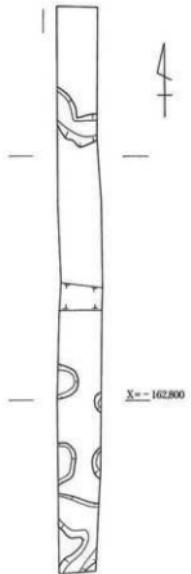


図11 1トレンチ 第4面 遺構分布図

土坑

251土坑（図12 図版2-5）

251土坑は調査区南側で検出した。土坑は調査区外に広がるが、直径0.8mの円形を呈すると考えられる。深さ0.4mを測る。埋土は、大きく3層に分層することができる。上層（断面①、②）はベース土である7層をブロック状に含んでおり、南側に偏った堆積をしている。最下層（断面④）には黒色の粘性の高い細砂混じりシルトが薄く堆積している。

遺物は細片が出土しているものの、時期の特定はできない。

溝

255溝

調査区東端で南北にのびる溝を検出した。溝の東側は調査区外になり、幅は不明である。深さは約0.15mと浅く、埋土は粗～細砂を主体としている。遺物の出土はみられなかった。

256、257溝

調査区中央で東西方向に平行してはしる2条の溝を検出した。幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。この溝をほぼ境にして上層の3層が北側に下がっており、上面の耕作に伴う溝の可能性が高い。

調査区北側では自然流路、土坑状の窪みを検出した。北側は7層以下の細～粗砂層が露出しており、また、これらの遺構からは遺物が出土していないため、所属時期は不明である。いずれも人工的に掘削された遺構とは考えにくく、自然流路や落込みと考えられる。調査区北側は特にグライ化が著しく、地下水の影響と考えられる。

1トレンチ南側では7層の下層において弱い土壤化層が見られたため、サブトレンチを設けて、下層の堆積状況を確認した。砂礫～粗砂を主体としており、北側に傾斜する数枚の土壤化層が確認できる。このことから、北側に傾斜した地形が考えられる。遺物は全く出土せず、それぞれの古土壤の時期は不明である。ただし、調査区南側では、土壤化層の更に下層から、風化の著しいサヌカイト片が3点出土している（図版24）。

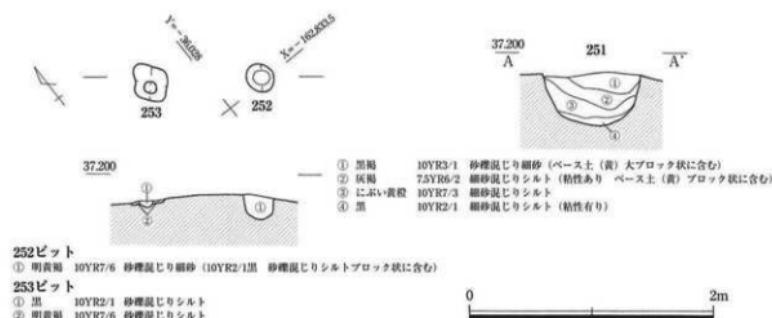


図12 1トレンチ 252、253ピット、251土坑 平・断面図

2 レンチ

2 レンチは「尺度 I」の 7 レンチ、8 レンチに挟まれて位置しており、東西に長いレンチである。狭い範囲ではあるが、7、8 レンチの成果から遺構が集中していることが予想された。しかし、用水路の掘方及びビアの掘方により大きくくら乱されており、僅かに遺構面が残る範囲について調査を行った。

現代の盛土が非常に厚く、機械掘削終了面で 4-2 層が露出していた。ここから人力掘削を行った。

第4面（図13 地図版 3-1）

井戸 1 基、溝 2 条を検出した。

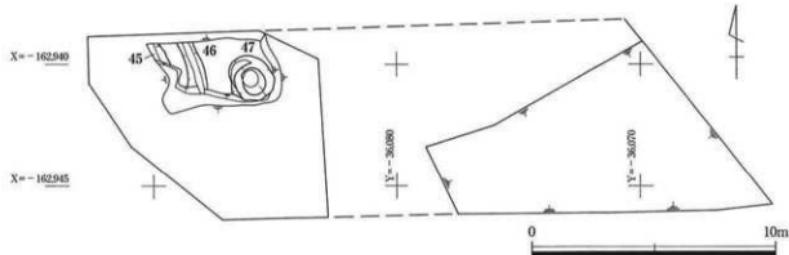


図13 2 レンチ 第4面 遺構分布図

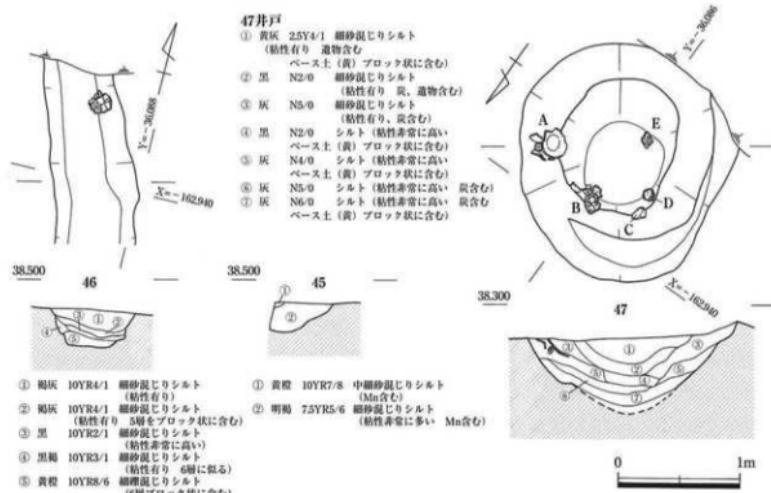


図14 2 レンチ 45、46溝、47井戸 平・断面図

溝

46溝（図14 図版3-4）

トレンチの西側で検出した。幅0.7m、深さ0.3mを測り、断面台形を呈する。『尺度I』の7トレンチ溝1410につながる溝である。埋土は大きく上層（断面①～③）、下層（断面④、⑤）に分層することができ、掘りなおしを行ったと考えられる。③は粘性の高い黒色細砂混じりシルト層で水が溜まった状態であったと考えられる。溝の東側肩部、上層から甕が出土している。

出土遺物（図15-20～22 図版14）

20～22はいずれも甕である。20は溝の東肩付近で出土した甕である。口縁部は外反し大きく開く。体部は口径より広がらず、丸みをもつ。底部は欠損している。体部外面には粗いタタキを施す。21、22は平底の甕底部である。21は体部外面にタタキを施す。

45溝（図14）

46溝の西側、トレンチ端で検出した。西肩はかく乱によって切られている。深さ約0.2mを測る。埋土は粘性の高い明褐色細砂混じりシルトを主体とする。遺物は細片が出土したが時期の特定はできない。

井戸

47井戸（図14 図版3-2、3）

46溝の東側で検出された。直径約1.8mの円形を呈し、深さ約0.8mを測る。埋土は大きく3つに分層できる。上層（断面①）は粘性のある黄灰色細砂混じりシルトで5層を比較的大きなブロック状に非常に多く含んでいる。人為的に埋められたと考えられる。中層（断面②、③）は黒色～灰色の粘性のある細砂混じりシルトで炭を含んでいる。下層（断面④～⑦）は非常に粘性の高いシルトで炭を含んでいる。遺物は完形のものは少ないが、中層と下層の境で比較的まとまって出土している。ある程度、井戸が埋没した段階で遺物が廃棄されたと考えられる。

出土遺物（図15-1～19 図版14）

井戸からは完形の遺物が少なかったが高杯、鉢、壺、甕等、比較的多くの遺物が出土した。

1～5は高杯である。1は有縁高杯である。図14の土器Aである。井戸の中程から出土している。ほぼ完形に復元することができる。杯部は体部が緩やかに上方にのび、口縁部は長く、外反ぎみにのびる。脚部は脚柱部から屈曲して据部が広がる。摩滅のため調整は不明である。2は脚柱部のみで据部に向かって広がる。外面に縦方向のヘラミガキを施す。3も脚柱部のみの出土であるが、細く、筒状を呈する。4も脚柱部のみで、中実である。5は椀形高杯である。摩滅しているものの、内外面の縦方向のヘラミガキがわずかに確認できる。

6、7は小型の鉢である。6は図14の土器Cである。井戸の中程から出土している。6は口縁部が外反し、体部は球状を呈する。底部は小さい平底である。磨滅のため調整は不明である。7は口縁部が短く外反し、底部は平底である。8は有孔鉢である。小さい底部から、直線的に体部がのびる。

9は装飾のある複合口縁壺である。円形浮文を配する。10は広口壺である。11～13は底部である。

14～19は甕である。14、18は図14の土器Bである。井戸の中程から出土している。14～16、18は外面にタタキを施す甕である。14は口縁部がやや外反して端部は丸くおさめる。体部は下半が欠損しているが球形に近い。15、16は底部である。17は短い口縁部が強く外反し、端部は丸くおさめる。体部内面は頸部より下を指オサエ痕が残る。外面は磨滅のため調整は不明である。外面に煤が付着する。19は口縁部がやや外反し、「く」の字に屈曲する。体部は球形を呈する。器壁は非常に薄い。体部外面に斜め方

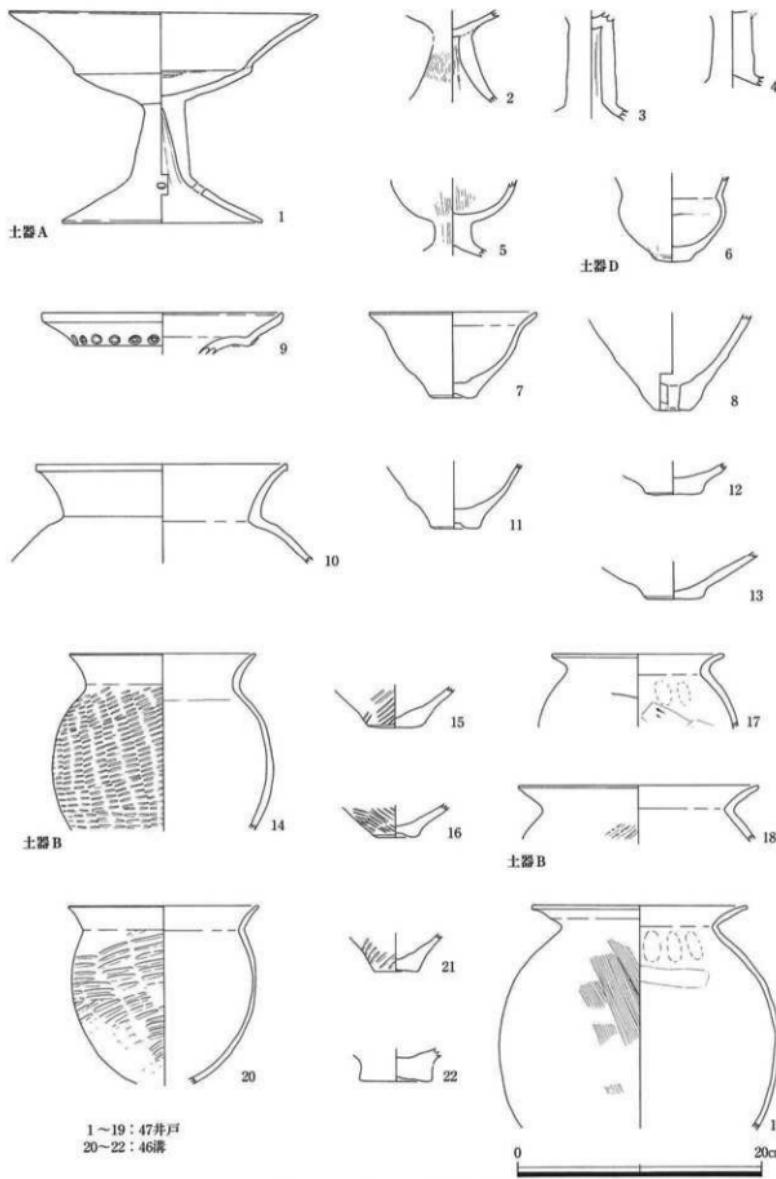


図15 2 トレンチ 47井戸、46溝 出土遺物

向のハケメを施す。内面は摩滅のため調整は不明である。

47井戸出土遺物にはいわゆる、生駒西麓産の胎土をもつ庄内式壺は含まず、V様式系の粗いタタキを有する壺が主体を占めている。14壺は、体部が球形に近く、庄内式期の特徴を有する。1の高杯は庄内式期中頃の特徴を有している。しかし、19は外面にハケメを施しており、前述の遺物より新しい時期が考えられる。遺物の出土層位を明確にはできないが、上層の埋土はそれ以下と大きく異なっており、最終埋没との間に時間差があったと考えたい。

2トレンチでは5層下層で6層がみられた。層厚10cm以下と薄い。6層上面では遺構は検出できなかった。6層からは遺物は出土していない。

第5面(図16 図版4-1)

次の7層上面で土坑、ピット、溝を検出した。

土坑

97土坑(図17 図版4-2)

1.4m×0.85mの隅丸方形を呈する。深さは約0.2mで東側はピット状に窪む。埋土はシルトを主体としており、炭を多く含む。特に下層(断面③)は粘性の高い黒色シルトで、炭化物を非常に多く含んでいる。土坑からは遺物の出土はない。

その他の遺構

土坑の北側でピットを2基検出した。また、調査区南端で東西方向にのびる溝を検出した。南肩はかく乱に切られている。いずれも、遺物の出土はない。

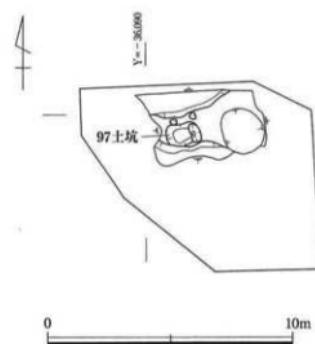


図16 2トレンチ 第5面 遺構分布図



図17 2トレンチ 97土坑 平・断面図

3 トレンチ

3 トレンチは『尺度 I』の10トレンチ、7 トレンチに接しており、幅約 3 m、長さ 31m と東西に細長いトレンチである。尺度 I の調査結果から遺構密度が高いことが予想された。しかし、調査区の南側は水路の掘方によって、西側はビアによってかく乱されており、遺構面の残存する範囲は狭い。

包含層は削平され、ほとんど確認できなかったが、調査区の西側で 4 - 2 層が遺存していた。層厚 10cm を測る。調査区には 5、6 層がなく、東側は機械掘削終了後ほぼ 7 層に至る。4 - 2 層からは遺物が僅かに出土した。図18は須恵器壺底部である。かく乱内から出土した。

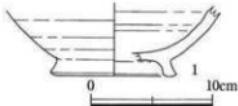


図18 3 トレンチ 包含層他 出土遺物

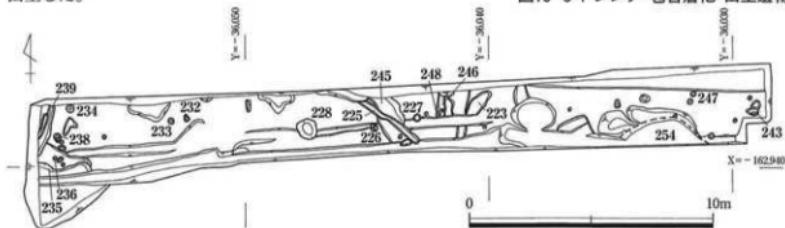


図19 3 トレンチ 第4面 遺構分布図

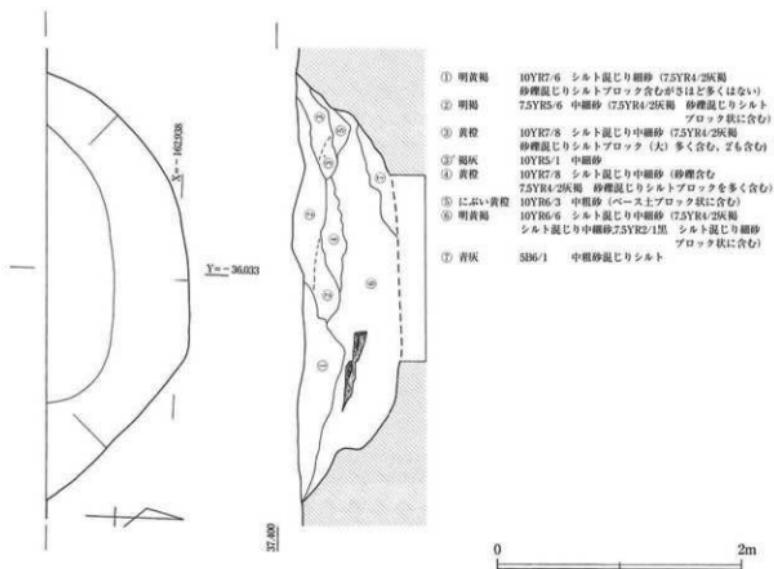


図20 3 トレンチ 254土坑 平・断面図

第4面(図19 図版4-3)

ピット、溝、土坑を検出した。3トレンチでは7層上面で、2~5面までの遺構を検出しているが、その多くは、第4面に対応する遺構である。第4面より上面に帰属すると考えられる遺構としては254土坑がある(図20)。調査区南東端で検出した。南半分は調査区外に広がるが、直径3.5mの円形を呈するを考えられる。井戸、あるいは水溜め遺構と考えられる。約1m掘り下げたが完掘出来ず、水路に接していることから、これ以上の掘削は断念した。埋土に4~2層をブロック状に含んでいることから、本来は4~2層より上面の遺構と考えられる。遺物の出土は少なく、遺構の時期を示すような遺物は含まれていない。埋土からは杭が出土している。中世の遺構と考えたい。

ピット

ピットが多く検出されたが、調査区が狭小なこともあり、建物を復元することは出来なかった。

柵列1(図21)

調査区中央で検出された。248、227、226ピットで構成される。226と227ピットの間はかく乱によつてピットを検出できなかった。ピットは直径25cm前後、深さは25~30cmを測る。埋土はベースとなる黄色細砂混じりシルトをブロック状に含んでいる。ピット間の距離は248と227ピット間は0.9m、227と226ピット間は1.75mを測る。ピットは直線的に並んでおり、ピットの規模、埋土が似通っているため、

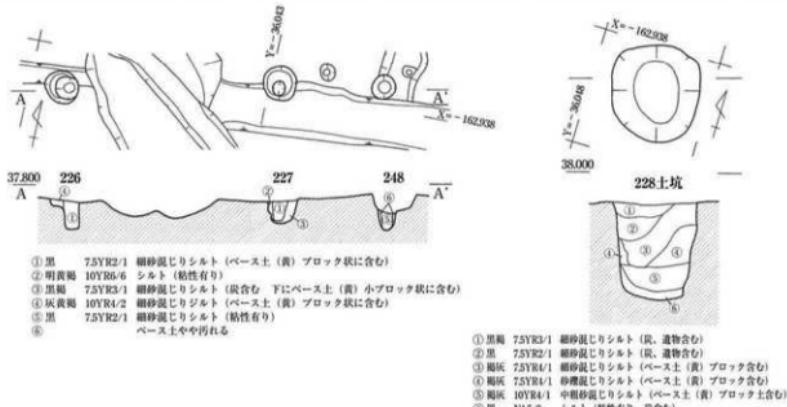


図21 3トレンチ 柵列1、ピット 平・断面図 図22 3トレンチ 228土坑 平・断面図、出土遺物

柵列、あるいは同一の建物を構成するピットの可能性が高い。

その他のピット（図21）

調査区の東側でもピットを検出した。243ピットは約40cm×30cmの楕円形を呈し深さは15cmと浅い。埋土は中粗砂。247ピットは直径20cm、深さ20cmを測る。下層に粘性の高い灰色シルトがみられる。

調査区の西側でもピットを検出した。238、234ピットは規模が近く、直径約30cm、深さ約30cmを測る。同一の建物を構成したピットの可能性が高い。ピット間の距離は約1.2mを測る。233、232ピットは直径約20cm、深さ10~15cmと小さく浅い。

ピットからの遺物の出土は少なく、図化できる遺物は出土していない。

土坑

228土坑（図22 図版4-4）

調査区の中央で検出された。直径0.7mと円形を呈する土坑である。深さ0.8mと深い。埋土は最下層に粘性の高い、炭を含む黒色シルト層（断面⑥）がみられる。上層（断面①~③）は細砂混じりシルトを主体とし、西側に偏った堆積をみせる。

出土遺物（図22-1~3）

遺物は細片が多く、図化できたのは以下3点である。1は高杯である。口縁部は強く外反し、端部は上外方にのびる。内外面とも横方向のミガキを施す。2は壺である。3は体部外面タタキを施す壺底部である。

溝（図23 図版4-5）

調査区では7本の溝を検出した。調査区は先にも触れたように「尺度I」に接しており、そこで検出された溝の続きと考えられる。246、225、223、239、240溝はほぼ同様の規模の溝である。

246溝は幅0.3m、深さ0.15mを測り、断面台形を呈する。埋土は灰黄褐色の細砂混じりシルトである。225溝は幅0.25m、深さ0.15mを測り、断面台形を呈する。245土坑を切る溝である。「尺度I」の溝688につながる。223溝は幅0.35m、深さ0.1mを測る。北側が幅広で35cmを測る。南側は断面台形を呈する。239溝は幅0.2m、深さ0.2mを測る。断面台形を呈する。「尺度I」の土坑694につながる溝につながる。239、225、223溝の埋土はいずれも黒褐色の細砂混じりシルトである。

236溝は235溝に切られており、「尺度I」で検出された溝290につながる可能性が考えられる。235溝は南側を水路で切られており、幅は不明である。

出土遺物（図23-5）

223溝から壺底部が出土した。平底で外面にタタキを施す。溝からは遺物の出土が少なく、他に図化できる遺物はない。

245土坑（図23 図版4-6）

245土坑は調査区外にのびるが、「尺度I」調査区では見られず、溝というより土坑と考えられる。幅約2m、深さ0.2mを測る。埋土に、炭を多く含む。225溝に先行する。

出土遺物（図23-1~4 図版14）

1~4は壺である。口縁部が短く外反する。1、2は小型の壺である。いずれも、磨滅が著しいが、1は僅かに外面にヘラミガキが残る。3は器壁が非常に摩滅している。胎土に結晶片岩を含んでおり、紀伊産と考えられる。4は壺の底部である。いずれも弥生時代中期（II様式）の時期が与えられる。

245土坑は本来、第5面に帰属する遺構と考えられる。

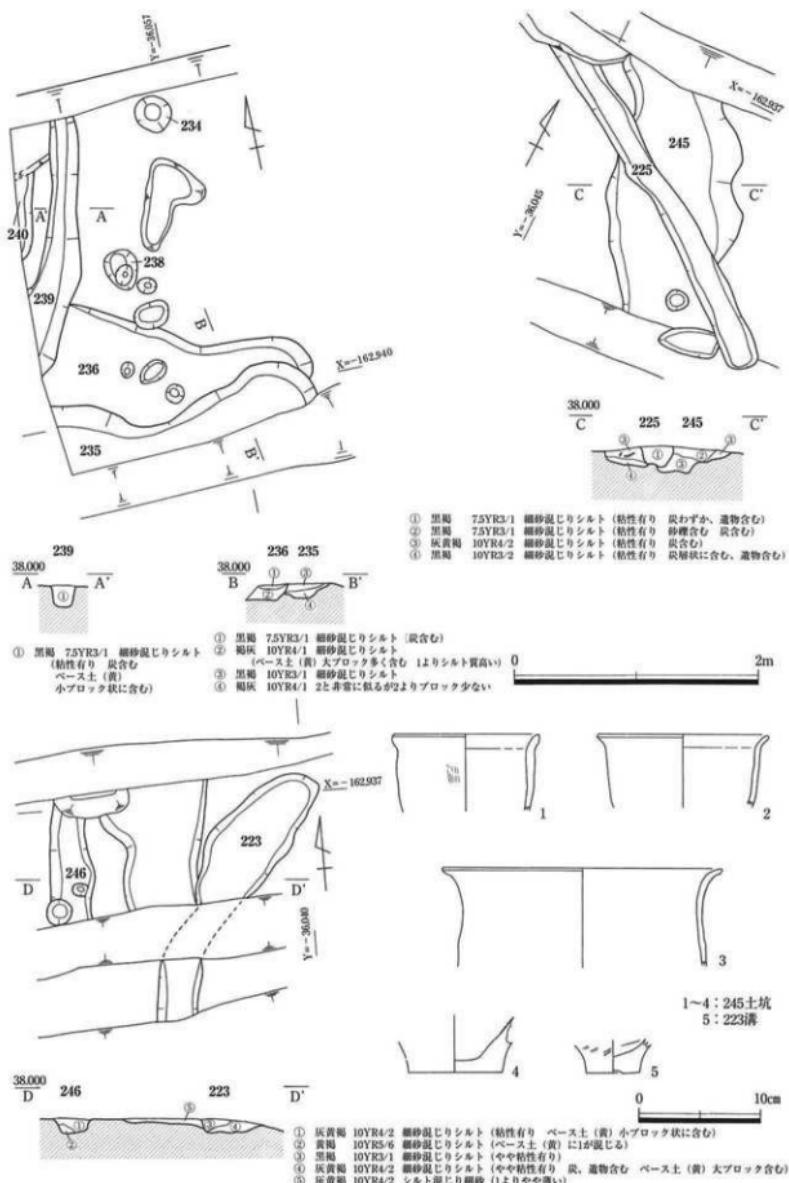


図23 3 トレンチ 溝、土坑 平・断面図、出土遺物

4 トレンチ

4 トレンチは今回の調査区の中で最も面積の大きい調査区である。しかし、西側に張り出した大部分がくら乱されていた。調査区は現代の盛土であり、そのため、矢板を打設しての調査となった。調査区の南側は谷状に落ち込んでいたが、安全な掘削深度を確保するために、面的な調査は4-2層の上面で断念している。

盛土、現、近代の耕作土を機械掘削で除去した（1、2層）。

第1面（図24 図版5-1）

鉢溝を検出した。溝はほぼ南北方向にのびる。調査区の北側で一段下がり、その境では東西方向に溝がみられる。また、方形の土坑が2基切りあって検出された（1、2土坑）。

3層はほぼ全面にわたって確認することができた。基本的に床土とセットになった耕作土であり、2枚みられるところもある。出土遺物は瓦器、土師器、中世須恵器、瓦等中世期のものが多く、他に古墳時代～奈良時代の須恵器、庄内式期の土師器等が出土している。また、注目する遺物として、足金具があげられる。

出土遺物（図25-1～21

図版22～24）

1は壺である。口縁端部が上方に立ち上がる。体部外面に粗いタキを施す。機械掘削時に出土したが、くら乱内は黒褐色の大きなブロックがみられ、その中から、遺物がまとまって出土している。本来は4-2層あるいは遺構埋土に伴うものと考えられる。2～6は須恵器である。2、3は壺身である。2は口径が大きく、口縁端部に内傾する面をもつ。3は口縁端部が欠損している。TK10型式に比定する。他にヘラ記号のある須恵器壺が出土している（図版22-c）。4は壺身である。TK217型式に比定する。5は壺蓋である。6は高台付き壺。奈良時代後半と考えられる。

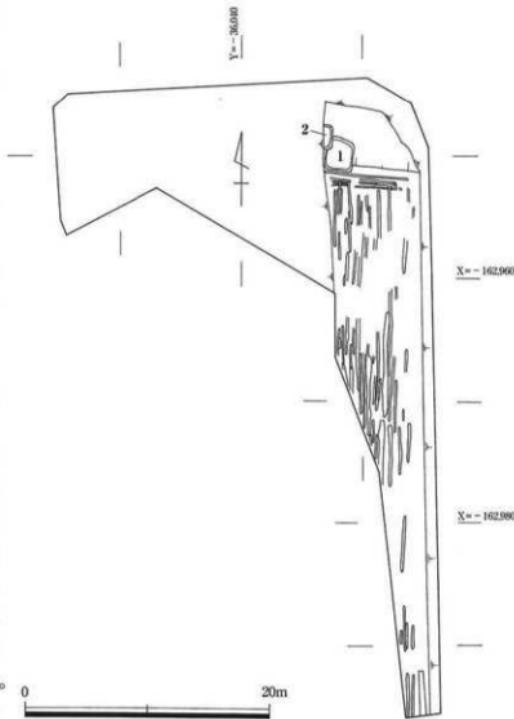


図24 4 トレンチ 第1面 遺構分布図

7～9は土師器皿である。図化していないが、他にも多くの土師器皿が3層から出土している。

10～16は瓦器である。10～12は瓦器皿である。11は口縁部が外に開く。体部外面が摩滅のため、不明であるが、内面は横方向に密なヘラミガキを施す。12は体部内外面を横方向に密なヘラミガキ、見込みに平行線状の暗紋を施す。13～16は瓦器椀である。13は浅く、内面は疎なヘラミガキを施す。14は比較的、深く、摩滅のため調整は不明である。15、16は高台である。15は見込みに平行線状の暗紋を施す。図化していないが、図版23-p、s、tは瓦器椀である。s、tは見込みに平行線状の暗紋を施し、高台は比較的高く、断面台形を呈する。

17、18は白磁碗である。17は非常に器壁が薄く、口縁端部は外側に折り返す。図化していないが青磁碗が出土している（図版22-a）。

19、20は瓦である。19は平瓦。凹面に布目が残る。20は丸瓦。薄く、凹面の布目が残る。

21は足金具である。刀装具の一種で太刀を腰に下げるために鞘につけられる金具である。上部は環状を呈し、下部は上方が広い楕円形を呈する。

図化した以外にも中世を中心とした遺物が出土している。また、古墳時代後期～古代の須恵器も数多くはないが出土している。

4～1層は調査区中央で確認できた（図版5-3）。4～2層が窪み状になった部分である。上面は火焔状に立ち上がり、3層に達しているため、平面では渦巻き状に3層が残る（図版2-1、2）。これは地震の痕跡と考えられ、「尺度I、II」の調査でも広範囲で確認されている。4～1層からは遺物の出土はみられない。他は4～2層が露出する状況であった。4～1層の上面では、明瞭な遺構はなく、3層と4～1層の間に部分的に見られた砂層が溝状に広がっているのが確認できた。

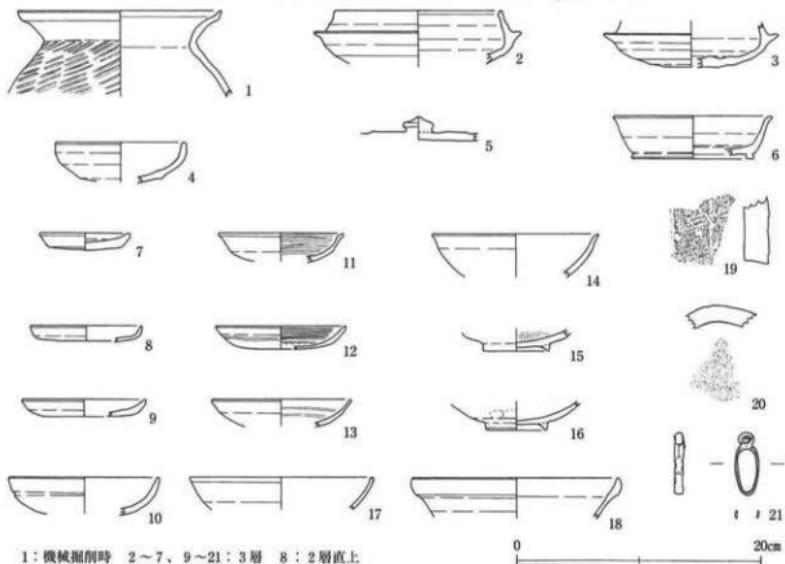


図25 4トレンチ 3層出土遺物

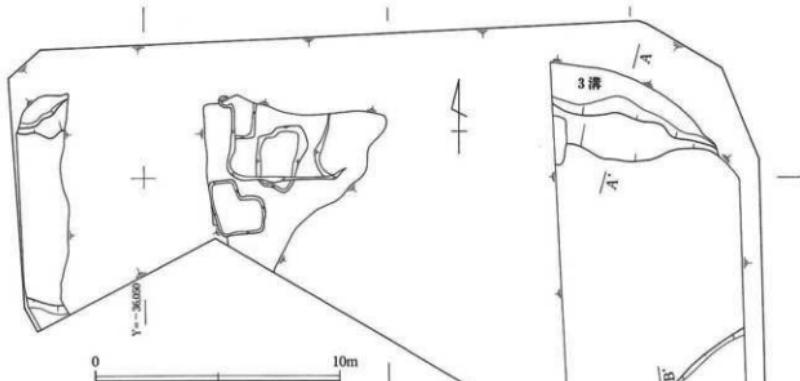


図26 4 トレンチ 第3面 遺構分布図

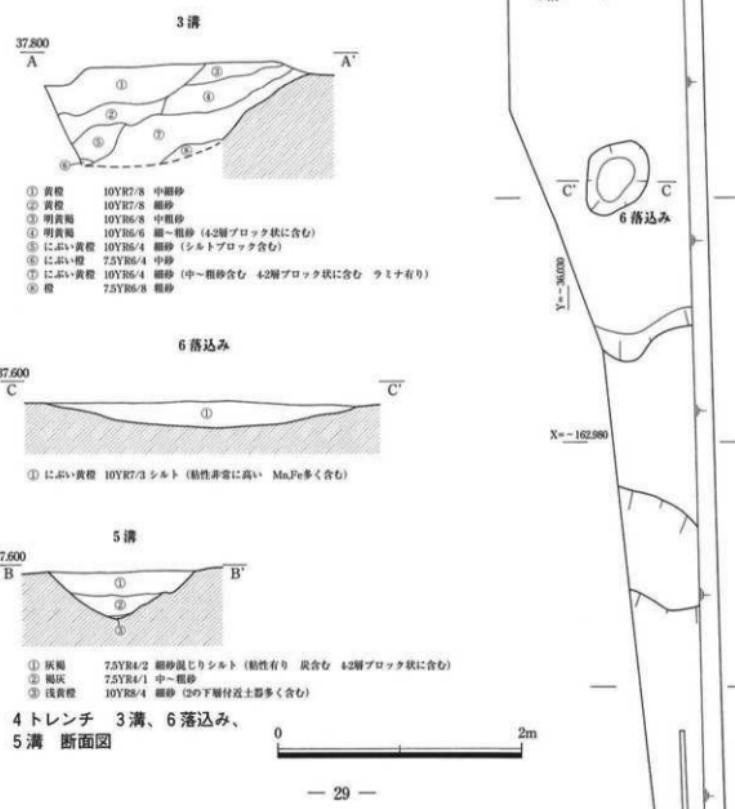


図27 4 トレンチ 3溝、6落込み、
5溝 断面図

第3面(図26 図版5-2)

溝、流路、落込みが検出された。

落込み

落込み(図27)

調査区中央で落込みが検出された。4-1層はこの部分を中心にみられた。

6落込み(図27)

上記の落込み中央で土坑状の落込みを検出した。3.5m×2.5mの楕円状を呈し、深さは0.2mと浅い。にぶい黄橙色シルトを埋土とする。ちょうど、この部分は下面の第4面で43井戸が検出されており、第3面段階でも窪みとして残っていたと考えられる。遺物の出土はみられない。

溝

3溝(図27)

調査区北側で検出した。細～粗砂を主体とし、ラミナがみられた。肩部に4-2層が大きくブロック状に見られる。調査区は西側が大きくくらべて切られているが、西端で検出された溝とほぼ埋土と同じであり、同一のものと考えられる。ほぼ東西方向にのびる溝である。『尺度I』でもこれにつながる溝が検出されている。約0.8m掘削したが完掘できず、水路が接していることからこれ以上の掘削を断念した。現在の水路の前身となる溝と考えられる。遺物の出土は少なかったが、下層の粗砂を中心で瓦が出土している。調査区北側は3層と4-1層が存在しておらず、第3面での検出となったが、埋土に4-2層をブロック状に含んでいることから、本来は第3面より上面の第2面に帰属する遺構と考えられる。

出土遺物(図28-1～3 図版24)

1は巴紋軒丸瓦である。内区は左巻きの三巴で、圓線で界した外区に珠紋を配する。巴頭部は尖り、扁平で、尾は長く、圓線にはば接する。珠紋は小さく、密に配する。2～4は丸瓦である。凹面に布目が残る。2、4は側面凹面側に面取りを施す。3は他と比べて、布目が粗い。他に圓化していないが、平瓦が出土している。二次焼成を受けており、凹面に煤が付着している。

これらの遺物から12世紀末～13世紀の時期が与えられる。



図28 4トレンチ 3溝 出土遺物

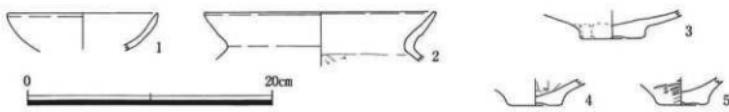


図29 4トレンチ 5溝 出土遺物

5溝（図27 図版5-4）

調査区の中央で検出された。ほぼ東西にのびる溝である。幅1.2m、深さ0.4mを測る。溝は断面台形を呈し、北側は2段落ちになる部分がみられた。埋土は2層に分かれる。上層は灰褐色の細砂混シルトで、下層（断面②、③）は中～粗砂で、底に細砂が溜まる。水の流れがあったことが分かる。

遺物は出土しているが、細片で時期を特定できるものではなく、また、下層の遺物が混入している。

『尺度I』では、第3面に対応する4-2面で、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての用水路と考えられる溝を多数検出している。5溝に直接つながる溝はないが、5溝もおそらく、これらと同じ機能をもつ溝と考えられる。

出土遺物（図29-1～5）

1は土師器椀、2は土師器甕である。3は壺、4、5は甕の底部である。5は外面にタタキを施す。

流路

調査区南側で流路を検出した。粗～細砂を埋土とし、ラミナがみられる。この流路は前述のとおり、掘削していない。また、南側はスロープの基礎部分が残っており、調査区南側に接する道につながっていたため、除去できなかった。しかし、最終段階で西側にサブトレンチをいれて、断面観察を行っている。この部分では下面の第4面でも流路がみられる。

4-2層は南に向かって厚く、南側では3層に細分できる。これは南側が低く、谷地形を呈しているためと考えられる。下層は特に砂礫を多く含んでいる。断面観察の結果、各土壤化層上面で流路の肩を確認することができた（図8）。4-2層からは弥生時代～庄内式期の遺物が出土している。

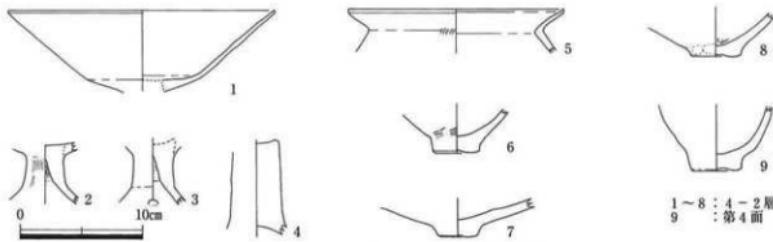
出土遺物（図30-1～9）

弥生時代～庄内式期の遺物が出土した。

1～4は高杯である。1は杯部が深く、口縁部が直線的にのびる。庄内式期後半の時期が与えられる。2～3は脚柱部のみである。2は裾部に向かって緩やかに広がる。脚柱部外面に縦方向のヘラミガキを施す。3は裾部に屈曲して広がる。4は中実で筒状を呈する。

5は庄内式甕である。生駒西麓産の胎土をもつ。6～8は底部である。6は甕で外面にタタキを施す。7は壺底部である。小さい底部から大きく体部が広がる。

8は鉢あるいは壺の底部である。9は小型の鉢である。上半分が欠損しているが、底部は平らで体部はやや内湾ぎみに上方に広がる。



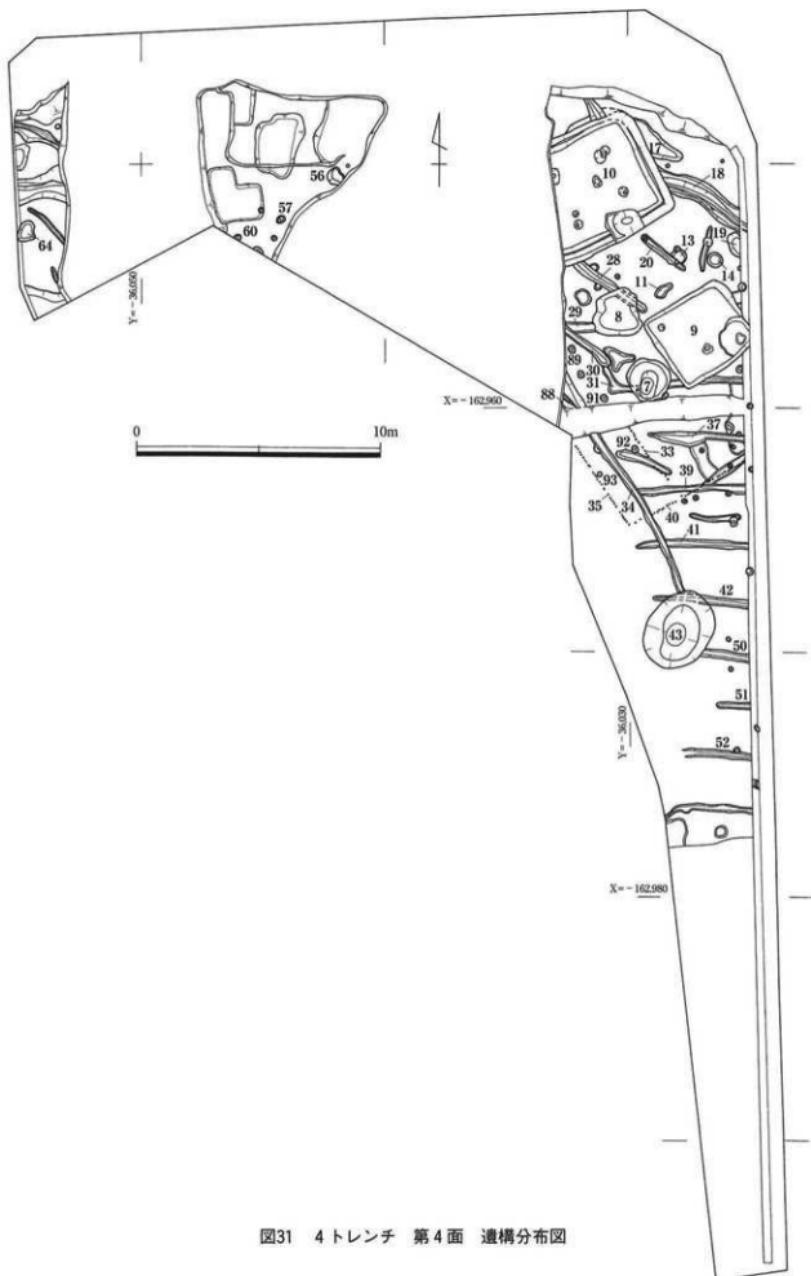


図31 4 トレンチ 第4面 遺構分布図

第4面（図31 図版6-1、2）

4トレンチでは4-2層掘削面は7層に至り、第5面に帰属する遺構もこの面で検出されることになる。調査区西側は、T.P.+37.9mと高く、調査区の北側は37.55m、調査区南側は掘削できた部分で37.1mを測る。かく乱に挟まれて遺構面が遺存している部分はT.P.+37.55mを測る。調査区は西から東へ、北から南へ傾斜している。

堅穴住居2棟、掘立柱建物1棟の他、ピット、溝、小溝群、井戸、土坑、杭列と多くの遺構を検出した。調査区の約半分はかく乱により遺構の検出には至らなかったが、本来は同様に遺構が密集していたと考えられる。先述のとおり、調査区南側は掘削深度の安全を保つため、面的な調査はできていない。

堅穴住居

調査区北東側で2棟の堅穴住居を検出した。

9堅穴住居（図32 図版7-1～4）

3.7m×3.3mの方形の住居である。深さは、最終面（基底面）までで、0.2mを測る。埋土は大きく3層に分けることが出来る。上層は住居の覆土である黒褐色の砂礫混じりシルトである（断面①、②）。中層は黒色の細砂混じりシルト（断面③）である。当初、貼床の可能性を考えたが、この住居は火災住居の可能性が高く、特に中層には炭が多く含まれていることから、住居廃絶時直後の堆積層と考える。③上面で、一旦精査を行ったが、明瞭な遺構は検出できず、更に③下面で精査を行った。この面が住居の床面と考えられる（図32上段）。床面より下層（断面⑥）はベース土がよごれたような状況であり、明確に貼床と認識できなかったが⑥の下面が住居基底面にあたると考えられる（図32下段）。

住居床面（図32上段）

土坑、壁溝、ピットを住居内で検出した。床面には、薄く炭が広がっている。

87土坑は住居東隅に位置しており、コーナー部分は調査区外に広がるが、1.5m×1.4mの隅丸方形を呈する。深さは0.1mと浅く、埋土は住居覆土より濃い黒色を呈し、細砂混じりシルトである。土坑上面で壁溝が確認できたことから、住居機能時にはこの土坑は埋まっていたと考えられる。しかし、住居のコーナー部分で内接していることから、住居に関連している可能性も考えられ、土坑の性格については、問題が残る。

98土坑は住居の中心より南東側に位置している。直径約0.5mを測り、上層は炭を多く含んでいる。土坑の底部は中心直径0.1m程の円形に窪む。

住居の四周には壁溝をめぐらしている。壁溝はやや住居の壁より外側に斜めに張り出す部分もみられた。幅は狭く0.2m前後を測る。

104ピットを西のコーナー付近で検出した。ピットは浅く、他に対応するピットが検出されていない。主柱穴にあたるような柱穴ではないと考える。

基底面（図32下段）

中央が僅かに高く四辺に向かって傾斜している状況がみられた。ピット、溝、土坑を検出した。

ここで検出された105溝などは、周辺にみられる耕作溝と考えられ、住居に切られている。ピットは117、118、120ピットなど直径が小さく、比較的深いものが多い。24土坑は住居に切られる土坑である。ここで検出された遺構は住居基底面に伴うというよりむしろ、これに切られた遺構が残存していたと考えられる。

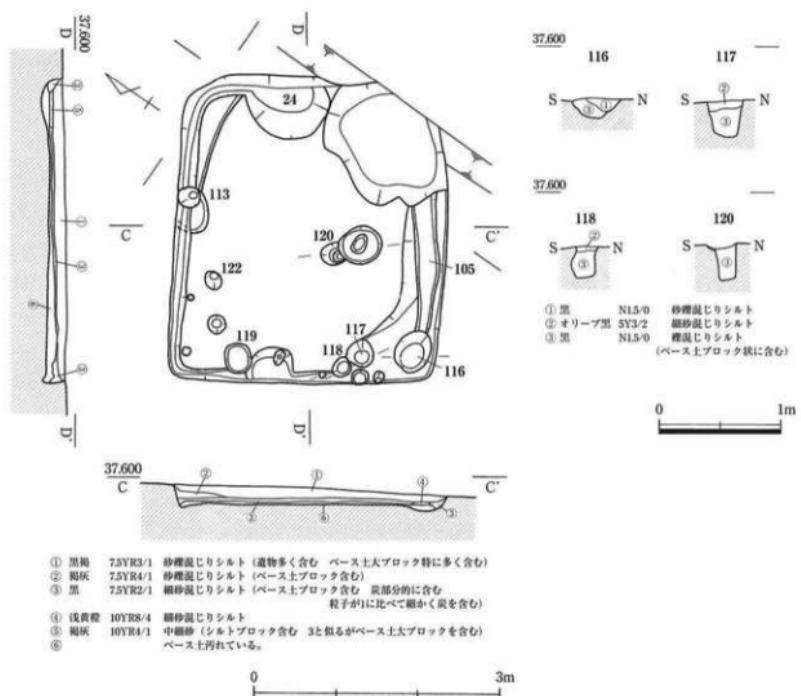
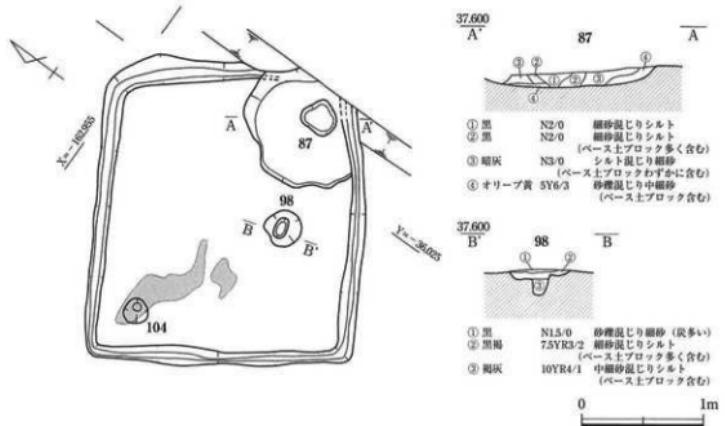


図32 4トレンチ 9竪穴住居 平・断面図

出土遺物（図35-1～4 図版15）

いずれも、埋土からの出土で、住居床面から出土したものはない。

1は大型の鉢である。口縁部は大きく、やや内湾ぎみに上外方に広がり、端部は上方につまみあげる。内面はヘラケズリを施す。2は高杯脚柱部、3は底部、4は壺口縁部である。時期の確定は困難であるが、庄内式期後半～布留式期初頭の時期が与えられる。

10堅穴住居（図33、34 図版8-1～4）

9堅穴住居の北西に位置している。9堅穴住居と軸はほぼ平行しており住居間の距離は3.3mを測る。5.0m×5.2m以上の方形の住居である。西側はかく乱によって遺存しない。住居の輪郭は比較的容易に検出することができたが、多くの遺構が切りあっている状況がみられた。埋土も近似しており、その前後関係の判断は困難だったが、断面観察の結果、大きく3つの遺構が切りあっていることがわかった。最も新しいのは堅穴住居である。住居の四周に2列の壁溝が検出された。その切り合いで外側の壁溝が新しいことが分かり、建物を拡張したと考えられる（断面B-B'、断面観察のアゼを残し、平面は数cm下げたため、プランでは表せていない）。主柱穴は4本で2時期分確認された。

堅穴住居（新）に伴う遺構は70壁溝、68土坑、85、72、71、79ピットおよび76炉である。住居の中央は遺構検出段階で既にベース面が露出しており覆土はほとんど確認できなかった。

68土坑は住居の南辺中央より東側に位置する。1.5m×1.1mを測り、不定形な土坑である。西方は2段に落ち、深さ0.4mを測る。この西側部分で庄内式壺が出土している（図34 出土状況図）。壺は土坑の底から若干、浮いた状態で出土している。

76炉は住居の中央で検出された。南北にやや長く約0.6×0.4mを測る。深さは8cmと浅い。埋土は

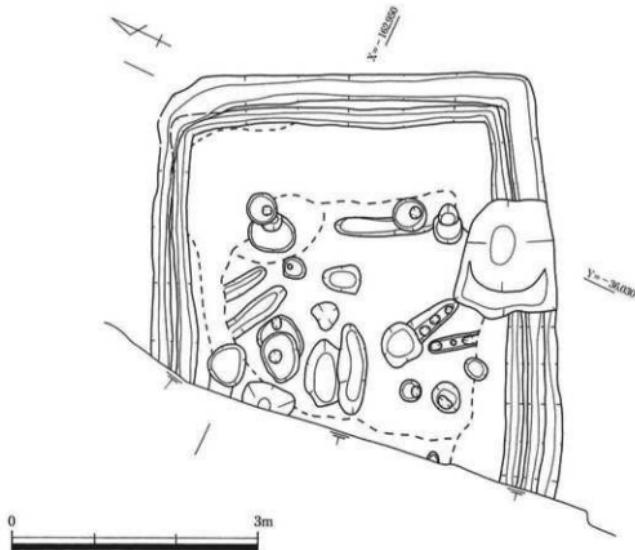
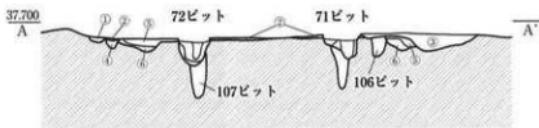
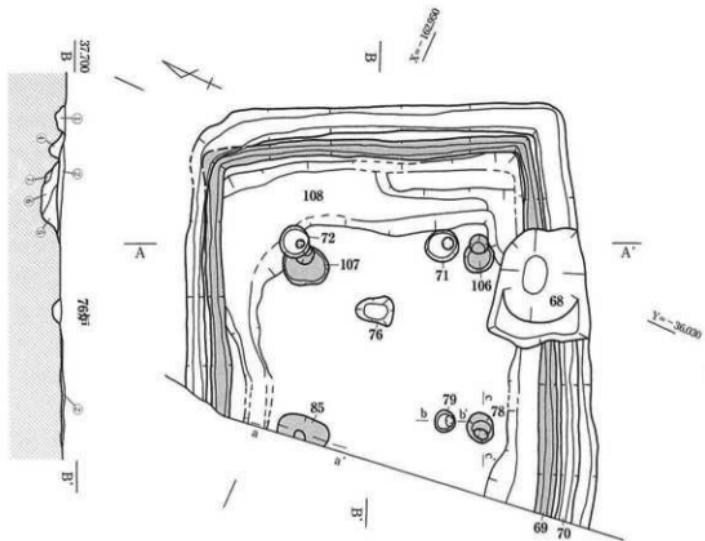


図33 4 トレンチ 10堅穴住居 平面図（1）



- | | |
|-------|--|
| ① 黒泥 | 10YR3/2 砂裡混じり細砂 (Mn多く含む) |
| ② 広葉樹 | 10YR4/2 砂裡混じり細砂 (ベース土上 (黄根シルト) ブロック状に含む ブロック大) |
| ③ 黒泥 | 5YR2/1 砂裡混じり細砂 (灰、遺物多く含む) |
| ④ 暗褐色 | 10YR3/3 砂裡混じり細砂 (ベース土上 (黄根シルト) ブロック状に含む ブロック小) |
| ⑤ 黑 | 75YR2/1 砂裡混じりシルト (ベース土 (浅黄シルト) ブロック状に含む ブロック大) |
| ⑥ 開灰 | 5YR4/1 シルト混じり細砂 (ベース土ブロック多く含む) |
| ⑦ 底泥 | 75YR6/2 細砂 |

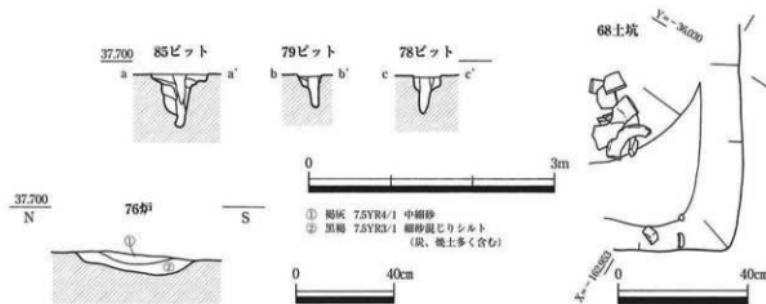


図34 4 トレンチ 10竪穴住居 平面図 (2)・断面図

上層が褐灰色中細砂、下層が炭、焼土を多く含んだ黒褐色の細砂混じりシルトである。平面ではドーナツ状に下層がみえた。

主柱穴は南側では79ピットと78ピット、東側では71ピット、106ピットのそれぞれ2基のピットが検出された。新古どちらの住居に伴うか判断は難しい。(新)の住居が拡張していることから、外側の78ピット、106ピットがこれに伴う可能性も考えられるが、68土坑に近接してしまう点、72、71ピットの中心と85と79ピットの中心を結んだところで炉が位置していることから、71、79ピットが対応するものと考えたい。北側は107ピットを切る72ピットが対応する。西側は85ピットである。

豊穴住居(古)は住居(新)よりひとまわり小さく4.0m×4.3m以上を測る。

これに伴う遺構は69壁溝、107ピット、78ピット、106ピット、85ピットである。いずれも柱痕部分は非常に深い。107ピットは72ピットにきられており、断面A-A'では深い柱痕部分が確認できる。また、下層に83土坑がある。ピット掘削の際に一部土坑を誤って掘削してしまい掘方の遺物が混入した可能性がある。71ピットは掘り直されたと考えられる。深い柱痕跡が対応するピットと考える。85ピットは掘り直しが行われており、ほぼ同じ位置に(新)住居の柱を立て替えたと考えられる。一部、柱が遺存していた。(古)住居のピットはいずれも深いが、掘方自体はさほど深くなく、柱部分を小さく深く掘り下げている。あるいは、柱を打ち込んだのであろうか。(新)住居でも78ピットは同様な状況である。なお、(古)住居に対応する炉は不明である。

この豊穴住居に切られる遺構として108溝がある。溝は幅0.3~0.8mで、東側は特に幅が広い。深さは約0.2mと浅い。西側はかく乱で切られているため、四隅したかは不明であるが、住居の内側にはほぼ沿う形で検出した。主柱穴より内側には入らない。住居に関連するものと考えられるが68壁溝にも切られていることから、(古)住居機能時には埋まっていたと考えることが出来る。

この溝の性格について2つの可能性を考えた。一つは(古)住居に更に先行する住居が存在し、その壁溝である可能性である。ただし、幅が非常に広い点、対応する主柱穴が検出されていない点と問題が残る。もう一つは住居基底面に伴う溝である可能性である。ただし、住居四隅のみを更に浅い溝状に掘り下げ整地した点について問題が残る。いずれにしても、住居に関連した遺構と考えられる。

さらにこの108溝に切られる18、31溝が検出された。これらの遺構については、溝の段で述べる。

その他、床面精査の際に浅く幅の狭い溝を数条検出した(図33)。これら溝は小溝群の一部と考えられる。住居との切り合いが確認できた部分では、溝が先行する。

出土遺物(図35-5~17 図版15)

68土坑を中心に遺物が出土した。しかし、住居は既にその覆土の大半を削平されており、床面上での遺物は確認できなかった。

5~8は10豊穴住居から出土した土器である。5は壺の口縁部である。端部のつまみあげは明瞭である。6は壺の口縁部である。口縁端部は折り曲がって下方に重れる。7、8は底部である。7は壺の底部である。8は平底で外面にタタキを施す壺である。

9~11は68土坑から出土した壺である。9は口縁端部のつまみあげが明瞭である。体部の調整は磨滅のため不明。ゆがみが非常に大きい。10、11は生駒西麓産の胎土を持つ、庄内式壺である。口縁部は11は比較的長く、端部は上外方につまみ上げる。10は端部が断面台形に近い。10、11とも体部外面に細かいタタキを内面はケズリを施す。

12は70壁溝から出土した壺口縁部である。口縁端部にはきざみを施し、上面には波状紋を施す。

13は78ピットから出土した壺である。生駒西麓産の胎土をもつ、庄内式壺である。口縁部端部はわずかにつまみあげる。体部外面は細かいタタキを施し、その後、斜め方向のハケメを施す。内面はヘラケズリである。14は71ピットから出土した底部である。

15～17は108溝から出土した土器である。15は高杯脚柱部である。16は壺である。頭部外面に竹管紋を施す。17は底部である。底部は小さく、体部が大きく開く。外面にタタキを施す壺である。

68土坑やピットから出土した庄内式壺は底部が欠損しているものの、体部は球形化しており、10堅穴住居は庄内式期後半の時期が与えられる。

掘立柱建物

掘立柱建物1(図36)

調査区中央で検出した。9堅穴住居に並行して西側に位置している。建物を構成するピットは89、91～93である。主軸を北西～南東にもつ。1間×2間確認したが、調査区外にひろがる可能性も考えられる。柱間は南北が広く2.4～2.5mを測り、東西は狭く1.8mを測る。ピットはいずれも、直径25～35cmの円形を呈し、深さは20cm前後である。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂を主体としている。遺物の出土は少なく、時期を特定できない。

杭列

33、35、40杭列(図版11-1～3)

調査区では非常に小さい杭の痕跡が無数に見られた。大多数はランダムで、杭列として認識できるも

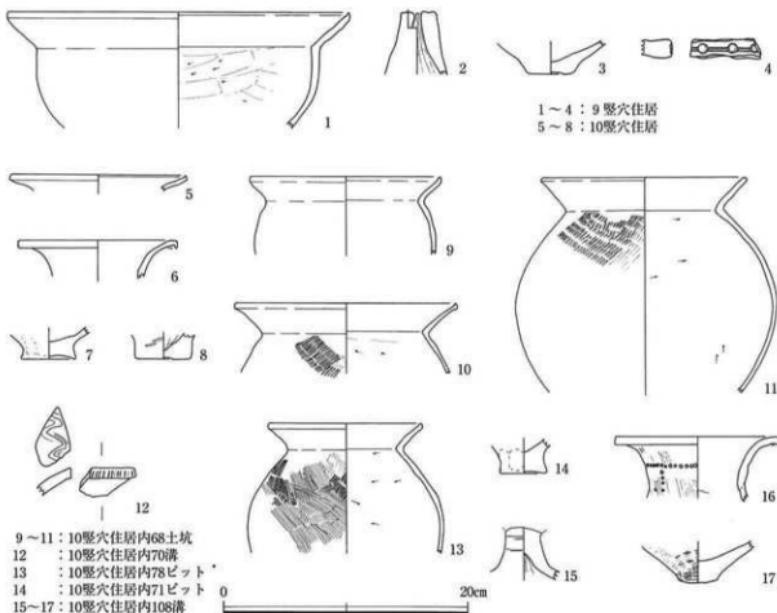


図35 4トレンチ 堅穴住居 出土遺物

のではなかったが、調査区中央付近で杭列として認識できるものがあった（図版11）。40杭列、35杭列は「L」字状に配され、35杭列に平行して33杭列が「L」字の内側に配されている。杭列という性格上、遺物の出土は非常に少ないが、整然と配されていることから、同時期と考える。杭は直径5cm前後で、杭間は約10cm（心心）で非常に密に配されている。断面観察では、先端は尖っており、掘方もなく、打ち込まれたものと考えられる（図版11）。確認された範囲で、33杭列は3.0m、35杭列は4.0m、40杭列は5.5mを測る。33杭列は他の2本に比べて列が若干乱れていた。これら杭列は垣根のようなものが推定でき、「L」字の中と外を区画する性格が考えられる。

建物と杭列

そこで、上記の杭列の中を整理することとする。10堅穴住居は南西辺がかく乱によって不明ではあるが、ほぼ、南コーナーに近いと考えられる。9、10堅穴住居はこの杭列にはほぼ平行しており、杭列の延長上内に収まる。9堅穴住居と10堅穴住居は東北辺を揃えてほぼ並行しており、その間は約3.3mと近接しているものの、同時期に並存した可能性が考えられる。9堅穴住居は10堅穴住居に比べて、小型で主柱穴がはっきりしない。あるいはいわゆる住居以外の性格をもつ建物である可能性も考えられる。

また、掘立柱建物1も堅穴住居、杭列とはほぼ平行している。調査区の西側へ建物が広がる可能性はあるが、検出された範囲では、35杭列と33杭列間にちょうど収まっている。ただし、非常に近接しており同時に並存していれば、掘立柱建物は、いわゆる掘立柱建物ではなく、2本の平行した柵列、あるいは、いわゆる建物以外の構造物と考えられる。

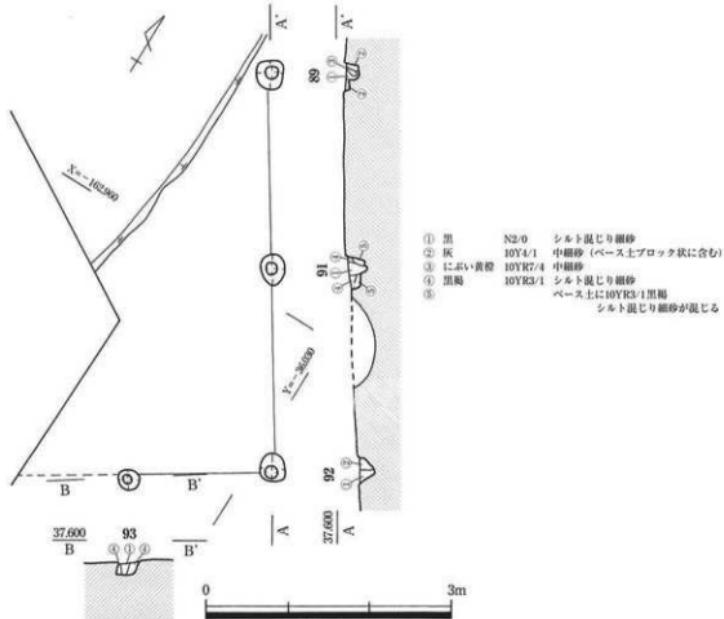


図36 4トレンチ 掘立柱建物1 平・断面図

ピット

調査区では掘立柱建物1以外にも多くのピットを検出したが、建物等を復元するには至らなかった。調査区西側では島状に造構面が残存していた。包含層は削平されていたが、ピットを7基検出している（図37 図版9-3）。このうち56ピットは他のピットより大きく35cmのやや不定形な円形を呈する。深さは20cmを測る。このようなピットは1基しか検出されていないが、周辺の造構面がかく乱によって大きく削平されていることから、本来は組み合うピットが存在していたと考えられる。57ピットは直径30cm、深さ20cmを測る。67ピットは直径25cm、深さ25cmを測る。

その他、直径が20cm前後と小さいが、比較的深さがあるピットが、特に調査区の東側に集中してみられた。これらのピットは、本来は建物、あるいは構列を構成するものであった可能性が高い。ただし、ピットの直径が小さいことから、規模の小さな建物であったと考えられる。

溝

18溝（図38 図版9-1、2）

10堅穴住居に切られる溝である。幅0.9m、深さ約0.4mを測る。東側は二段落ちになっており、北側に屈曲する。屈曲部分は土坑状の窪みがみられる。83土坑は溝の底部よりやや深い。この土坑状の窪みは10堅穴住居内72、107ピット、108溝に切られており、特に107ピット掘削時に誤ってこの土坑も一部掘削してしまった。そのため、遺物が若干混じってしまった可能性がある。溝の埋土は黒褐色の砂疊～細砂混じりシルトを主体とする。83土坑は上層が暗灰色の細砂混じりシルトを主体とし、下層はにぶい橙色シルト混じり細砂を主体とする。

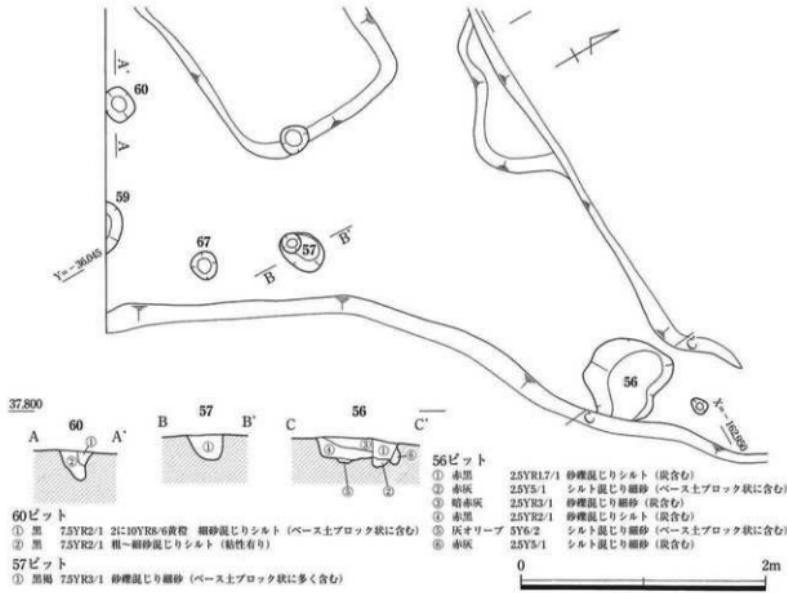


図37 4トレンチ ピット 平・断面図

出土遺物 (図41-1~13 図版15、16)

1~7は18溝内の83土坑から出土した遺物である。遺構の切り合いが多く、遺物が混入している可能性もある。1は椀形高杯である。脚部は欠損している。杯部は外面にヘラミガキを施す。2は小型の壺である。口縁部は外反して開き、底部は平底である。粘土の難ぎ目が明瞭に残る。体部外面はタタキ、内面は上半に横方向のハケメを施す。3~6は底部である。3は壺である。小さい底部で、体部外面は密にヘラミガキを施し、内面はハケメを施す。4は脚台部に指オサエ、体部外面はヘラミガキを施す。6は内面にハケメがみられる。7は広口壺である。胴部中央に最大径をもつ。外面は綫方向のヘラミガキがわずかに残る。

8~13は18溝から出土した遺物である。8、9は高杯である。8は有稜高杯で、杯部は深く体部から口縁部は明確に屈曲し、口縁部は外反する。脚裾部は欠損しているが、脚柱部は綫方向のヘラミガキを

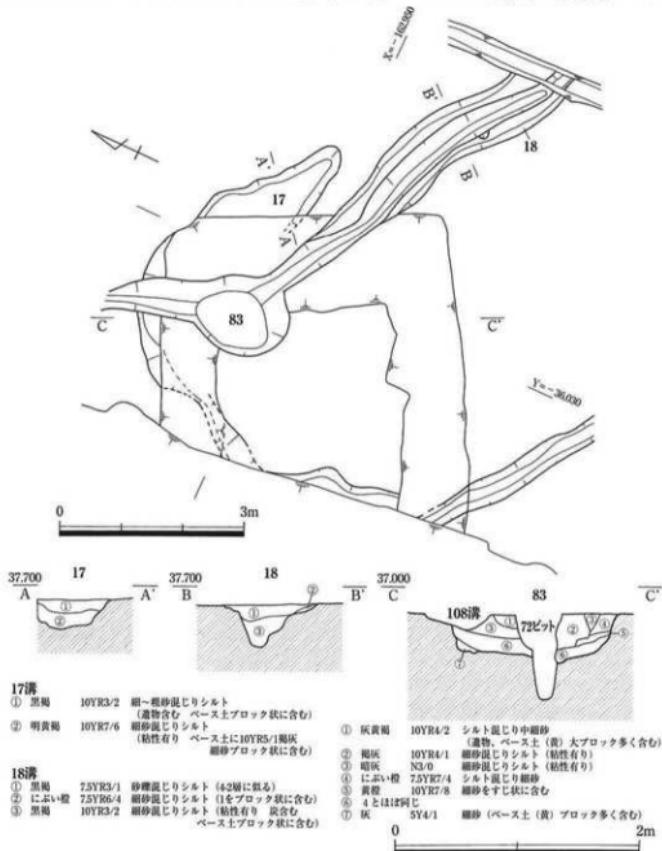


図38 4 トレンチ 17、18溝、83土坑 平・断面図

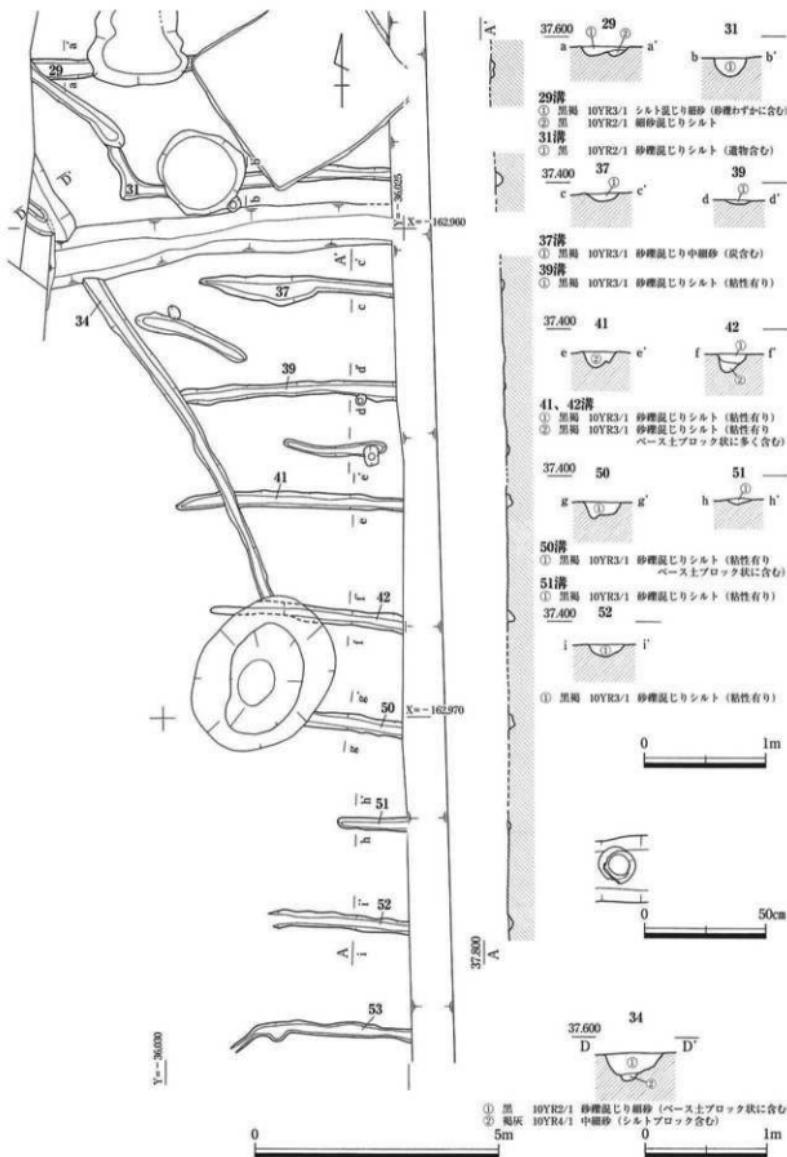


図39 4 トレンチ 小溝群1 平・断面図

施す。9は脚部のみの出土である。裾部は明確に屈曲して大きく広がる。摩滅のため調整は不明瞭である。10は甕である。底部は小さい平底で体部外面は粗いタタキを施す。底部内面は磨滅が著しいが、放射状に工具の当たり痕がみられる。11、12は底部である。13はミニチュア土器の高杯である。杯部は欠損している。3方透かしの表現がみられるが、一か所は貫通していない。

以上の遺物から18溝および83土坑は弥生時代後期末～庄内式期前半でも古い時期を考えたい。

17溝（図38）

同じく10堅穴住居に切られる溝である。溝は南側に屈曲する。18溝に比べて浅く、断面形も一定せず、特に西側は痕跡を僅かにとどめるのみであった。

出土遺物（図41-14）

遺物は非常に少なく、図化できたのは1点のみである。14は甕の底部で、外面にタタキを施す。

34溝（図39）

調査区中央で検出した。北西～南東方向の溝で、幅は約0.5～0.2m、深さは約0.25mを測る。検出した範囲で約12mを測る。溝は後述の小溝群1、2を切っており、また、43井戸より南側では検出できなかった。溝の下層に薄く中細砂が堆積しており、水が流れていたと考えられる。遺物の出土は少ないので、以下2点が図化できた。

出土遺物（図41-20、21）

20は高杯である。脚柱部内面にシボリ痕がみられる。21は庄内式甕である。生駒西麓産の胎土をもつ。口縁端部はわずかにつまみ上げる。

小溝群

調査区では等間隔に並行する溝を検出した。これらの溝のまとまりを小溝群として扱う。

小溝群1（図39 図版9-4）

29、31、37、39、41、42、50～52溝で構成される。溝はほぼ東西方向で各溝の間は約1.8～2.0mを測る。溝の深さは0.15m未満と浅く、底面は凸凹している。また、41溝や42溝の比較的深いものと、39溝、51溝等の浅いものがある。39、42溝からは土師器甕が口縁部を逆さまにした状態で出土した。

小溝群2（図40 図版9-3）

20、28、30、88溝で構成される。南東～北西方向の溝である。各溝の間は2.0～2.2mを測る。28溝は

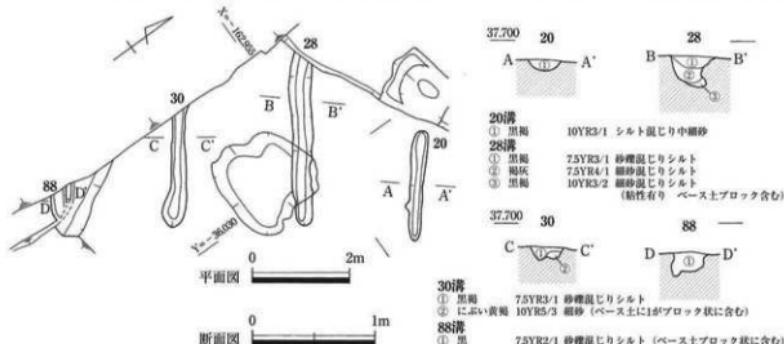


図40 4 トレンチ 小溝群2 平・断面図

約0.3mと他の溝より深く、下側で斜めに広がる。溝は平行するのみではなく、溝の南東端がそろう。

また、小溝群1、2は30、29溝の切り合い状況から小溝群1が先行する。

これまでの調査でも、同様の小溝群（『尺度I』ではアミダクジ状遺構とされているものも含む）が検出されており、畠等、耕作に伴うものとされている。これらの溝も同様な性格が考えられる。

出土遺物（図41-15～19 図版16）

小溝群からの遺物の出土は少なく、図化できたのは15～19である。15は31溝から出土した高杯である。杯部は欠損している。脚部は脚柱部が緩やかに広がり、裾部が明確に屈曲し広がる。脚柱部内面はシボリ痕が、外面にはヘラナデの痕跡が残る。裾部内面はハケメを施す。庄内式期の時期が与えられる。16は39溝から出土した壺である。口縁部は長く、外反する。17は42溝から出土した壺である。口縁部の屈曲は弱く、明瞭な後を持たない。18、19は30溝から出土した壺である。18は口縁部のみで、口縁部は短く、口縁端部は強くなる。器壁は厚い。19は外面にタタキ、内面にハケメを施す。

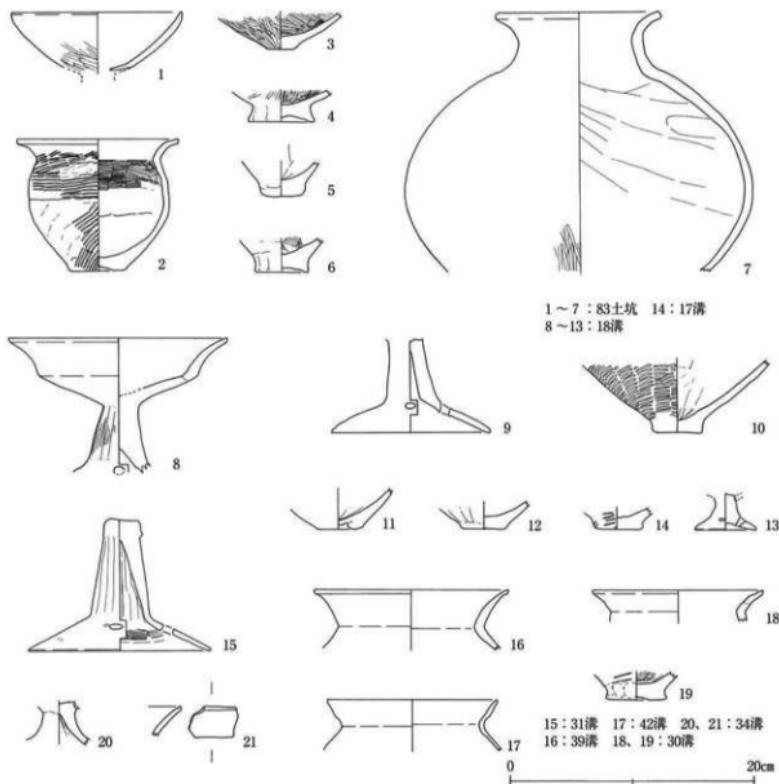


図41 4トレンチ 溝 出土遺物

井戸

43井戸 (図42 図版10-1、3)

調査区の中央で検出された。2.5m×3.2mの長楕円形を呈する。深さは約1.3mを測る。溝は中程まで傾斜が緩やかであるが、中程から断面台形状に落ち込む。上面の第3面でこの井戸と同じ位置で浅い落ち込み状遺構を検出しており（6落込み）、第3面段階においても、この井戸は完全には埋まっておらず、若干の窪みとして残っていたと考えられる。井戸の埋土は大きく3層に分層することが出来る。上層（断面①）は、黒褐色砂礫混じりシルトで4-2層に似ている。中層1（断面②～⑤）は、間に浅黄色シルト層③、炭層が薄くみられる。特に④で非常に多くの土器がみられた。中層2（断面⑥～⑩）は、灰～暗灰色砂礫、細砂混じりシルト層である。特に⑦で遺物が多くみられる。中層2では木材も多くみられた。下層は⑪～⑬である。層位的に遺物の取り上げはできなかったが、遺物は主に中層から出土しており、④と⑦に集中している。下層からは遺物の出土は少ない。

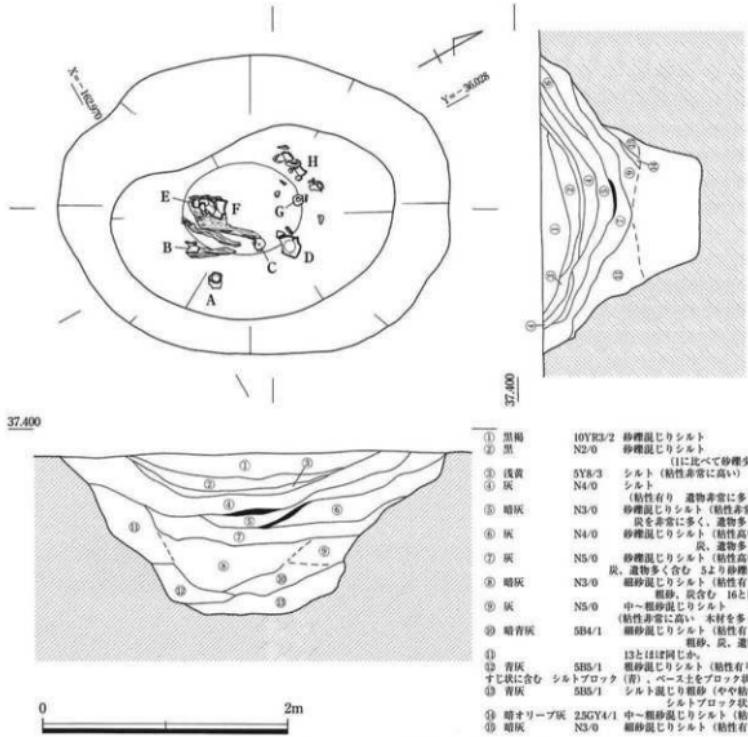


図42 4トレーンチ 43井戸 平・断面図

出土遺物（図43～48 図版17～19）

43井戸からは多くの遺物が出土した。

図43-1は小型丸底壺である。頸部はあまりすばまらず、口縁部が開く。体部内面は横方向に細かいヘラミガキを施す。2、3は有段口縁鉢である。2は、体部外面下半はヘラケズリを施し、その後ナデを施す。3は体部内外面に横方向の細かいヘラミガキを施し、外面下半はヘラケズリを施す。4、5は小型の鉢である。短い口縁がやや内湾して上外方にのび、底部は尖底ぎみである。摩滅が著しく、調整は不明である。5は体部が皿状を呈し、底は平底である。

6は楕形高杯である。脚部は欠損、体部外面は横、あるいは斜め方向にハケメを、内面はナデを施す。7は高杯脚部である。太く、内湾ぎみに開く脚柱部から明確に屈曲して裾部が大きく開く。脚柱部内面はシボリ痕が明瞭で、外面は縦方向にヘラナデ後、横方向の細かいヘラミガキを施す。裾部外面は放射状にハケメ、内面もハケメを施す。8は高杯である。杯部は底部が比較的平らで、口縁部は直線的に上方にのびる。口縁端部は欠損している。脚部は太く、短い。杯部外面は横、あるいは斜め方向に、稜より下は縦方向にヘラミガキを施す。脚部外面は縦方向にヘラミガキを施す。周辺ではみられない器形である。

9は鼓形器台である。裾部内面はヘラケズリを施す。山陰系の可能性が考えられる。

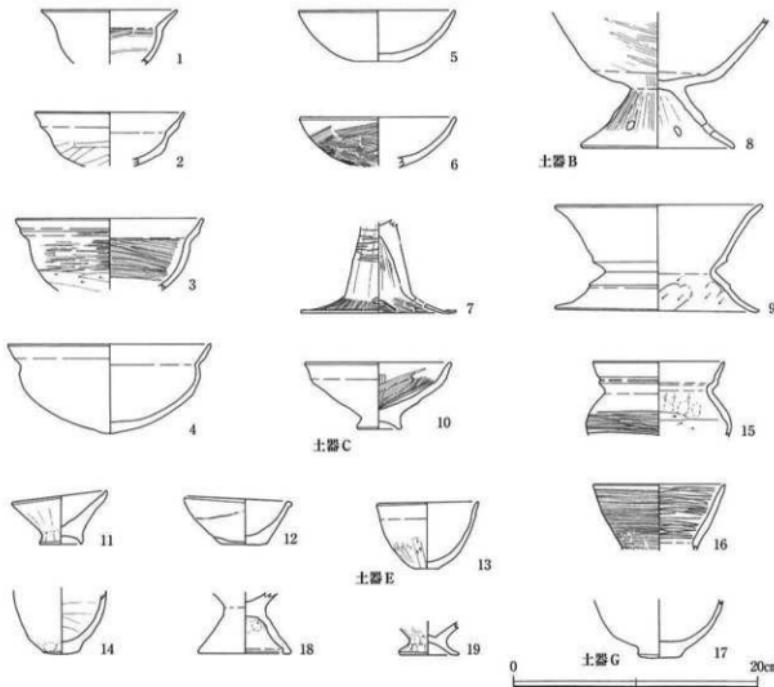


図43 4 トレンチ 43井戸 出土遺物（1）

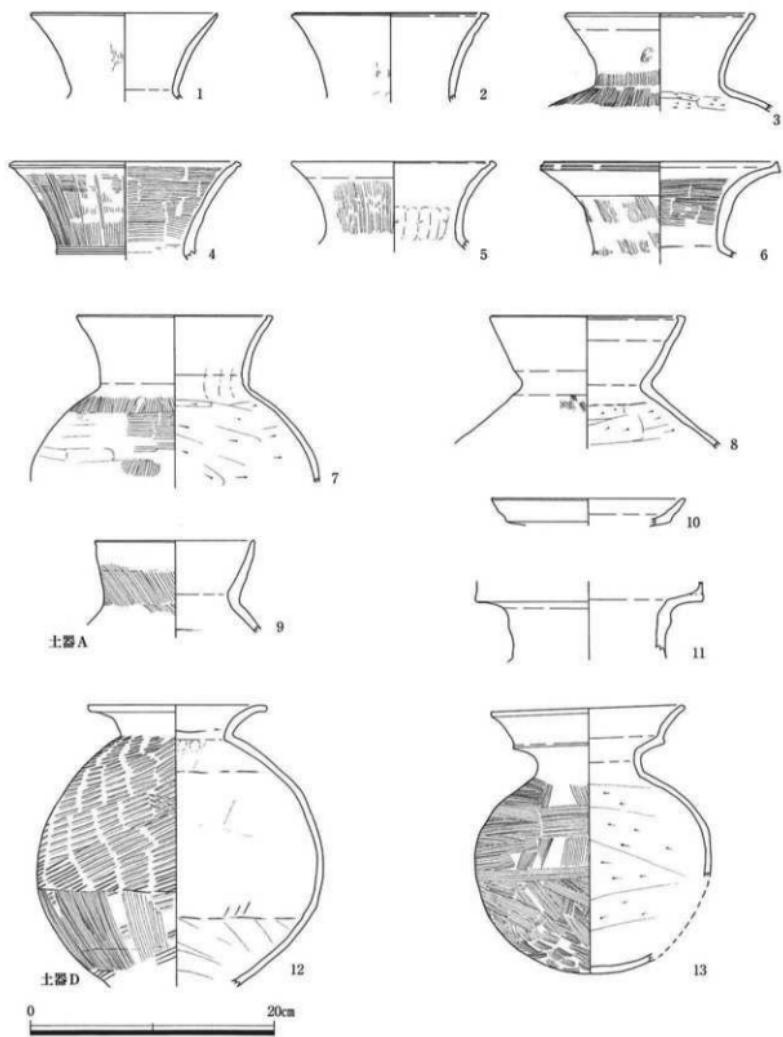


図44 4トレンチ 43井戸 出土遺物 (2)

10は台付鉢である。口縁部は屈曲し、上方にのびる。小さい脚台部を有する。口縁部は内外面ナデを施す。体部内面は縱方向にヘラミガキを施す。

11～13は鉢形のミニチュア土器である。10～13はいずれも白色で、似た胎土を有する。

14、15は小型の壺である。15は体部外面は肩部に横方向に細かいヘラミガキを施す。内面は中程から下はヘラケズリを施し、頭部下は指オサエが残る。16は直口壺である。頭部内外面ともに細かいヘラミガキを施す。17は鉢あるいは壺底部である。

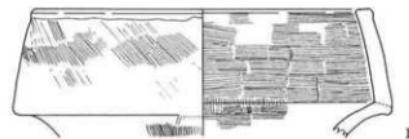
18、19は脚台である。19は製塙土器と考えられる。

図44-1～5、7～9は直口壺である。1～5は口縁部が外反あるいは外湾して上外方に開く。口縁端部は2～5がわずかに外傾する端面をもち、2、3、5は内側に、4は外側に肥厚する。摩滅が著しいものもあるが、頭部外面はハケメを施し、その後、ヨコナデを施す。ハケメは縱方向であるが、4はヨコ方向のハケメの後、縱方向にハケメを施している。内面は4で縱方向のハケメがみられる。

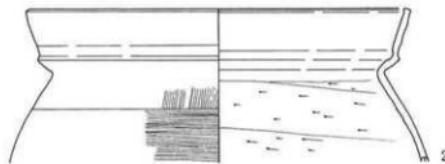
6は広口壺である。口縁部中程で大きく開き、端部は上方につまみ上げる。頭部外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向のハケメを施す。

7は口縁部の広がりが小さく、体部は丸みをもつ。口縁部は内外面ともヨコナデを施す。体部外面は縱方向のハケメ、肩部には横方向のハケメを施す。体部内面は頭部よりやや下からヘラケズリを施す。

8は口縁部が内湾気味に上外方に開く。体部は頭部から直線的に広がる。体部外面はわずかに縱方向のハケメが残り、内面は頭部よりやや下からヘラケズリを施す。



1



2

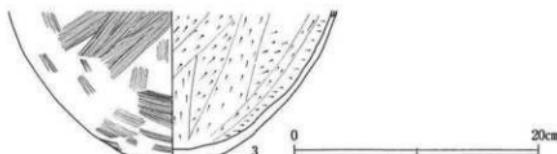


図45 4 トレンチ 43井戸 出土遺物 (3)

9は他に比べて口縁部が短く、内湾しあまり広がらない。口縁端部はそのままおさめる。口縁部上半は内外面ともヨコナデを施す。下半は外面が縱方向のハケメ、内面はナデを施す。

10は複合口縁壺である。口縁部は短く開く。11はまっすぐのびた頸部から明確に屈曲した口縁部を有する。口縁部端部は欠損しているが、上方にのびる。胎土に片岩を含んでおり、搬入品と考えられる。阿波地域でみられる器形に類似している。12は短い口縁部が大きく広がる。体部は最大径が下半にあるが、ほぼ球形である。体部外面は上 $2/3$ はタタキ、下はその後に、縱方向のヘラミガキを施す。内面は板ナデを施す。外面に煤が付着しており、煮沸具として使用されている。

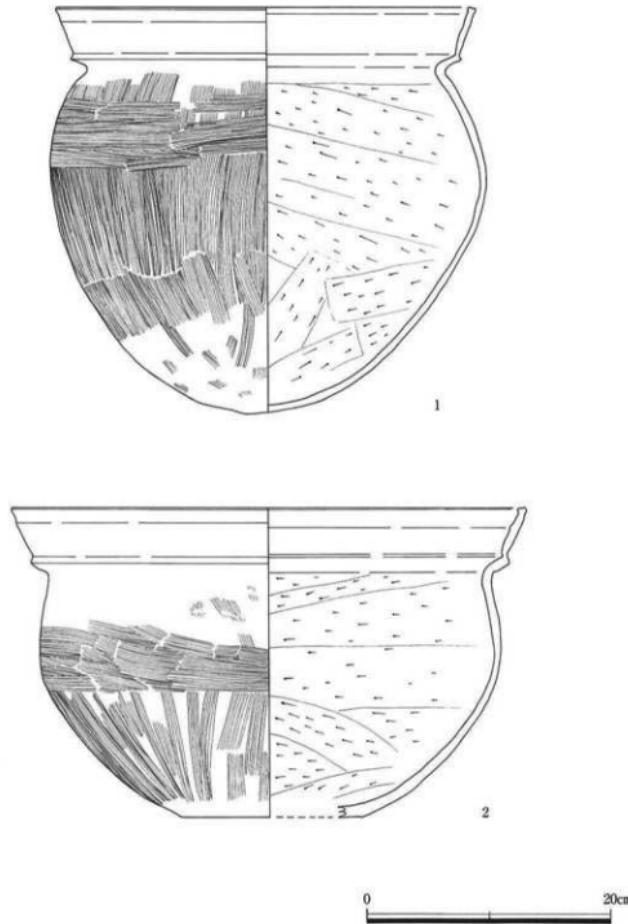


図46 4トレンチ 43井戸 出土遺物 (4)

13は複合口縁壺である。体部外面は縦方向のハケメを施し、肩部に横方向のハケメを施す。内面はヘラケズリである。山陰地域によくみられる器形である。

図45-1は大型の複合口縁壺である。口縁部外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向のハケメを施す。胎土に角閃石を含む。煤の付着がみられる。讃岐系の可能性が高い。

図45-2、図46-1、2は大型の複合口縁壺である。いずれも、胎土、焼成は似ている。図46-2は大きく平らな底部を持つ。調整は口縁部がナデ、体部外面は縦方向のハケメ、肩部に横方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。図45-2は大型の壺と考えられるが、大きな平底で、体部外面は斜め方向のハケメ、内面は縦方向にケズリを施す。いずれも山陰地域でみられるものに類似する。

図47-1~10は壺である。

1~4、6~8は生駒西麓産の胎土をもつ壺である。体部下半まで復元できる個体はない。基本的に口縁部は明確に屈曲して外反し、端部は上方へつまみ上げる。体部外面は細かいタタキ、内面は頸部直下からヘラケズリを施す。2、4は体部外面に細かいタタキのあと斜め方向のハケメを施す。1、3は口縁部内面にハケメが残る。3は口縁端部のつまみ上げが弱く、6はそのままおさめる。7は口縁部が非常に短く、頸部から強く屈曲して外反し、端部は、断面四角形を呈する。8は口径が大きく、器壁も厚い。口縁端部もつまみあげず、断面四角形を呈する。6~8は口縁端部をつまみあげるという、庄内式壺の特徴の一部を失っている。

9は口縁部が明確に屈曲して外反し、端部は上方につまみ上げ、外側に面をもつ。口縁部内面は横向のハケメ、端部付近は内外面とも横方向のナデを施す。体部外面は頸部にかけて縦方向のハケメ、内面にもハケメが残る。10は口縁部が受け口状を呈する。体部は不明である。

図48-1~11は布留式壺である。

基本的に、口縁部は内清気味で、端部は内側に肥厚し、外面を横方向にナデを施す。体部外面は縦、あるいは斜め方向のハケメ、肩部は横方向のハケメを施し、内面は頸部やや下からヘラケズリを施す。底部はいずれも欠損している。8は口縁端部をつまみ上げており、古色を示す。1、2、7、8は器壁が薄い。3、10は口縁部内面にハケメが残る。

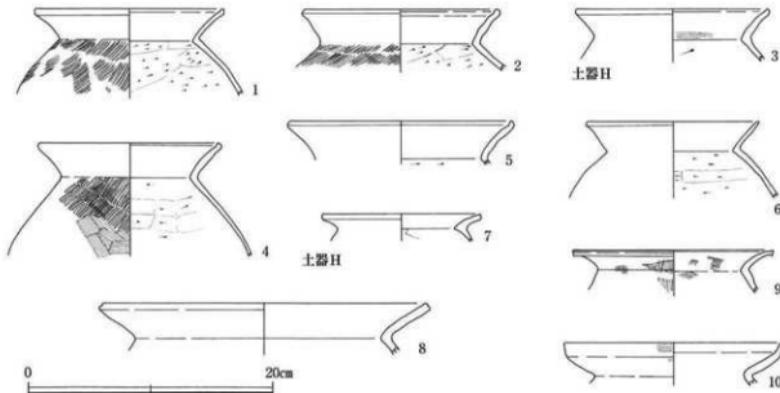


図47 4トレンチ 43井戸 出土遺物（5）

以上、43井戸から出土した遺物を概観すると、壺は図48に示したように、定型化した布留式壺が主体を占めている。図47-1～5で示した庄内式壺も一定量出土しているが、図47-6～8のように、口縁端部のつまみあげという庄内式壺の特徴の一部が不明瞭なものが含まれている。固化していないが、V様式系のタタキ壺と考えられる破片が数点確認できた。小型器種は、出土量は少ないが、図43-2、3の有段口縁鉢が存在している。

以上の特徴から、庄内式期末～布留式初頭の時期が与えられる。また、井戸からは、外来系と考えられる土器が一定量出土しており、注目できる。他にモモ核2点が出土した。

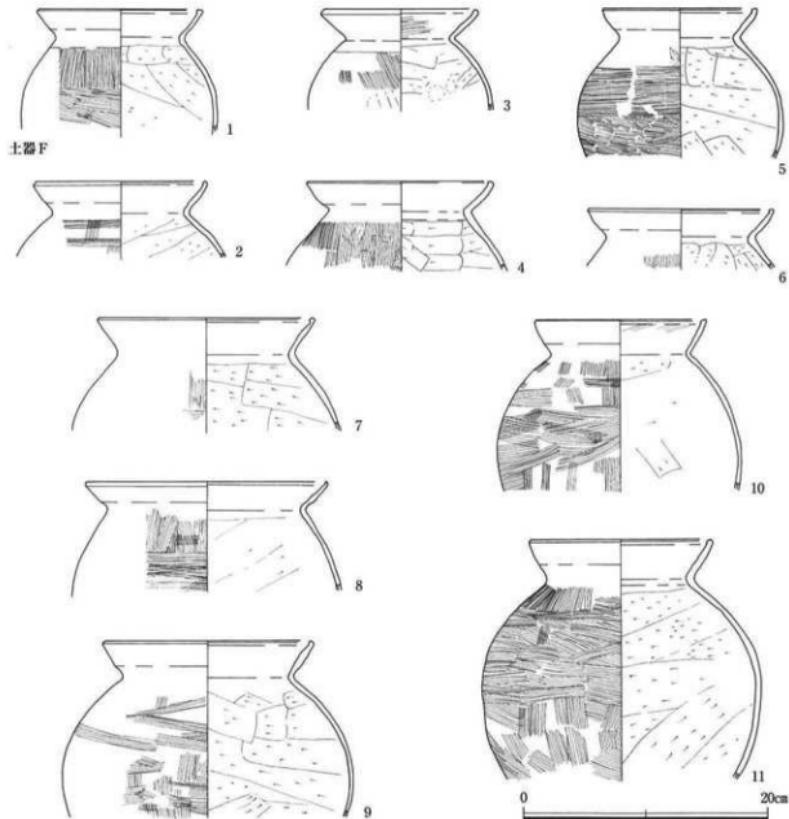


図48 4トレンチ 43井戸 出土遺物 (6)

土坑

調査区では多くの土坑を検出している。特に調査区北東側、竪穴住居周辺で多くみられた。

7 土坑 (図49、図版10-2、4)

調査区北東側、9竪穴住居の南西に位置する。1.5m×1.8mを測り、ほぼ円形を呈する。土坑は中央より南により一段下がる。深さは約0.25mを測る。4-2層掘削時に7土坑上面で、遺物が集中してみられた(図版10-2)。本来は4-2層中に遺構の切り込み面があったためと考えられる。土坑の底部付近では遺物はあまり出土していない。埋土は上層(①、②)は黒～黒褐色の砂礫混じりシルトで、下

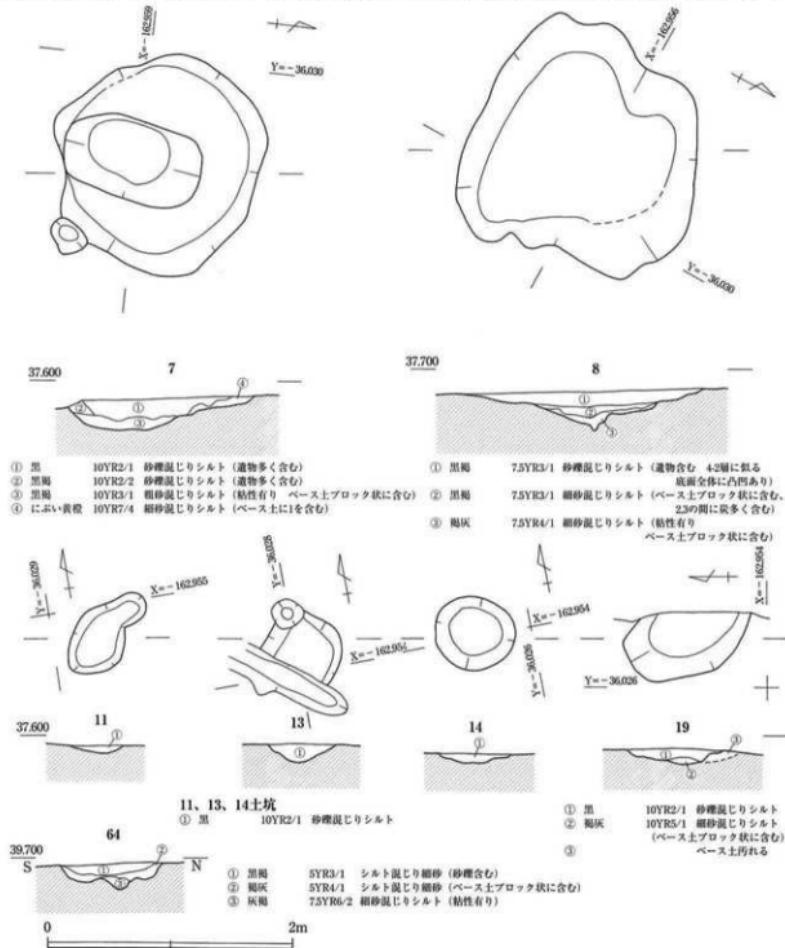


図49 4 トレンチ 土坑 平・断面図

層（③）は黒褐色の粘性のある粗砂混じりシルトで、ベース土をブロック状に含む。7土坑は31溝をきる。

出土遺物（図50-2～4 図版16）

2は小型丸底壺である。体部外面は縦、斜め方向のハケメののち、肩部に横方向のハケメを施す。内面はナデ。口縁部は内面に横方向のハケメを施す。3は大型の壺底部である。底部は外側に粘土を貼り付けて成形しており、その部分で剥離している。4は大型の鉢である。口縁部は短く、やや内湾する。体部外面に板ナデを施す。2の小型丸底壺は口縁部が発達しており、布留式期前半の時期が与えられる。

8土坑（図49）

7土坑の北西に位置する。2.0m×1.8mの不定形を呈する。深さは約0.3mを測る。底面は全体に凸凹がみられる。上層（①、②）は黒褐色の砂疊、細砂混じりシルト、下層（③）は粘性のある褐灰色細砂混じりシルトである。上層と下層の間に炭が多くみられる。8土坑は29溝をきる。遺物の出土は少なく、図化できたのは高杯1点である。

出土遺物（図50-1）

1は高杯である。杯部は欠損している。内面に絞り痕が残る。

11、13、14、19土坑（図49）

調査区北東側、9竪穴住居と10竪穴住居の間に位置している。

11土坑は0.5m×0.8mを測り、やや不定形な長楕円を呈する。深さは5cmと浅い。13土坑は約0.65mの隅丸方形を呈する。深さは約0.15mを測る。14土坑は直径0.6mの円形を呈し、深さは約8cmと深い。埋土はいずれも、黒色の砂疊混じりシルトで、炭を含む。

19は東半分が調査区外に広がるが、直径約1.0mの円形を呈すると考えられる。深さは、約0.1mと浅い。埋土は上層が、他の土坑と同様、黒色砂疊混じりシルト、下層は褐灰色の細砂混じりシルトで、ベース土をブロック状に含む。

いずれも、遺物の出土は少なく、図化できるものはない。

64土坑（図49）

調査区北西側に位置する。約0.9mの隅丸方形を呈する。深さは約0.2mを測る。底面が凸凹している。埋土は上層が黒褐色シルト混じり細砂、下層は褐灰色シルト混じり細砂でベース土をブロック状に含む。底面の凸凹した部分には灰褐色の粘性のある細砂混じりシルトである。遺物は出土しているものの、細片で図化できるものはない。

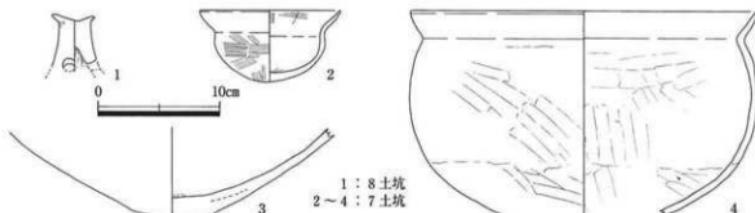


図50 4トレンチ 7、8土坑 出土遺物

5 トレンチ

幅約1.5m、長さ52mと南北に長いトレンチである。

第1面では南北方向の鶴溝が数条検出された。

3層は大きく2層に分層することができ、下層を3-2層として掘削した。3-2層上面では明確な遺構は検出されていない。3層からは中世～古墳時代後期の遺物が出土している。図版54の1は須恵器壺蓋である。2は鶴溝から出土した手づくね土器である。図化していないが、図版22-d、eはヘラ記号のある須恵器など古墳時代の遺物、図版23-j、mの土師器、その他にも瓦器椀等の中世の遺物が見られる。1、dの須恵器は4層からの出土となっているが、本来は上層の遺物と考えられる。4層上面は非常に乱れており、その結果、上層の遺物と混じってしまったと考えられる。

4-1層は5トレンチではみられない。

第3面（図版11-4）

落込み、流路、土坑、ピットを検出した。

落込み

調査区中央では黄橙色の細砂混じりシルトを埋土とする落込みがみられた。4トレンチ第3面で検出された6落込みの埋土と共に通している。6落込みの下面で43井戸が検出されたように、この落込みの下面で竪穴住居が検出されており、4-2層堆積段階においても窪地として残っていたことが考えられる。4層上面、およびこの黄橙色上面は乱れており、4トレンチ等でみられた地震の痕跡と同様である。

流路

186流路（図52）

調査区北側で検出した。幅2.4m、深さ0.4cmを測る。上層は細砂混じりシルト、下層は粗砂を主体とする。遺物は出土していない。

土坑

140土坑（図53）

調査区南端で140土坑を検出した。土坑は調査区外にのびるため、規模は不明であるが深さ0.5mを測る。遺物は出土していない。

4-2層は黒褐色の細砂混じりシルト～シルトで部分的に2層に細分することが可能である。下層は6層の可能性も考えられたが、2枚の土壤化層が接していたため同時に掘削し、その下面での遺構検出となった。4層からは庄内式期の遺物が出土している。

第4面（図版11-5、6）

調査区中央では5層がみられたが、他は4-2層除去面で7層に至る。

竪穴住居、横列、ピット、小溝群、溝を検出した。

竪穴住居

185竪穴住居（図56、57 図版12-1、2）



図52 5トレンチ 186流路 断面図

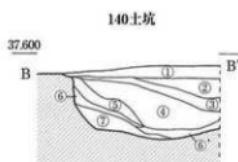


図53 5トレンチ 140土坑 断面図

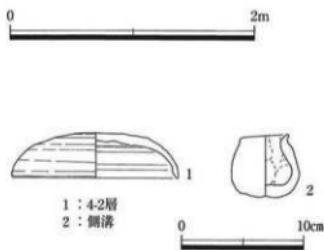


図54 5トレンチ 包含層 出土遺物

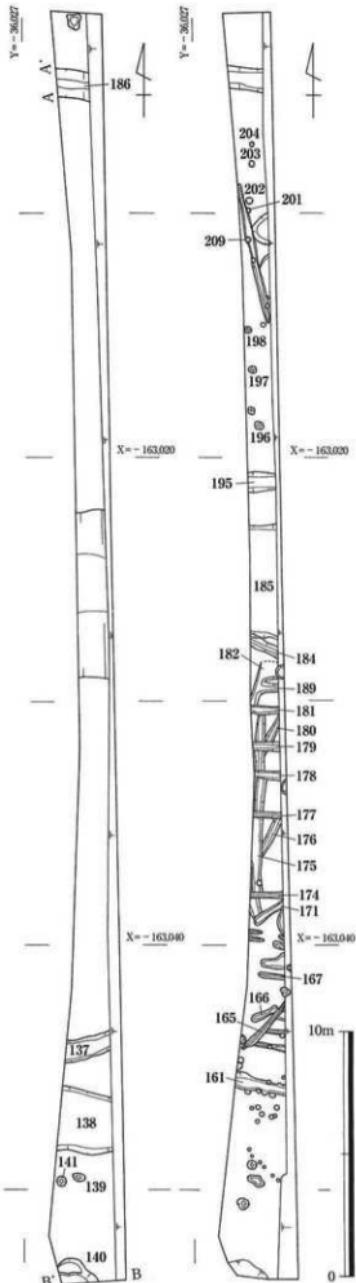


図51 5トレンチ 第3面 遺構分布図(左)
図55 5トレンチ 第4面 遺構分布図(右)

調査区の中央で検出した。検出当初は流路と考えていたが、肩が垂直に立ち上がること、底面がほぼ水平であること、南北幅が4.5mと周辺の住居の規模と似ることから、竪穴住居の可能性が考えられる。検出部分で、調査区は東西幅1.1mしかなく、コーナー部分も検出できていないが、先にあげた特徴からここでは竪穴住居として扱いたい。

この竪穴住居はまず、4層上面で黄橙色の細砂混じりシルトが堆積する落込みとして認識された。4層堆積後もこの部分が窪んでおり、灰黄色シルト、灰黃褐色細砂混じりシルトが堆積し、その後先の黄橙色土で埋められたものと考えられる。断面⑤は4~2層と非常に似ており、遺構の立ち上がりは確認できなかった。⑤の下層は断面⑦、⑧で灰~黒色の細砂混じりシルトが薄く見られる。この下面が住居の床面と考えられる。北側では土器がまとまって出土している。土器は3つの地点に分かれて出土しており、南からA、B、Cとする。A、Bは一個体の遺物であるが、Cは多数の土器が一箇所にまとまって出土している。完形に復元できる遺物も少なく、床面上の遺物というより、住居廃絶後に投棄されたと考えられる。

土器溜まりCからは、種子が出土したため、一部土壤をもちかえり洗浄した。結果、更に多くの種子、

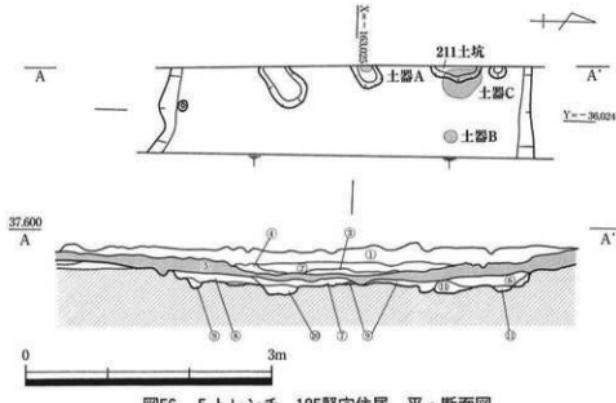


図56 5 トレンチ 185竪穴住居 平・断面図

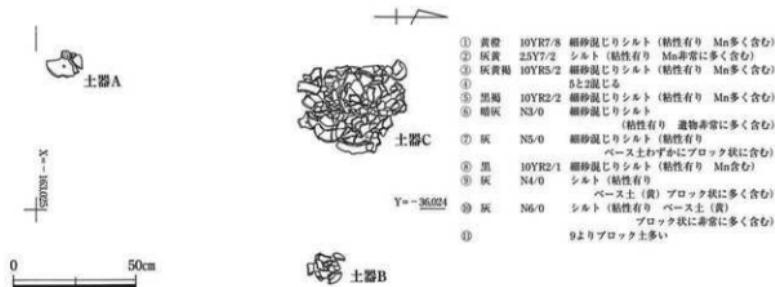


図57 5 トレンチ 185竪穴住居 遺物出土状況図

炭化米、果実が採集できた。鑑定の結果、炭化米（47個）、イヌシデ種子（16個）、アカガシ亞属果実（11個（炭化））、エゴノキ種子（6個）、サクラ属（2個）のデーターを得た。

この部分は5トレンチの中でも低いところに位置しており、調査中も雨水がここに集中する状況であった。住居の立地としては、南側の高いところのほうが適していると考えられ、南側に更に住居址が存在している可能性が考えられる。

出土遺物（図58 図版20～21）

出土遺物の多くは土器溜まりのものである。

1は直口壺である。2は生駒西麓産の胎土をもつ庄内式壺である。口縁部は強い横方向のナデを施す。端部はつまみ上げる。

5～18は土器溜まりCから出土した。3、4はその後、断面が崩れた際に出土した遺物であるが、土器溜まりCと接合した遺物もあり、一連の遺物と考えられる。3は有段口縁鉢である。残存状況が悪く、

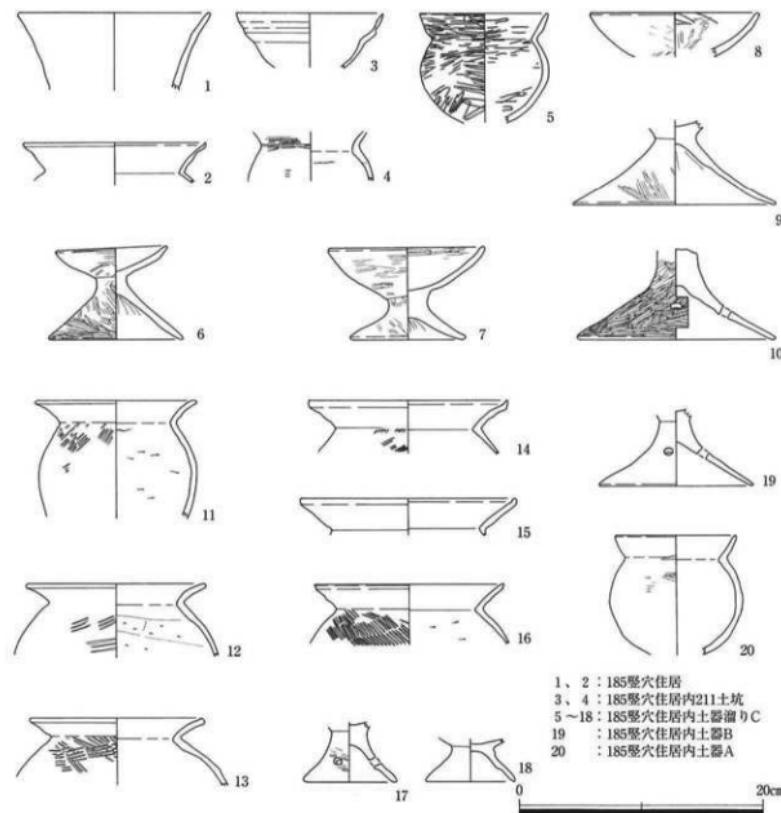


図58 5トレンチ 185豊穴住居 出土遺物

口縁部が歪んでおり、口径は推定である。4、5は小型丸底壺である。口縁端部、体部下半は欠損している。口縁部外面に細かい横方向のヘラミガキを施す。5は口縁部、および体部外面に横方向の細かいヘラミガキを施す。6は小型器台である。浅い皿状の受け部に脚部は円錐形に広がる。ヘラミガキを施す。7～10は高杯である。7は低脚で、脚部に対して杯部が大きい、摩滅しているが杯部外面に横方向のヘラミガキ、脚裾部にもヘラミガキを施す。脚裾部内面には放射状の工具の当たり痕がみられる。9、10は脚部のみであるが、楕形高杯と考えられる。裾部が大きく広がり、外面に密にヘラミガキがみられる。11～16は甕である。11は口縁部が外反し、体部は球形である。体部外面にタタキが残る。12も口縁部が外反する。体部外面にタタキを、内面はヘラケズリを施す。13は口縁部の屈曲が著しく、体部外面にタタキを施す。外面に煤の付着がみられる。14～16は生駒西麓産の胎土をもつ庄内式甕である。14は口縁部がやや外反ぎみで、口縁端部の立ち上がりは明瞭である。体部外面に細かいタタキを、内面はヘラケズリを施す。15は口縁部のみであるが、端部はわずかに立ち上がる。16は外面に細かいタタキを施し、内面はヘラケズリを施す。タタキは右下がりで、いわゆる大和型の庄内式甕である。17、18はミニチュア土器である。

19は土器Aで、高杯脚部である。裾部が大きく聞く。

20は土器Bで、小型丸底壺である。口縁部は短くやや内湾して聞く。口縁部、体部外面に横方向のヘ

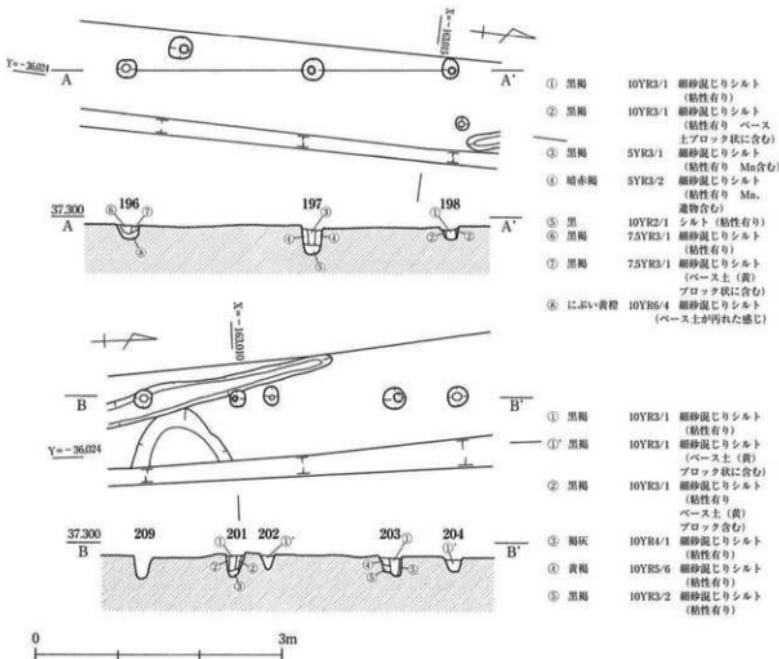


図59 5 トレンチ 棚列2、3 平・断面図

ラミガキを施す。

以上の遺物の特徴から庄内式期後半でも新しい段階のものと考える。

ピット

調査区北側でピットを検出した。ピットは直線的に並び、ここでは柵列として扱う。調査区南側でも多数のピットを検出したが、非常に小さく、大部分が杭の痕跡と考えられる。

柵列2（図59 図版12-6）

調査区北側でピットが並んで検出された。196、197、198で構成される。本来は掘立柱建物を構成する可能性が高いが、調査区が狭く不明である。ピットは直径20~25cmで、深さは197ピットが比較的深く約30cm、他は20cm前後を測る。ピット間の距離は南から、2.2m、1.7mで一定ではない。196ピット北西に187ピットがあり、197ピットとの距離は1.6mと197、198ピット間の距離と近い。187ピットが組み合う可能性もある。遺物は少なく時期を特定できない。

柵列3（図59）

柵列2の南側でピットが並んで検出された。本来は掘立柱建物を構成する可能性が高いが、調査区がせまく不明である。209、201、202、203、204ピットが直線的に並ぶ。ピットは直径20~25cmを測る。深さは209、201、203ピットが比較的深く25~30cm、202、204ピットは浅く約20cmを測る。ピットの規模からは209、201、203ピットが組み合うように考えられるが、ピット間の距離は209、201間が1.1mを測り、201、203間は2.0mと2倍に近い。ピット間の距離を重視すれば、209、202、203ピットが約1.6mとピット間の距離がほぼ同じである。遺物は少なく時期は特定できない。

柵列2、3ともに、今回の調査範囲でその組み合わせ、規模等、確定するのは困難であるが、これらのピットで構成された掘立柱建物、あるいは柵列があったと考えられる。

溝

調査区では小溝群の他、数条の溝を検出した。

195溝（図60 図版12-3）

185堅穴住居の北側1.3mに位置している。東西方向の溝で、幅約0.7m、深さ約0.3mを測り、断面台形を呈する。調査区断面側で幅30cm、厚さ10cmの自然石が出土した。溝の埋土は黒褐色で粘性のある細砂混じりシルトである。

195溝からは比較的多くの遺物が出土したが、溝の上層からの出土が多い。

出土遺物（図61-1~7 図版21）

図化できたのは7点である。1は小型器台である。浅い皿状の受け部で、脚部は円錐状に開く。内外面とも摩滅しており、調整は不明である。2、3は高杯である。2は有稜高杯で、杯部のみである。器壁が薄い。6、7は甕である。6は口縁部が外反し、端部は外側に広がる。端部は欠損が著しく、僅かに残るのみであった。7は生駒西麓産の胎土をもつ庄内式甕である。口縁端部はつまみ上げる。体部外面は細かいタタキを施す。内面はケズリを施す。以上の遺物の特徴から、庄内式期の時期が与えられる。

184溝（図60）

185堅穴住居の南側に位置する。北西-南東方向の溝である。幅約0.35m、深さ約0.2mを測り、南側の肩が2段に落ちる。埋土は黒色で粘性の高いシルト。炭を含んでいる。遺物は出土していない。

161溝（図60 図版12-4）

調査区南側で検出した。若干南にふれるがほぼ東西方向にはしる。幅約0.5m、深さ約0.15mを測り、

断面台形を呈する。埋土は上層が黒褐色で粘性のある細砂混じりシルト、下層は、褐灰色の細砂混じりシルトでベース土をブロック状に含んでいる。いずれも粘性が高い。

出土遺物 (図61-8、9 図版21)

8は壺底部である。9は生駒西麓産の胎土をもつ庄内式壺である。体部外面は細かいタタキ、内面はヘラケズリを施す。器壁が厚い。庄内式期後半の時期が与えられる。

小溝群

小溝群3、周辺の溝 (図62 図版12-5)

トレンチ中央で多数の溝を検出した。東西方向に平行する一群がみられ小溝群3とした。

174、177~179、181溝で構成される。幅は0.2~0.3mで、深さは5cm前後と非常に浅い。溝間の幅は177溝と174溝間は約3m(溝の肩と肩の距離、以後同じ)と広いが、他は0.9~1.2mである。遺物はほとんど出土していない。4トレンチで検出した小溝群と同様、耕作溝と考えられる。

176、180溝は平行する北東~南西方向の溝で溝間1.4mを測る。小溝群3に切られる。溝の幅は小溝群とほぼ同じであるが、深さは僅かだがそれより深い。

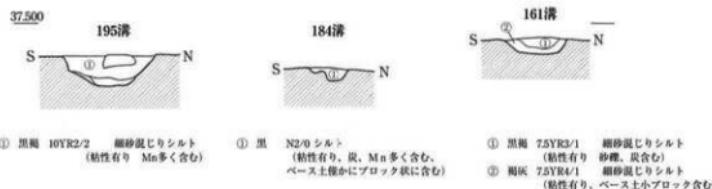


図60 5トレンチ 161、184、195溝 断面図

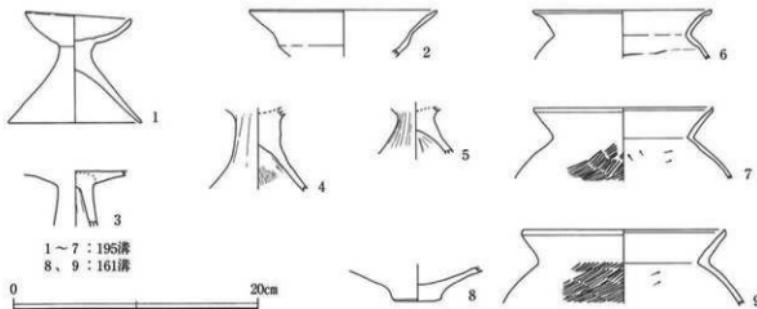


図61 5トレンチ 161、195溝 出土遺物

175溝はほぼ南北方向の溝で、小溝群3にきられ、176、180溝をくる。165溝は北東-南西方向の溝で、幅は0.2m前後と狭いが、深さは約0.1mと周辺の溝と比べて深い。

これらの溝も小溝群同様、耕作溝の可能性が高い。いずれも、遺物は細片が僅かに出土する程度で、図化できる遺物はない。

調査区北側でも溝を1条検出した。205溝は北西-南東方向にはしり、幅約0.25m、長さ5.8mを測る。

6層は調査区中央で見られた。層厚10cmと薄く遺物の出土はみられない。6層上面では明確な遺構は検出されなかった。6層除去面である第5面でも明確な遺構はみられなかった。

調査区は、現在は平坦であったが、第4~5面段階には調査区南側が高く、中央に向かって傾斜する微地形が確認できる。耕地化に際して整地を行ない、平坦化したものと考えられる。調査区北端では、4トレンチ南端で検出された流路の肩部が検出されなかった。おそらくは、4トレンチと5トレンチの間の道路部分に肩部が存在するものと考えられる。

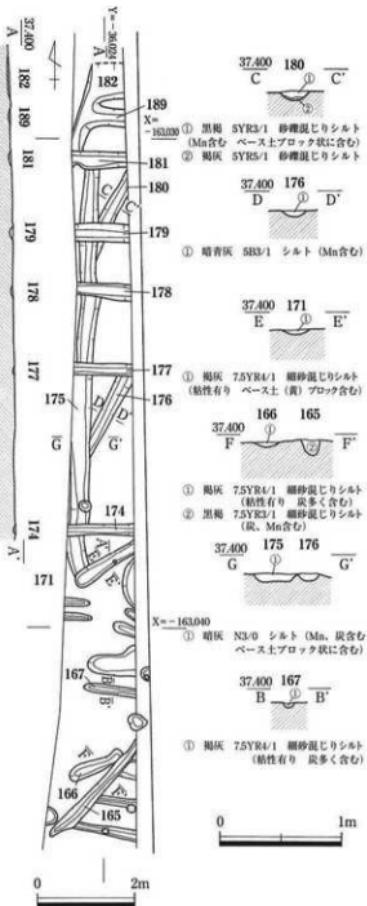


図62 5トレンチ 小溝群3 平・断面図

6 トレンチ

調査区のもっとも南に位置する調査区で幅約2m、長さ42mを測る。調査区の中央はスロープがあり、調査できなかった。

現地形も南に向かって傾斜していたが、旧耕作土である3層も南側に段をもって厚く、枚数も多い。もともと、この部分は南に向かって傾斜していたと考えられ、そこを整地して耕地化したと考えられる。

耕作土の境が大きく乱れている部分があり、その下層を3~2層として掘削した。また、耕作土の間に薄い砂層が確認できた。3層からは、庄内式期~中世の遺物が出土している。中世段階に耕作地化されたと考えられる。3層、3~2層上面では明瞭な遺構はない。

出土遺物 (図63 図版23、24)

1は土師器皿である。コースター状の非常に浅い皿である。2は土師器碗である。3は須恵器坏身である。TK43形式に比定する。4、5は庄内式壺である。生駒西麓産の胎土を持つ。5は器壁が厚い。3はかく乱から出土。他は2、3層から出土した遺物である。図化していないが、図版23-q、rの瓦器碗等中世の遺物が出土している。

4層上面でも明瞭な遺構は検出できなかった。4層は調査区北側、約2.5mの範囲でのみ確認できた。厚層約15cmで上面は非常に乱れている。それより南側は一段下がって3層が堆積しており、耕地化の際に4層は削平されたものと考えられる。

出土遺物 (図63)

4層からは図化できる遺物は出土していない。6は第4面で出土した庄内式壺である。生駒西麓産の胎土をもつ。

第4面 (図64 図版13-1、2)

ピット、溝、落込みを検出した。

落込み

調査区北側で浅い落込みを検出した。落込みは非常に浅く、4-2層が窪み状の部分に若干溜まったようなものと考えられる。

溝

159溝 (図65)

調査区北側で検出した。溝は南北方向にのびるが、北側は調査区外である。残存する範囲で3.9mを測る。溝の東肩はかく乱で切られる。確認できる部分で幅約0.6m、深さ0.15mを測る。溝は中心部分が深く、二段に落ちる。この肩部で遺物が集中して検出された。土師器壺と考えられるが、遺存状況は悪く、取り上げた段階で細片になってしまったため十分に図化できなかった。溝の埋土は黒褐色のシルト混じり細砂を主体とする。

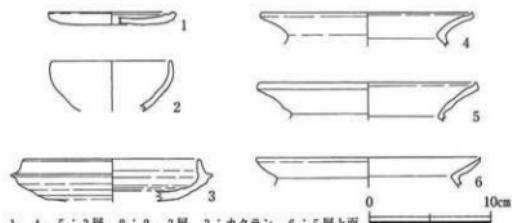


図63 6トレンチ 包含層 出土遺物

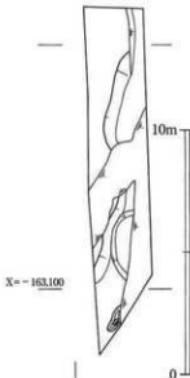
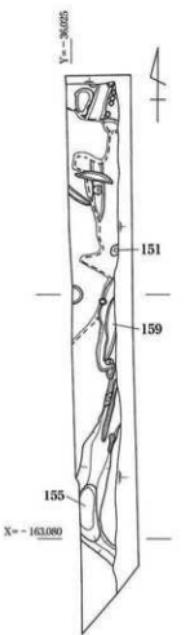


図64 6トレンチ 第4面
遺構分布図

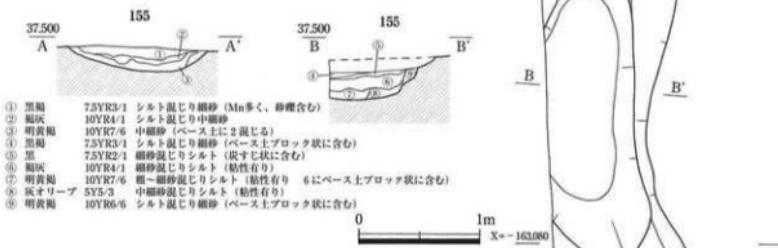
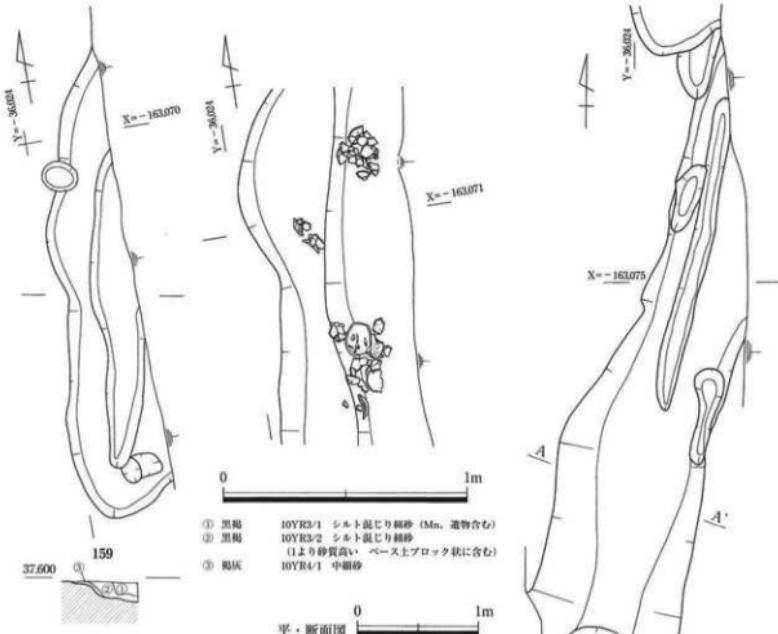


図65 6トレンチ 溝 平・断面・遺物出土状況図



図66 6トレンチ ピット 断面図

出土遺物（図67-1～4）

1は壺である。口縁端部は丸く收める。2は生駒西麓産の胎土をもつ庄内式壺である。器壁が厚い。3は脚部。4は壺底部である。外面はハケメの後、ナデを施す。

155溝（図65 図版13-3、4）

調査区北側、159溝の南に位置する。溝は東に聞く「く」の字状を呈し、屈曲部分は土坑状に落ち込む。溝の幅は広い部分で1.1m、狭い部分で0.65mを測る。溝は屈曲部分より北側では深さ約0.2mと浅く、南側では深さ0.1mを測る。屈曲部分の西側は調査区外に広がるが土坑状の落込みは南北2.3m、東西0.7m以上の長辺円を呈すると考えられる。深さ0.35mを測る。溝の埋土は黒褐色のシルト混じり細砂を主体とするが、土坑状の窪み部分は上層に植物遺体を筋状に含み、以下粘性のある砂混じりシルトを主体とする。遺物の出土は少なく、図化できる遺物はない。

溝の底部から幅約0.2mの細い溝が検出された。この溝に伴うというより、この溝に切られた構造と考えられる。遺物の出土はみられない。159溝と155溝の間に土坑が位置するが、この土坑は155溝に先行し、159溝にきられる。よって、159溝は155溝に先行するものと考えられる。

ピット

調査区ではピットが検出されたが、調査区が狭く、建物等を復元するには至らなかった。

151ピットは調査区北側で検出した。東側をかく乱によつて切られるが、直径約40cmの円形を呈すると考えられる。深さは約30cmを測る。埋土は上層が暗灰色の粘性のある細砂混じりシルト、下層は灰色の粘性あるシルトである。他のピットと埋土が大きく異なっている。所属時期が異なる可能性が考えられるが、遺物の出土はなく不明である。

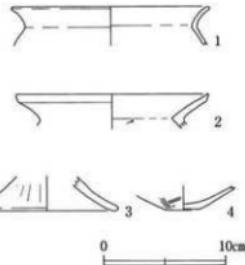
他に調査区北側でピットが検出されたがいずれも直径20cm前後である。

調査区の南側では構造は検出できなかった。前述のように、この部分は削平されている可能性が高い。

図67 6 トレンチ 溝 出土遺物

出土石器（図68 図版24）

各調査区から石器が出土した。ここで、まとめて報告する。1は石槍の未製品と考えられる。2、3は二次加工のある剥片である。2は裏面側に微細な二次加工を施す。3は両面から連続した二次加工を行っている。上部に自然面を残す。いずれも特に刃部をつくりだすようなものではない。4は剥片である。裏面は自然面である。特に二次加工は行っていない。素材となる剥片と考えられる。5はスクレーパーである。裏面側に加工を施し、刃部をつくりだす。刃部はやや湾曲している。6は二次加工のある剥片である。上部に自然面が残る。下部は欠損したものと考えられる。主要剥離面側に連続した二次加工を施す。いずれもサスカイト製である。他に多くのサスカイト片が出土しているが、製品は含まれていない。図版24-yは石核である。両面に風化面が残る。両側から大きく剥離している。図版24-xは剥片である。上部に風化面が残る。図版24-u～wは1トレンチの下層確認のサブトレンチから出土した。いずれも風化の著しい剥片である。



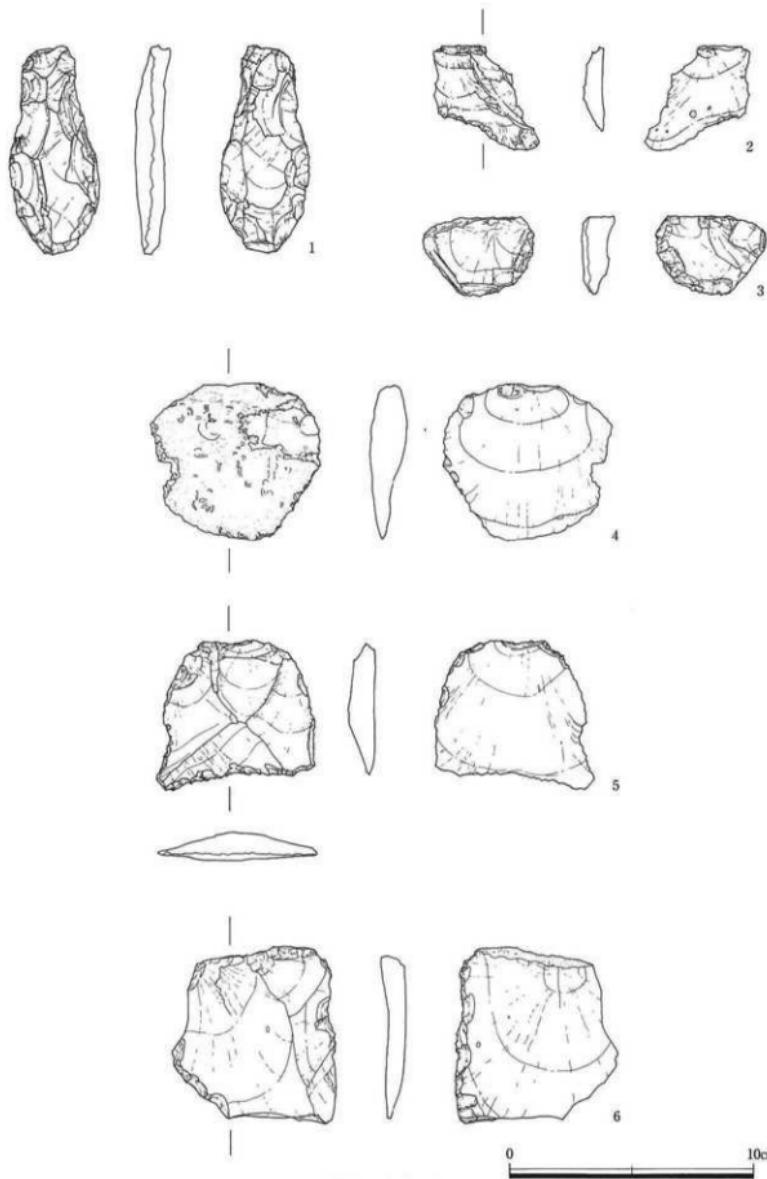


図68 出土石器

第4章 まとめ

今回の調査では尺度遺跡の古墳時代前期初頭の集落について、新たな状況を知ることができた。一つは南北320mと長いトレンチであったために、集落の南北端についてこれまでの推定を裏づける、あるいは、新たに問題を提起することができた点である。

もう一つは、尺度遺跡の中にあって、今回最も新しい遺物（布留式期）を含む井戸資料を得られたことである。この資料は尺度集落の消長にとって重要であるばかりではなく、その構成は外来系の可能性が考えられるものを含んでおり、これまで、この種の遺物の稀少さを指摘されていた石川流域の中にあって、重要であると考えられる。ここでは、まずこれまでの調査を含めて、尺度集落の景観について考えてみたい。

集落の立地

集落は第2章でも述べたように、羽曳野丘陵と石川の間の低地面I a末端に位置しており、舌状にのびた微高地にあたる。方形区画の中心から、東に約130m、西に約150m、北に50m、南に70mの範囲に、竪穴住居群が展開している。西側は、その住居群の端から更に約70mのところで、幅約8mの河川が存在しており、それより西側では、当該期の遺構は広がらない。また、東側では住居群の端から約50mのところで、幅約6mの河川が検出され、堰が構築されており、それに伴う水路も検出されている。当該期の水田は検出されなかったが、調査区外に水田が広がっていることが考えられる。畑の痕跡と考えられる小溝群も検出されており、所属時期は明らかではないが、低地面I bでは畑を含めて生産域として利用されていたと考えられる。北側は住居群より北は、遺構が希薄であり、微高地の端にあたると考えられる。南側は、住居群より南は谷地形となり、流路が見られる。これは、『尺度I』の流路559（河川）につながると考えられる。これまで、この開析谷から流れ出る河川の本流をもって集落の南端と考えられていたが、更に南側にも竪穴住居（推定）を含めて、当該期の遺構の広がりが確認された。この河川より南側は羽曳野丘陵と中位段丘に挟まれた谷底平野であり、遺構が確認された5、6トレンチは、南の開析谷から流れる河川と、先の河川に挟まれた微高地にあたると考えられる。これらの遺構群は、方形区画を中心とした居住域とは河川を界しており、集落の広がりとされるのか、あるいは、別の小さい集落と考えるか、問題が残る。ここでは、集落の広がりと捉え、居住域として、別のまとまりがあつたと考えたい。いずれにせよ、微高地の中心に方形区画が作られ、その周囲約100m前後の範囲に竪穴住居を中心とする居住域が形成され、周辺にも居住域のまとまりが点在し、東側、低地面I bでは生産域が広がる景観が考えられる。

集落の構成

方形区画

尺度集落の中で、もっとも特徴づけられるものは方形区画である。首長居館の定義として、方形に区画された濠、溝、土塁をもつものとされ、さまざまな類型化も試みられている。尺度遺跡の方形区画は、1辺が36.4m～37.6m（外肩で）と推定でき、溝の内側には垣根と考えられる杭列が見られる。内部はその大部分が不明ではあるが、北東～南西辺沿いに掘立柱建物がみられ、2棟が並列した3時期の変遷が考えられている。区画外部にも掘立柱建物がみられるものの、柱の規模、建物の規模は小さく、内部

の建物とは大きく異なっている。また、内部の建物は、3時期を通して規模は縮小するものの、ほぼ同じ構成をとっており、建物の配置に一定の規格があった可能性が高い。区画内部の性格については、首長の邸宅、祭祀場、あるいはそれらを併せもったものが考えられるが、方形区画外側の竪穴住居はその規模、構造など多少の違いはあるものの、基本的に同質なものと考えられる。おそらくは、邸宅も区画内部にあったと考えたい。また、区画溝は幅が1.5m前後と狭く、現存で深さ0.3m～0.6m前後である。内部に杭列などがみられるものの、防御性といった性格は考えにくく、集落と画すること目的とした区画溝と考えられる。

居住域

居住域には周囲に溝をめぐらす竪穴住居、小規模な掘立柱建物、井戸、畠の痕跡と考えられる小溝群がみられる。これらの遺構が組合わさって、一つの居住空間を構成しているものと考えられる。特に竪穴住居は同じ場所に何度も建て替えられていることが分かる。この重複の状況は何らかの意味をもつものと考えられる。ひとつには、集落の立地する微高地が狭く、その空間に制限があるという点がある。もうひとつは、一定の敷地範囲があったのではないかという点である。集落には、各住居の排水溝、あるいは畠につながる溝以外にも多くの小規模な溝がみられる。このうち『尺度II』では方形に溝がめぐる部分がある（溝147、溝271、溝267）。今回の調査でも竪穴住居2棟を囲むように杭列が検出された。この杭列は『尺度II』で「L」字状に検出された小穴列41と若干ずれるものの、「コ」の字状になっていた可能性が考えられる。今回はそのそれぞれの単位を抽出することはできなかったが、簡易ではあるが、小規模な溝、あるいは杭列といった施設で、仕切られた住居（複数もあり）と井戸と畠といった空間が広がっていたのではないだろうか。

集落の消長

次に、集落の消長について考えてみたい。本来であれば、各遺構の変遷を考えた上で検討される問題ではあるが、筆者の力不足から、今回はなし得なかった。そこで、遺構の切り合いが少なく一定の遺物量をもつという点で、井戸について若干の検討を行いたい。ただし、遺物は各報告書掲載遺物による。

これまでの調査では多くの井戸を検出しているが、おおよそ3つのタイプに分類することが可能である。A、V様式系のタタキ甕を主体とする一群、B、庄内式甕、あるいはいわゆる布留系甕と呼称される甕を主体とする一群、C、定型的布留式甕を含む一群である。

A： 尺度I - 井戸1735、尺度II - 井戸129、尺度III（今年度調査）- 47井戸

B： 尺度I - 井戸676・井戸686・井戸587・井戸1686、尺度II - 井戸226・井戸205・井戸844、

C： 尺度II - 井戸202、尺度III - 43井戸

Cタイプの井戸は定型化した布留式甕を含むという点で、これらの中では最も新しい段階に位置づけられる。この井戸は、他の井戸と比べて、直径が大きいという特徴でも共通している。今回の調査で検出した43井戸は庄内式期末～布留式初頭の時期が与えられ、尺度II - 井戸202は口縁部が発達した小型丸底甕がこれよりやや新しい要素を含むものの、布留式初め頃の時期が与えられている。Aタイプは最も古色を示すと考えられ、今回の調査で検出した47井戸は庄内式期中頃の時期が与えられ、尺度II - 井戸129は出土した高杯から庄内式期前半の時期が与えられている。尺度I - 井戸1735は報告では庄内式期後半に位置づけているが、共伴する他器種がほとんどなく、時期の決定が難しい。ここでは、V様式系甕で構成されている点を重視し、庄内式期前半の時期を与えた。また、これらの井戸は直径が小さいという共通点が見られる。Bはもっとも多くみられるタイプである。掲載されている土器をみると、

V様式系の壺は少なく、生駒西麓産の胎土を有する庄内式壺、あるいは、体部外面にハケメを施すものの、口縁部の内湾がみられず、端部つまみあげが残る、いわゆる布留系、布留式傾向壺といわれるものが出土している。いずれも庄内式期後半～布留式期初頭の時期が与えられる。この壺の主体の違いはV様式系壺（Aタイプ）から庄内式壺、布留系壺（Bタイプ）へそして布留式壺（Cタイプ）へという変遷によく整合しており、尺度集落の変遷を考える際にも、一つの視点になり得ると考える。

以上の資料から集落は庄内式期から布留式期初頭の時期が与えられる。集落全体での定型的布留式壺の出土は非常に少なく、布留式期初頭段階には縮小し、その後、集落はこの地では継続しないようである。ただし、「尺度Ⅱ」では住居449は布留式期でも新しい様相をもつ土器が出土している点が指摘されている。また、集落の出現期に関しては、「尺度Ⅱ」で、同じ微高地で弥生時代後期の豊穴住居を含めた遺構が検出されている。古墳時代初頭の集落の前後に關しては周辺部の状況の把握が今後の課題といえる。

方形区画の問題

尺度集落は景観の部分でも述べたように方形区画を中心として、居住域、生産域が広がると考えられる。しかし、「尺度Ⅱ」で、方形区画出現期に関して重要な指摘がなされている。方形区画を構成する溝から分岐する溝（排水溝と考えられる）が、住居をめぐる溝を切っている、という点である。この住居131は住居が非常に集中している地区にあり、遺構の切り合いから、それ以前に建て替えを含めて5棟の住居が存在している。近接した同時併存があったと考えても、これより2棟は先行する。報告では、このことが方形区画自体がさらに古い時期から存在した可能性を直ちに否定するものではない、としているが、投げかけられた問題は大きい。集落の出現と方形区画の成立の間に時間差が存在する可能性も考えられるのである。「尺度Ⅰ」においても、方形区画に先行する住居が存在した可能性も残る、としている。

区画溝、およびその排水溝から出土している遺物は庄内式期後半を中心とした時期が考えられる。これらの遺物は溝廃絶までの時期を示すものであるし、溝の再掘削の問題も含めて、溝掘削の時期を示すものではない。また、掘立柱建物が3時期見られることからもその存続時期に一定の時間幅を考慮しなければならない。しかし、方形区画内に位置する主要遺構は、前述のAタイプ井戸1735以外は、Bタイプ井戸1686を含めて、Bタイプに近い遺物の構成であり、区画溝出土の遺物と同様の時期が考えられる。区画内が一部しか明らかでない現状では、難しい問題ではあるが、井戸1735のみが、区画溝を含めた区画内部において、古相を示しており、この段階にはたして区画溝が存在していたか問題が残る。あるいはAタイプの井戸を形成した集落がはじめにあり、その後、Bタイプの井戸を形成する段階で方形区画が出現した可能性も考えられるのではないだろうか。

また、集落内では庄内式期～布留式期にかけての遺構もみられ、方形区画の存続がこの時期にも続いているのか問題が残る。ここで興味深いのは方形区画内に位置する「尺度Ⅰ」豊穴住居1623である。これは区画内の掘立柱建物を切っており、ここで検出された方形区画が集落の最終段階には存在していないことを示している。

いずれにせよ、この集落の中心になるのは、Bタイプの井戸の時期と考えられ、居住域は河川を介して南側にもみられる。また、生駒西麓産の庄内式壺が集落内で多く出土している点は興味深い。南河内地域は庄内式壺の出土が少なく、伝統的なタクキ壺を主体とする地域であるとされている。そのような地域にあって、生駒西麓産の庄内式壺を主体的に出土する状況は特筆できる。いわゆる河内型庄内式壺

は庄内式期後半になって周囲に拡散していくことは従来から指摘されており、尺度遺跡でも庄内式土器の受容が本格化したのは、この時期にあたると考えられる。このような状況から、方形区画成立の契機が庄内式壺獲得にあったとは考えられないだろうか。43井戸では外来系と考えられる土器が多数出土しているが、この点についても、中河内の様相と同様であり、中河内との一定の交流を表しているものと^(註3)考えられる。^(註4)石川下流では旧大和川合流地点で、当該期の集落である船橋遺跡が存在しており注目できよう。

主要参考文献

- (1) 米田敏幸 1991年 「土師器の編年 1 近畿」 『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』 雄山閣
(2) 山田隆一 1994年 「古墳時代初頭前後の中河内地域 - 旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて - 」
『弥生文化博物館研究報告第3集』
(3) 三宮昌弘 河端 聰 1999年 「尺度遺跡Ⅰ」 (財) 大阪府文化財調査研究センター
(4) 森岡秀人 2003年 「弥生終末期の土器と土師器」『季刊 考古学 第84号』
(5) 山田隆一 2001年 「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質」
『弥生時代の集落』 学生社
(6) 若林邦彦 2003年 「中河内地域における古式土師器変化の定点観測」「古墳出現期の土師器と実年代」
(財) 大阪府文化財センター
(7) 井上智博、中村ますみ 2003年 「尺度遺跡Ⅱ」 (財) 大阪府文化財センター

註

(註1)(文献3) 1735井戸出土遺物について、一見すると中河内編年の庄内Ⅰ期に併行すると思われる様相を示すしながら、口縁端部にシャープなつまみ上げがある壺が存在すること、壺胴部が偏球形、壺胴部の最大径が中位から下位に存在することから、庄内式期後半に位置づけている。また、区画溝廻縁に伴う祭祀と関係した一齊廃棄として、特別に古い様相をもった土器群による祭祀の対象となつたと考えるのが自然であろう、としている。

(註2)(文献6) 庄内式後半は、はじめて中河内平野部内での遺跡間、小地域間の差異がなくなるとしている。

(註3)(文献2) 中河内の外来系土器の搬入は庄内期新相以降に増加する、としており、また山陰、吉備、讃岐、阿波の西方からのものが多い、としている。

(註4)(文献4) 庄内様式から布留様式へ移行する状況について、4つのパターンに分けており、尺度遺跡の位置する河内南部の状況について、もともと、庄内様式が客体的で、V様式の伝統が強固にみられるが、地域内部での偏差が著しいとしている。その中で、尺度遺跡は、中河内の集落との一定の交流がみられ、拠点性を発揮するとしている。

(文献5) 尺度遺跡について、一定程度出土する河内型庄内壺、および本道跡は中河内地域で集落が急激に膨張し他地域との交流の活発化する時期に連動して成立する事実から、中河内地域との関係によってのみ成立した、石川流域諸遺跡の拠点遺跡と理解できるのではないか、としている。

表1 掲載遺物一覧(1)

| No | 品種 | Tr | 遺物種類 | 筋土 | 焼成 | 色調 | 高さ | 口径 | 底径 | 成形 | 調整、その他 | |
|----------|------|------|--------|-----------------------------------|-------------------------|-----------------------------------|--------------|--------|-------|--|-------------------------|--|
| 15 1 | 高杯 | 2 | 47井戸 | 5mm以下の細砂粒 (5mm前後多い) | 良 | 10YR8/2白 10YR7/2に多い黄青 | 17.5 | 24.9 | 16.3 | 全体にマメツ | | |
| 15 2 | 高杯 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.5cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (7.6) | - | - | 全体にマメツ調整不整 鋼柱部内面にはりか外 縁細いタキ方向のハケミギキ | | |
| 15 3 | 高杯 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (8.9) | - | - | 脚柱部内面シボリ 全体にマメツ 鋼外縁方向のヘ タリギキ | | |
| 15 4 | 高杯 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y7/1灰白 | (6.1) | - | - | マメツの為調整不明 | | |
| 15 5 | 高杯 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/19白 | (6.4) | - | - | 全体にマメツ若しい ヘラミギキ一部残る | | |
| 15 6 14 | 小型鉢 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/25白 | (7.0) | >9.8 | 2.6 | 内面マメツの為不整 体外縁中央先端有 | | |
| 15 7 | 小型鉢 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 10YR8/4浅黄青 | *7.0 | *13.6 | 2.6 | 口縁接合せず土で復元 マメツ若しく調整不整 | | |
| 15 8 | 丸柱体 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5Y8/2白 | (7.9) | - | *2.8 | 全体にマメツ調整不整 筒部下部欠ける | | |
| 15 9 | 丸柱体 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/29白 | (3.4) | *19.6 | - | マメツ若しい調整不整 内縫浮き状付け | | |
| 15 10 | 広口壺 | 2 | 47井戸 | 4mm以下粗砂粒 | 良 | 9.5.5Y8/3灰黄青 図N-096 | (8.2) | *20.6 | - | 全体にマメツ 残りかがんでいる可能性あり | | |
| 15 11 | 筒 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.5cm | 良 | 7.5Y7/6白 | (5.2) | - | 2.2 | 全体にマメツ調整不整 筒部のみ | | |
| 15 12 | 筒 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5Y8/4浅黄青 | (2.6) | - | 4.6 | 全体にマメツ調整不整 筒部のみ 内面全体黒斑有 | | |
| 15 13 | 筒 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/25白 | (5.8) | - | 4.6 | 全体にマメツ 調整不整 筒部のみ | | |
| 15 14 14 | 类 | 2 | 47井戸 | 4mm以下粗砂粒 | 良 | 外SYR6/4-10YR3/1灰黑 内10YR8/2灰黄青 | (14.5) | 15.1 | - | 外縁細いタキ 内面ナメツ | | |
| 15 15 | 类 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/29白 | (3.3) | - | 4.7 | 外縁タキ | | |
| 15 16 | 类 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5YR6/8白 | (2.7) | - | 3.9 | 外縁タキ 内外縫付有 | | |
| 15 17 | 类 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/29白 | (6.0) | *14.0 | - | 口縁端部端子全体にマメツ 口縁内面ハケミギキ 外縫付有 内面わざかに接合有 | | |
| 15 18 | 类 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 7.5Y7/6白 | (4.7) | *19.6 | - | 内縫ともマメツ若しい 外縁細いタキ | | |
| 15 19 | 14 | 2 | 47井戸 | 0.1~0.3cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 7.5Y8/3灰黄青 | (18.4) | *17.6 | - | 口縁や外する 体部外縁斜め方向のハケミギキ マメツ調整不整 調整うす | | |
| 15 20 14 | 类 | 2 | 66井 | 3mm以下 | やや良 | 外SYR5/4-10YR3/1灰黑 内10YR8/31灰黄青 | (14.6) | *15.4 | - | 体部外縁細いタキ 内面マメツ | | |
| 15 21 | 类 | 2 | 66井 | 2mm以下 | 良 | 10YR8/26/15Y1/1オリザ 内10YR8/29白 | (5.1) | - | 2.7 | 外縁細いタキ 内面マメツ | | |
| 15 22 | 类 | 2 | 66井 | 2mm以下 | 良 | 外10YR8/16白/10YR4/1灰黑 | (2.7) | - | 6.0 | マメツ若しい調整不整 | | |
| 18 1 | 箱漆器蓋 | 3 | カクラン | 0.1~0.2cmの砂粒 | 良 | 5B7/1明青灰 | (5.7) | - | *10.8 | 外縁接合ヘタケズリ 高台横模様ナダ 内面横模様ナダ 底内面不整方向のハケミギキ | | |
| 22 1 | 高杯 | 2 | 228土瓶 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/2灰黄青 | (3.8) | *23.0 | - | マメツ若しい内面横模様方向のハケミギキ | | |
| 22 2 | 高杯 | 2 | 228土瓶 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5YR6/4-5灰青灰 | (2.3) | *17.6 | - | マメツの為調整不整 | | |
| 22 3 | 高杯 | 2 | 228土瓶 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5YR6/4-5灰青灰 | (1.6) | - | 4.5 | 外縁タキ 内面マメツ 工具の跡有 | | |
| 23 1 | 14 | 类 | 245土瓶 | 0.1~0.4cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 10YR3/2灰白 | (6.0) | *11.8 | - | 内面ともに済難 二次焼成受け | | |
| 23 2 | 类 | 3 | 245土瓶 | 0.1~0.6cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 7.5Y8/4灰黑 | (6.0) | *23.8 | - | 内面マメツの為調整不整 | | |
| 23 3 | 14 | 类 | 245土瓶 | 0.1~0.6cmの砂粒 (粘晶片岩合) | 良 | 10YR7/3に多い黄青 | (8.1) | *23.0 | - | 内面ともに済難部 下半ハケミギキ クリ品片岩 含む | | |
| 23 4 | 类 | 3 | 245土瓶 | 0.1~0.6cmの砂粒 (粘晶片岩合) | 良 | 5YR6/6灰 | - | - | - | 体部外縁ミキキナダ マメツ | | |
| 23 5 | 类 | 3 | 223瓶 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/1灰白 | (2.7) | - | 4.4 | 外縁タキ 底部外縁小さい内門 内面黒斑 | | |
| 23 1 21 | 类 | 4 | 直上-直上 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5Y8/29白 | (7.1) | *16.6 | - | 体部外縁細いタキ口縁に三日脚 他のマメツ若しい | | |
| 23 2 22 | 箱漆器蓋 | 4 | 3 网 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5B6/1直青灰 | (4.3) | *13.6 | - | 体部外縁漆器蓋 口縁部横ナダ 体部下半回転ハケ ミギキ 内面ナコナダ | | |
| 23 3 | 22 | 箱漆器蓋 | 4 | 3 网 | 0.1~0.3cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 5BG6/1直青灰 | (3.8) | - | - | 体部下面下へ底部横板へハケミギキ 他ヨリナダ | |
| 23 4 | 22 | 箱漆器蓋 | 4 | 3 网 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5B7/1直青灰 | (3.3) | *10.5 | - | 天端内面不整方向のナダ 外縁ヘラヨコシのナチナ | |
| 23 5 | 22 | 箱漆器蓋 | 4 | 3 网 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5BG6/1直灰 | (1.8) | - | - | 日コナダ | |
| 23 6 | 22 | 箱漆器蓋 | 4 | 3 网 | 0.1~0.3cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 5B7/1直灰 | 3.5 | *13.8 | *15.0 | 日コナダ | |
| 23 7 | 23 | 土師器蓋 | 4 | 3 网 | 0.1~0.3cmの砂粒 (くさり合)合 | 良 | 10YR7/4に多い黄青 | 1.4 | 7.2 | - | マメツ若しく調整不整 | |
| 23 8 | 土師器蓋 | 4 | 2 扉上上面 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR6/4明黄青 | (1.3) | *9.0 | - | 口縁内面 外縁横ナダ | | |
| 23 9 23 | 土師器蓋 | 4 | 3 扉 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5YR8/2灰 | (1.4) | *10.0 | - | マメツ若しく 調整不整 | | |
| 23 10 23 | 瓦器蓋 | 4 | 3 扉 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/2灰黄青 | (3.1) | *12.2 | - | 体部外縁下干掛ナダ (上端内面横模様ナダ) マメツ若しい | | |
| 23 11 23 | 瓦器蓋 | 4 | 3 扉 | 0.1cm前後の砂粒 | 良 | 5YR8/1灰 | (2.3) | *10.2 | - | 外縁マメツ調整不整 内面方向にハケミギキ | | |
| 23 12 23 | 瓦器蓋 | 4 | 3 扉 | 0.1cm前後の砂粒 | 良 | N3/6灰灰 | 1.9 | *10.6 | - | 内面ナコナダ 平行横板の時取 口縁部横ナダ 体 部外縁相接ハケミギキ 成部外縁ナダ | | |
| 23 13 23 | 瓦器蓋 | 4 | 3 扉 | 0.1~0.2cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (2.2) | *11.4 | - | 口縁外縁強い横ナダ 内面横板 | | |
| 23 14 | 瓦器蓋 | 4 | 3 扉 | 0.1cm前後の砂粒 | 良 | 10YR8/25白 | (2.5) | *13.6 | - | 内面ともマメツ若しい | | |
| 23 15 23 | 瓦器蓋 | 4 | 3 扉? | 0.1cm前後の砂粒 | 良 | N4/4直灰 | (1.7) | - | *5.4 | マメツ若しく 調整不整 斜面三角形の高台見込み平行 横板の時取 | | |
| 23 16 23 | 瓦器蓋 | 4 | 3 扉 | 0.1cm前後の砂粒 | 良 | N2/2直 | (2.0) | - | *5.0 | マメツ若しく 調整不整 斜面三角形の高台 | | |
| 23 17 22 | 白磁碗 | 4 | 3 扉 | 密 | 良 | 5YR8/1灰 | (2.7) | (15.0) | - | 口縁外縁非常に悪い相さざも不確実である | | |
| 23 18 22 | 白磁碗 | 4 | 3 扉 | 密 | 良 | 2.5GY8/1灰白 | 3.3 | *16.8 | - | 直脚 | | |
| 23 19 | 平瓦 | 4 | 3 扉 | 0.1~0.2cm前後の石片 多合)合の2cmの石合 | 良 | N3/3灰灰 斜面7.5YRS/4に 多い角 | (2.1) | - | - | 凹面に春日 凸面タキ 口縁粗い難れ跡 | | |
| 23 20 | 丸瓦 | 4 | 3 扉 | 0.1~0.3cmの長石 石英、チャート含む | 良 | 5Y8/4 | 1.1 | - | - | 凹面に春日 | | |
| 23 21 24 | 足金具 | 4 | 3 扉 | | | 厚0.1 | 15.1 | 幅0.9 | | | | |
| 28 1 24 | 丸瓦 | 4 | 3 扉 | 1~5mm前後の石片 石英合 | 良 | 10YR7/2に多い黄 内N3/0灰 | - | *8.8 | - | 三つ巴文左巻 | | |
| 28 2 | 丸瓦 | 4 | 3 扉 | 0.1~0.3cmの長石 石英合 | 良 | N6/0灰 | 厚2.1 | - | - | 凹面右口 凸面ナダ | | |
| 28 3 | 丸瓦 | 4 | 3 扉 | 0.1~0.3cmの長石 石英合 0.5cmの長石合 | 良 | 5B6/1直灰 | 厚2.1 | - | - | 凹面右口 凸面ナダ | | |
| 28 4 | 丸瓦 | 4 | 3 扉 | 0.3cm前後の石片 石英多 く含む 0.5cmの石合 | 良 | 2.5GY8/1オーリア灰 | 厚2.0 | - | - | 凹面右口 | | |

表2 搭載部物一覧(2)

| No | 箇所 | 基材 | T _f | 構成部品 | 加工 | 成形 | 色調 | 高さ | 口径 | 底径 | 調整、その他 |
|----|-------------------|----------------|------------------------|-------|------------------------|-----------------------|--------|-------|-------|----|--|
| 29 | 1 上部荷物 | 4 5倍 | | 3mm以下 | 良 | 外、内10YR8/25K白 | (3.1) | *12.2 | - | - | マメによる調整不明 |
| 29 | 2 上部荷物 | 4 5倍 | | 2mm以下 | 良 | 外、内10YR8/25K白 | (4.2) | *18.9 | - | - | マメが苦しいが口縫部ナデ頭部強いナデ 体部内面ヘタケリ |
| 29 | 3 車 | 4 5倍 | | 3mm以下 | やや良 | 外、内10YR7/21にひい黄 | (2.2) | - | 5.3 | - | 調整不明マメア |
| 29 | 4 車 | 4 5倍 | | 2mm以下 | やや良 | 外、内10YR7/21にひい粉 | (2.2) | - | 4.4 | - | 全体にマメア 内面放射状に工具痕あり |
| 29 | 5 車 | 4 5倍 | | 2mm以下 | 良 | 外2.5YR5/4赤灰 | (2.2) | - | 4.2 | - | 外面タキ 内面マツフ |
| 30 | 1 高杯 | 4 4~2層 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5YR8/6灰黄橙 | (6.0) | *21.6 | - | - | - | マメのため調整不明 |
| 30 | 2 高杯 | 4 4~2層 | 0.1~0.2cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/2灰白 | (5.0) | - | - | - | - | 脚柱底板方にミガキ マメのため調整不明底 |
| 30 | 3 高杯 | 4 4~2層 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/6灰黄橙 | (5.4) | - | - | - | - | マメが苦しく調整不明 三方透かしと雀斑 |
| 30 | 4 高杯 | 4 4~2層 | 0.1~0.7cmの砂粒 | 良 | 10YR8/6灰黄橙 | (7.0) | - | - | - | - | マメが苦しく調整不明 |
| 30 | 5 要 | 4 4~2層 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y3/3暗オーブ蘭 | (3.6) | *17.8 | - | - | - | マメが苦しい 生駒西麗産 |
| 30 | 6 要 | 4 4~2層 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/6灰白 | (3.6) | - | 3.9 | - | - | 外面タキ 内面マツフ 体部外面黒度 |
| 30 | 7 車 | 4 4~2層 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5Y5/6明鷺 | (3.1) | - | 3.2 | - | - | マメが苦しく調整不良 内面黒度 |
| 30 | 8 車 | 4 4~2層 | 0.1~0.7cmの砂粒 | 良 | 7.5Y5/7.5/6.5明鷺 | (3.6) | - | 4.2 | - | - | 調整難い 内面放射状に工具痕有 |
| 30 | 9 小型跡 | 4 第4面 | 0.1~0.3cmの砂粒 (きり縫合) | 良 | 10YR8/9白 | (5.0) | - | 4.1 | - | - | 内面マツフ 外面マツフ |
| 35 | 1 15 跡 | 4 9堅穴 | 2mm以下 | 良 | 外10YR8/3浅灰橙 | (5.5) | *28.0 | - | - | - | 体部内面ヘタケリ 外面暗ナダケゼリのもナダ 口縫部内面放射状ナダ |
| 35 | 2 高杯 | 4 9堅穴 (上層) | 2mm以下 | 良 | 外、内10YR8/19白 | (5.2) | - | - | - | - | 全体にマメア苦しく調整不明 |
| 35 | 3 車or跡 | 4 9堅穴 (下層) | 3mm以下 | 良 | 外、内5YR7/4/にひい鷺 | (2.7) | - | 3.8 | - | - | 全体にマメア苦しく調整不明 |
| 35 | 4 車 | 4 8土焼 | 2mm以下 | 良 | 外10YR8/19白 | 内10YR8/25白 | - | - | - | - | 内面ヘタキ |
| 35 | 5 要 | 4 10堅穴 (上層) | 1mm以下 | 良 | 外10YR8/1堅穴10YR8/25K黄鷺 | 内10YR8/1堅穴10YR8/25K黄鷺 | (1.3) | *16.2 | - | - | 器便りく、口縫端部つまみ上げる |
| 35 | 6 車 | 4 10堅穴 (上層) | 4mm以下 | 不良 | 外10YR8/21にひい黄鷺 | 内10YR8/25白 | (3.2) | *12.9 | - | - | 全体にマメアのため調整不明 |
| 35 | 7 車 | 4 10堅穴 (上層) | 3mm以下 | 良 | 外5YR7/4/にひい鷺 | 内5YR8/4/にひい鷺 | (2.6) | - | 4.5 | - | 底部サエ工痕有 |
| 35 | 8 車 | 4 10堅穴 (上層) | 2mm以下~ | やや不良 | 外10YR8/4/にひい赤鷺 | 内10YR8/4/黒鷺 | (2.0) | - | 4.5 | - | 外面タキ 内面工具痕 |
| 35 | 9 要 | 4 68土焼 | 3mm以下 | 良 | 外、内10YR4/1灰鷺 | (6.5) | *15.5 | - | - | - | マメが苦しく調整不良 口縫端部つまみ上げる 口縫部内面ナダ |
| 35 | 10 要 | 4 68土焼 | 1mm以下 | 良 | 外5Y8/4灰白 内N8/0白 | (5.7) | *18.1 | - | - | - | マメアしているが 体部内面ヘタケリ 外面細かいタキ 口縫線ナダ 生駒西麗産 |
| 35 | 11 15 要 | 4 68土焼 | 2mm以下~ (四回石臼) | 良 | 外7.5YR8/25K黄鷺 | 内10YR8/2灰黄鷺 | (17.7) | 16.6 | - | - | 外面細かいタキ 内面ヘタケリ 口縫部ナダ 生駒西麗産 |
| 35 | 12 車 | 4 70堅 | 2mm以下 | 良 | 外10YR8/5/1灰鷺 | 内7.5YR6/4/2灰鷺 | - | - | - | - | 端部に削目有 口縫部液状状 |
| 35 | 13 15 要 | 4 78ビット | 2mm以下~ | 良 | 外5.5YR8/25K/5YR7/6堅穴 | 内5.5YR8/25K/5YR7/6堅穴 | (10.7) | *12.4 | - | - | 体部内面ヘタケリ 外面と手縫かいタキのハケナ 下手ナメ 生駒西麗産 |
| 35 | 14 底部 | 4 71ビット | 1mm以下~ | 良 | 外2.5Y7/6鷺 内5YR7/6堅 | (2.0) | - | 4.8 | - | - | マメア調整不良 抜サエ工痕有 |
| 35 | 15 高杯 | 4 108溝 | 4mm以下 | やや不良 | 外7.5YR7/6明鷺 | 内7.5YR6/6明鷺 | (2.0) | - | - | - | 内面シボリ痕ナダ 外面マメアのため調整不明 |
| 35 | 16 15 車 | 4 108溝 | 3mm以下~ | 良 | 外10YR8/3浅灰鷺 | 内10YR8/19白 | (5.2) | *12.4 | - | - | 端部外面ハケメ 竹管絞 |
| 35 | 17 要 | 4 108溝 | 5mm以下 | やや良好 | 外2.5Y8/25K白 | 内10YR8/25K白 | (2.0) | - | *3.3 | - | 外面タキ 内面マツフのため調整不明 |
| 41 | 1 高杯 | 4 83土焼 | 2mm以下 | やや良 | 外10YR8/1/1灰鷺 | 内10YR8/2/1灰鷺 | (4.0) | *13.8 | - | - | 全体にマメア苦しい 外面ヘタキ インヘタキ |
| 41 | 2 15 要 | 4 83土焼 | 4mm以下 | 不良 | 外7.5YR5/1灰鷺 | 内7.5YR7/2/1灰鷺 | (10.9) | 13.0 | 4.6 | - | 内面ハケメ 外面タキ(細い) 上手縫かい下手不規 |
| 41 | 3 車 | 4 83土焼 | 2mm以下 | 良 | 外2.5Y7/6灰鷺 N2/0黒 | 内N4/0黒 | (2.0) | - | 2.3 | - | 内面ハケメ 外面縫方向にヘタミガキ |
| 41 | 4 底部 | 4 83土焼 | 2mm以下 | 良 | 外2.5Y7/1灰白 | 内2.5Y8/1灰白 | (2.0) | - | 5.5 | - | 内面縫方向のヘタミガキ 外面ヘタミガキ 脚柱ナダ サエ工痕明 |
| 41 | 5 底部 | 4 83土焼 | 2mm以下 | やや良 | 外7.5YR7/2/1灰鷺 | 内10YR8/2/1にひい黄鷺 | (2.0) | - | 3.0 | - | 内面工具のアタリ有(ハケメカ) |
| 41 | 6 底部 | 4 83土焼 | 3mm以下 | 良 | 外10YR8/1/1灰鷺 | 内10YR8/2/1にひい黄鷺 | (2.0) | - | 4.4 | - | 内面ハケメ 外面縫ナサエ |
| 41 | 7 15 底部 | 4 83土焼 | 5mm以下 | 良 | 外10YR8/2/1にひい黄鷺 | 内7.5YR8/2/1灰鷺 | (2.0) | 13.1 | - | - | 外面わずかにヘタミガキ残る 内面ナダ |
| 41 | 8 16 高杯 | 4 18溝 | 2mm以下の砂粒含 | 良好 | 外2.5Y8/1灰白 | 内2.5Y7/1灰白 | (10.0) | *18.0 | - | - | 脚柱部外面板ナダのち細かい擬方 角のヘタミガキ 四方透かし |
| 41 | 9 16 高杯 | 4 18溝 | 2mm以下 | 不良 | 外10YR8/1灰白 内10YR8/25白 | (7.0) | - | *21.1 | - | - | 全体にマメア 四方透かし、脚部外縫ヘタミガキ |
| 41 | 10 要 | 4 18溝 | 5mm以下 | 良 | 外10YR8/1/1灰鷺 | 内10YR8/1/1灰鷺 | (6.0) | - | 4.1 | - | 外面タキ 内面マツフ(ケゼリorハケ不明) 底部内面工具 |
| 41 | 11 車 | 4 18溝 | 4mm以下 | 中不良 | 外7.5YR6/25K白 | 内N6/0灰 | (2.0) | - | 3.8 | - | 底部内面工具のあたり有 外面調整不明 |
| 41 | 12 底部 | 4 18溝 | 2mm以下 | 不良 | 外10YR8/1/1灰白 | 内N3/0灰鷺 | (2.0) | - | 3.5 | - | 全体にマメア 内面ナダ |
| 41 | 13 16 ミニチャ グ高杯 | 4 18溝 | 2mm以下 | 良 | 外2.5Y8/1灰鷺 | 内10YR8/1/1灰鷺 | (2.0) | - | 5.0 | - | 透かし三方うち1つは貫通せず 調整マメアのため不明 |
| 41 | 14 要 | 4 17溝 | 2mm以下 | 良 | 外10YR8/1/1灰白(2.5Y3/1黒鷺 | 内10YR8/1/1灰白 | (1.0) | - | 3.8 | - | 外面タキ 内面調整不明 |
| 41 | 15 16 高杯 | 4 31溝 | 2mm以下 | 良 | 外10YR8/1/1灰白 | 内5YR7/3/1にひい鷺 | (10.0) | - | *18.9 | - | 全体にマメア 脚柱部内面ハケメ しばり直 脚柱 ヘタナダの単位 四方透かし |

表3 掲載遺物一覧(3)

| No | ROM | 形態 | T/r | 遺構種類 | 筋土 | 焼成 | 色調 | 段高 | 口径 | 底径 | 調整、その他 |
|-------|-----------|-----------|-----|------------------------------|-------------------------|---------------------------|-------------------------------|--------|---|--|---|
| 41 16 | 16 | 甕 | 4 | 39周 | 4 mm以下 | 良 | 外、内SYR7/4に付い様 | (4.9) | 15.8 | - | マメ若しく調整不明瞭 口縁部に面をもつ |
| 41 17 | 17 | 甕 | 4 | 42周 | 2 mm以下 | 良 | 外SYR6/2灰黄白 内TOYR8/2灰白 | (4.1) | 13.9 | - | マメ若しく調整不明瞭 |
| 41 18 | 18 | 甕 | 4 | 20周 | 3 mm以下 | 良 | 外、内TOYR6/2灰黄白 | (2.7) | *14 | - | マツカ調整不明 |
| 41 19 | 19 | 甕 | 4 | 30周 | 2 mm以下 | やや良 | SYR6/6灰 内SYR7/3Lに付い様 | (2.3) | - | 4.9 | 外縁タキ 内面ハケメ内面焼付着 内面炭化物付着 |
| 41 20 | 20 | 高杯 | 4 | 34周 | 3 mm以下 | 良 | 外、内SYR8/2灰白 | (3.5) | - | - | 全体にマツカのため調整不明 |
| 41 21 | 21 | 甕 | 4 | 34周 | 3 mm以下(角閃石含) | 良 | 外、内TOYR5/2灰黄白 | - | - | - | 生野西麗窯 |
| 43 1 | 1 | 小型丸底 甕 | 4 | 43周 | 0.1~0.2cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/2灰白 | (4.4) | *11.0 | - | 口縁部内面焼付ナギ 体部内面ミガキ 外面不明 体部外面黒斑 |
| 43 2 | 2 | 右段口縁 器 | 4 | 43周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y7/2灰黄 | (4.4) | *12.0 | - | 内面ナギ 外面下部ヘラギり後ナギ ナギナテ頭部付近にハケルの痕跡 底部外面黒斑 |
| 43 3 | 3 | 右段口縁 器 | 4 | 43周 | 0.1~0.2cmの砂粒 | 良 | 10YR7/2Lに付い様 | (5.8) | *15.2 | - | 口縁部焼付ナギ 体部外面上部に細かい横方向のミガキ 下部ヘラギり内面細かい横方向のミガキ |
| 43 4 | 18 | 鉢 | 4 | 43周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5YR8/1灰白 | (7.3) | 16.4 | - | 全体にマツカ 外部厚みをもって 二次焼成受ける |
| 43 5 | 5 | 小型鉢 | 4 | 43周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5YR8/4灰黄白 | (4.2) | *12.8 | *3.7 | 平面の浅い皿状 内外面ナギ 口縁部内面焼付ナギ 外面ナギ |
| 43 6 | 6 | 高杯 | 4 | 43周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y7/2灰黄 | (4.1) | *12.8 | - | 1.1口縁部内面焼付ナギ 体部内面ナギ 外面ハケメ |
| 43 7 | 17 | 高杯 | 4 | 43周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/2灰黄 | (7.7) | - | 12.4 四周かく付 瓶部外面細かい横ハケメ 体部外面上部に細かい横方向のミガキ 下部ヘラギり 外面横方向の細かいミガキ 瓶部外面上部外面黒斑 僧帽付着 | |
| 43 8 | 17 | 高杯 | 4 | 43周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y6/2灰白 | 10.7 | - | *12.4 透し三方向 マツカが著しく調整不明瞭 内面ヘラギナギ 外面ヘラギナギ 瓶部外面上部に細かい横ハケメ 脚付近下部焼付ナギ | |
| 43 9 | 18 | 眞形器台 | 4 | 43周 | 3 mm以下 | 良 | 外7.5YR8/3浅灰黄 内7.5YR7/3に付い様 | 8.7 | *17.1 | 16.7 | マツカ著しく調整不明瞭 瓶部内面ヘラケリ 外面ハケメナギ? |
| 43 10 | 18 | 小型鉢 | 4 | 43周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | 5.5 | 12.0 | 3.6 | 口縁部焼付ナギ 体部内面ミガキ 外面掛ナギ サビ付 |
| 43 11 | 18 | 口付土器 | 4 | 44周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | 4.4 | 7.7 | 3.4 | 体部ナギ 底部ナギサエ直面窓 |
| 43 12 | 18 | 口付土器 | 4 | 44周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/2灰白 | (5.0) | *8.5 | 3.7 | 10.0 口付がむな ナギ |
| 43 13 | 18 | 口付土器 | 4 | 44周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5YR8/1灰白 | 5.6 | 8.3 | 1.9 | 口縁部焼付ナギ 体部外側下部窓方向にヘラケリ エナナギ |
| 43 14 | 4 | 小型甕 | 4 | 44周 | 0.1~0.4cmの砂粒 | 良 | 10YR7/2に付い様 | (5.2) | - | 2.6 内外工具によるナギ 外面ナギ 体部下部~底部外面黒斑 | |
| 43 15 | 5 | 小型甕 | 4 | 45周 | 0.1~0.2cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/2灰白 | (6.1) | *10.6 | - | 1.1口縁部内面焼付ナギ 体部外側横方向のミガキ 内面上部オサエ下部ヘラケリ |
| 43 16 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.2cmの砂粒 | 良 | 10YR7/2Lに付い様 | (5.4) | *10.6 | - | 内面横方向ミガキ 内面焼付着 | |
| 43 17 | 18 | 鉢 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (4.7) | - | 2.6 外面ナギの為調整不明 内面ナギ | |
| 43 18 | 18 | 脚台 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/2灰白 | (5.0) | - | *7.4 マツカの為調整不明瞭 瓶部内面下方向に板ナギ 脚台上部付着 | |
| 43 19 | 19 | 製塙土器 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/4浅灰黄 | (2.8) | - | 5.0 直脚台ナギ 外面タキ 内面ナギ | |
| 44 1 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒(角 きり縫合) | 良 | 10YR8/1灰白 | (7.1) | *15.2 | - | 内面ともマツカ若しい 外面わざかに縱方向のハケ ナギ | |
| 44 2 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/2灰白 | (7.3) | *15.4 | - | 1.1縁部外側ハケのち捺ナギ 内面焼付 | |
| 44 3 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y7/3灰黄 | (8.0) | - | 1.1縁部外側ハケのち捺ナギ 内面焼付ナギ 体部外側 ハケのちるく燃ナギ 内面ヘラケリ瓶部外側 ナギ /外面黒斑有 | | |
| 44 4 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR5/3に付い様 | (8.0) | *18.0 | - | 1.1縁部外側ハケのち捺ナギ 外面焼付ハケ~縦ハケ~ ナギ 生野西麗窯 | |
| 44 5 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (7.2) | *16.4 | - | 1.1縁部外側ハケのち捺ナギ 内面焼付ナギ 瓶部さか いナギ サビ | |
| 44 6 | 17 | 広口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.6cmの砂粒(角 きり縫合) | 良 | 10YR5/3に付い様 | (8.0) | 18.2 | - | 1.1縁部内面~瓶部外方向にミガキ 内面窓方向にハケ ナギの横ナギ ボロ洞部焼付ナギ 生野西麗窯 |
| 47 7 | 17 | 直口壺 | 4 | 45周 | 2 mm以下 | 良 | 外7.5YR8/1灰白 内7.5YR8/2灰白 | (13.4) | 15.6 | - | 1.1縁部内面焼付ナギ 体部外側窓ハケのち脚部横ハ ケメ 内面ヘラケリ |
| 44 8 | 17 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (10.8) | *16.0 | - | 1.1縁部内面焼付ナギ 体部外側窓ハケのナギ 内面ヘ ラケリ 口縁部焼付黒斑有 |
| 44 9 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 5YR8/3灰黄 | (7.6) | 13.0 | - | 1.1縁部外側窓ハケのナギ 内面ヘラケリ 瓶部外側 窓ナギ /外面黒斑有 | |
| 44 10 | 直口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/2灰白 | (12.2) | *15.5 | - | マツカの為調整不明 外面ナギ 体部外側窓付着に下 手若しい 底部付内面焼付着 2次焼成受ける | |
| 44 11 | 複合口縁 甕 | 4 | 45周 | 0.1~0.7cmの砂粒(角 きり縫合、結晶片含) | 良 | 7.3YR7/4Lに付い様 | (6.4) | - | - | 全体にマツカ若しく調整不明 結晶片含む 阿波窯 | |
| 44 12 | 19 | 広口壺 | 4 | 45周 | 0.1~0.7cmの砂粒(角 きり縫合) | 良 | 10YR8/2灰白 | (12.0) | 14.8 | - | 1.1縁部内面焼付ナギ 体部外側窓ハケのち脚部横ハ ケメ 内面ヘラケリ 口縁部焼付黒斑有 |
| 44 13 | 17 | 複合口縁 甕 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/4浅灰黄 | (21.6) | 15.5 | - | 1.1縁部焼付ナギ 体部外側窓ハケのナギ 内面 ヘラケリ 体部外側窓黒斑有 |
| 45 1 | 複合口縁 甕 | 4 | 45周 | 3 mm以下の砂粒(角 きり縫合) | 良 | 外7.5YR4/2灰黄 内10YR3/2灰白 | (16.5) | *27.4 | - | 1.1縁部外側窓ハケのナギ 体部外側窓ハケのナギ 内面 横方向ハケメのナギ 内面横方向ハケメのナギ 内面 窓方向のナギ 内面窓黒斑有 | |
| 45 2 | 複合口縁 甕 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (12.5) | *30.8 | - | 1.1縁部外側窓ハケのナギ 内面ヘラケリハケメ 体部 外側窓黒斑有 大きいナギ | |
| 46 1 | 19 | 複合口縁 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (33.2) | (34.4) | - | 体部外側窓方向のナギメのナギ 瓶部横方向のナギメ 内 面ヘラケリ 体部外側窓黒斑有 |
| 46 2 | 19 | 複合口縁 | 4 | 45周 | 0.1~0.3cmの砂粒(角 きり縫合) | 良 | 10YR8/1灰白 | (12.5) | - | - | 体部外側窓方向のナギメのナギ 瓶部横方向のナギメ 口 縁ナギ 体部上半部窓黒斑有 1.1縁部外側窓黒斑有 |
| 47 1 | 18 | 甕 | 4 | 45周 | 0.1~0.4cmの砂粒(角 きり縫合) | 良 | 10YR8/2灰黄白 | (7.2) | *15.4 | - | 1.1縁部外側窓ナギ 内面わざかにハケリ 戰部外側窓 ハケリ 内面ヘラケリ 外面焼付着 生野西麗窯 |

表4 掲載遺物一覧(4)

| 図 | 名 | 器種 | Tr | 遺構複数 | 地土 | 壺成 | 色調 | 高さ | 口径 | 底径 | 調整、その他 | |
|----|----|-----------|-----------|--------------|-------------------------|-------------------------|---------------------------------|------------------------------------|--------|-------|--|---|
| 47 | 2 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 (角閃石含) | 良 | 2.5Y5/3黄褐色 | (5.0) | *15.8 | - | 口縁部内面ハケメのちハケメ外面横ナデ体部内面ハラケメ外側タキキのちハケメ(マメツのため不明瞭)外面保護者 生駒西麗座 | |
| 47 | 3 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 (きさり縫合) | 良 | 10YR5/4に近い黄褐色 | (4.2) | *15.6 | - | 口縁部内面ハケメのちハケメ外面横ナデ体部内面ハラケメ外側タキキのちハケメ(マメツのため不明瞭)外面保護者 生駒西麗座 | |
| 47 | 4 | 壺 | 4 | 43井P3 | 1mm以下 | 良 | 2.5Y5/3・1黒褐色 内2.5Y3/2黒褐色 | (1.0) | 13.5 | (9.3) | - | |
| 47 | 5 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (3.7) | *18.2 | - | タキキのちハケメ外側タキキのちハケメ(マメツのため不明瞭)外面保護者 生駒西麗座 | |
| 47 | 6 | 18 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 (角閃石含) | 良 | 10YR8/4に近い黄褐色 | (6.3) | 14.0 | - | 全体にマメツ 体部内面ハラケメ外面不明 外面保護者 生駒西麗座 |
| 47 | 7 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 (角閃石含) | 良 | 10YR5/2灰黄褐色 | (2.2) | *12.8 | - | 口縁部内外面マメツ 体部内面ハラケメりか? 他マメツ 留め縫合 生駒西麗座 | |
| 47 | 8 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1cm前後の砂粒 (鋸閃石含) | 良 | 10YR3/3暗褐色 | | *26.8 | - | 外面保護者 生駒西麗座 | |
| 47 | 9 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5Y8/1灰白 | (3.5) | *16.5 | - | 口縁部内面ハケメ 外面縱方向ハケメ 体部内面ハケメのちナデ 外面縱方向ハケメ | |
| 47 | 10 | 壺 | 4 | 43井P3 | 1mm以下の砂粒 | 良好 | 2.5Y7/2灰黃褐色 | (1.0) | 13.0 | (3.5) | - | |
| 48 | 1 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/2灰白 | (10.0) | *13.0 | - | 口縁部内外面横ナデ 体部内面ハラケメ外面ハラケメ 留め縫合ハケメ 外面保護者 | |
| 48 | 2 | 壺 | 4 | 43井P3(発土) | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5Y8R/3灰黃褐色 | (6.0) | *14.0 | - | 口縁部内外面横ナデ 体部内面ハラケメ外面横ハラケメ 後縫合ハケメ | |
| 48 | 3 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5YR7/2明赤褐色 | (6.0) | *12.6 | - | 口縁部内面ハケメ 外面縱方向ナデ 体部内面ハラケメ外縫合ハケメ 二次成受ける外面保護者 | |
| 48 | 4 | 19 | 壺 | 4 | 43井P3 | 2mm以下 | 良 | 外、内10YR7/19C灰白 | (7.0) | 14.9 | - | 口縁部内外面横ナデ 体部内面ハラケメ外面ハケメのち留め縫合ハケメ |
| 48 | 5 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/2灰白 | (12.0) | *12.6 | - | 口縁部横ナデ 体部内面ハラケメ外面縱方向ハケメ パソノ 外面保護者 体部外縫合 内面縫合下手縫合者 | |
| 48 | 6 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 2.5Y8/2灰白 | (4.0) | *15.0 | - | 口縁部内面横ナデ 体部内面ハラケメ外面ハラケメ | |
| 48 | 7 | 壺 | 4 | 43井P3(きさり縫合) | 0.1~0.3cmの砂粒 (きさり縫合) | 良 | 10YR8/3浅黄褐色 | (9.0) | *17.5 | - | 全体にマメツ着しい 体部内面ハラケメ外面むずかにハケメ | |
| 48 | 8 | 壺 | 4 | 43井P3(発土) | 0.1~0.3cmの砂粒 (きさり縫合) | 良 | 10YR8/4灰白 | (9.0) | *19.6 | - | 口縁部内外面横ナデ 体部内面ハラケメ外面ハラケメ 留め縫合ハケメ 外面保護者 | |
| 48 | 9 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (14.0) | *16.8 | - | 口縁部内外面横ナデ 体部内面ハラケメ外面ハラケメ 留め縫合ハケメ 下半部ハケメ(留め縫合ハケメ) | |
| 48 | 10 | 19 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.5cmの砂粒 (きさり縫合) | 良 | 10YR8/29灰白 | (14.0) | 14.0 | - | 全体にマメツしているが口縁部内面ハケメのちナデ外面横ナデ 体部内面ハラケメ外面縱方向ハケメのち横方向のハメツ 外面保護者 二次成受ける |
| 48 | 11 | 19 | 壺 | 4 | 43井P3 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 10YR8/1灰白 | (10.0) | *15.0 | - | 口縁部内外面横ナデ 体部外面ハラケメ内面ハラケメ |
| 50 | 1 | 高杯 | 4 | 8土塹 | 2mm以下~ | やや不良 | 外10YR7/21に近い橙 内7.5YR6/24に近い橙 | (4.0) | - | - | 内面シボリ痕 他不明 | |
| 50 | 2 | 16 | 小型丸底 壺 | 4 | 7土塹 | 2mm以下 | 良 | 9.5YR8/3浅黄褐色 | 5.0 | *11.4 | - | 体部外面ハラメ 内面ハケメのちナデ 口縁部内面ハラケメ 外面シボリ痕にもうけメ |
| 50 | 3 | 壺 | 4 | 7土塹 | 2mm以下 | やや良 | 9.5YR8/3浅黄褐色 内5YR7/6 | (7.0) | - | 6.4 | 全体にマメツのため調整不明確 | |
| 50 | 4 | 16 | 鉢 | 4 | 7土塹 | 2mm以下 | やや良 | 9.5YR6/41に近い橙 内10YR7/1明褐 | (11.0) | *28.1 | - | 口縁部内外面横ナデ 体部内面ハラケメ外面板ナデか? |
| 50 | 5 | 1 | 22 | 留置器 環 | 5~4層 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 9.5R6/14に近い橙 内7.5YR7/1明褐 | (3.0) | *13.4 | - | 工具のあたり有 天端一側上手回転ハラケメリ 搾捺ナデ 天端内面一定方向にナデ |
| 54 | 2 | 24 | 1コトツ7号 | 5 | 開削 | 3mm以下 | 良 | 外、内10YR6/19C灰白 | 5.1 | 2.8 | 3.2 | 内面シボリ痕明显に残る 黒斑有 |
| 58 | 1 | 直口壺 | 5 | 185住居 | 4mm以下細砂粒 | 良 | 外、内10YR7/1灰褐色 | (6.0) | 15.4 | - | マメツ著しく 調整不明確 | |
| 58 | 2 | 壺 | 5 | 185住居 | 0.1~0.3cmの砂粒 (角閃石含) | 良 | 10YR8/4灰白 | (3.0) | *15.0 | - | マメツのため調整不良 内面保護者 生駒西麗座 | |
| 58 | 3 | 有段口縁 鉢 | 5 | 211土塹 | 1mm以下 | 良 | 外、内10YR7/21に近い橙 | (4.0) | *12.0 | - | 全体にマメツ外被被方向の1ガキわざに残る 口縫不健美 | |
| 58 | 4 | 小蟹丸底 壺 | 5 | 211土塹 | 1mm以下~ | 良 | 外N2/0黒 内2.5Y5/1灰褐色 | (4.0) | - | - | 外被被方向の粗かいヒタミガキ内面マメツ | |
| 58 | 5 | 20 | 小蟹丸底 壺 | 5 | 185住居 | 2mm以下 | 良 | 外7.5YR5/2灰褐色 内10YR7/21に近い黄褐色 | (0.0) | *10.4 | - | 内面保護者ともマメツ著しいが粗かい1ガキが確認できる |
| 58 | 6 | 20 | 小蟹丸底 壺 | 5 | 185住居 | 4mm以下細砂粒 | 良 | 外7.5Y6/1明褐色 内7.5Y6/1開削7.5Y5/1開削 | 7.7 | 8.9 | 11.1 | 杯部内面ハラケメ ギヤキ内面被被方向のヒタミガキ 脚部外縫合ヒタミガキ |
| 58 | 8 | 高杯 | 5 | 185住居 | 3mm以下 | 良 | 外、内10YR7/2に近い黄褐色 | (3.0) | 12.6 | 9.4 | 杯部内面被被方向のヒタミガキ脚部内面工具のあたり放射状にあり | |
| 58 | 9 | 高杯 | 5 | 185住居 | 4mm以下細砂粒 | 良 | 外2.5YR7/2山形市 内5YR7/6 | (7.0) | - | 16.4 | マメツ著しいが脚部外縫合ヒタミガキ通かしなし | |
| 58 | 10 | 20 | 高杯 | 5 | 185住居 | 3mm以下細砂粒 | 良 | 外、内10YR7/2に近い黄褐色 | (7.0) | - | 16.3 | 四方向カシ外縫合ヘリ1ガキ内面ナデ |
| 58 | 11 | 20 | 壺 | 5 | 185住居 | 2mm以下 | 良 | 外10YR7/1灰褐色 | (0.0) | 12.7 | - | 縦から1回外反復部合体にマメツ外被被部外縫合タクタキナナドナタクタキ 内面ハラケメか? |
| 58 | 12 | 21 | 壺 | 5 | 185住居 | 0.1~0.3cmの砂粒 | 良 | 7.5YR7/4に近い橙 | (6.0) | *14.5 | - | 全体にマメツ著しい 体部外縫合タクタキ内面ハラケメ外面保護者 |
| 58 | 13 | 21 | 壺 | 5 | 185住居 | 3mm以下 | 良 | 9.5Y7/2明黄褐色 内Y7/1灰白 | (5.0) | 13.9 | - | 始-1回外反復部内面マメツカシか? 外面タクタキ外面保護者 |
| 58 | 14 | 壺 | 5 | 185住居 | 3mm以下~ (角閃石含) | 良 | 外7.5YR5/3に近い橙 | (4.0) | 16.2 | - | 口縁部内外面横ナデ厚壁ある底部つまみ上げ体部内面ハラケメ外縫合タクタキ 外面保護者 生駒西麗座 | |
| 58 | 15 | 壺 | 5 | 185住居 | 2mm以下~ (角閃石、雲母、石英含) | 良 | 外7.5YR4/2灰褐色 | (3.0) | *17.5 | - | 器形悪い縫合つまみ上げシヤーパさなじ口縫部のみ内面保護者 | |
| 58 | 16 | 21 | 壺 | 5 | 185住居 | 3mm以下~ (角閃石含) | 良 | 外7.5YR4/3灰褐色 | (4.0) | 15.5 | - | 口縁部内外面横ナデ内部内面ハラケメ外縫合タクタキ 生駒西麗座 |

表5 接觸遺物一覧(5)

| 固 | 固 | 固 | Tr | 造形種類 | 動上 | 底成 | 色調 | 身高 | 口径 | 底径 | 調整、その他 | |
|----|----|------|---------------|----------------|-----------------------------|-----------------------------|--------------|--|-------|--------|-----------------------------|--|
| 58 | 17 | 21 | 1±1.7mm | 5 | 185住居 | 2mm以下砂鉄粒多 | 良 | 外、内10YR7/2に似る黄緑 | (4.3) | - | 7.2 | 三方透かしマツカシイ外露部分にヘラミガキの痕跡 |
| 58 | 18 | 21 | 1±1.7mm | 5 | 185住居 | 4mm以下砂鉄粒 | 良 | 内SYR7/4に似る黄 | 13.5 | - | 7.3 | 透かしなしや内露する面マツカシイ調整不明 |
| 58 | 19 | 5 | 185住居 | 3mm以下砂鉄粒 | 良 | 6.10YR8/2褐色 内YR7/6 | (6.2) | - | 12.6 | - | 三方透かしマツカシイ調整不明 | |
| 58 | 20 | 20 | 小型丸底 | 5 | 185住居 | 4mm以下砂鉄粒 | 良 | 外、内10YR7/2に似る黄緑 | (9.8) | *9.7 | - | 全体に測定口部内側する部屋内面板ナデか? 修部外露 |
| 61 | 1 | 21 | 小箱蓋台 | 5 | 195構 | 2mm以下砂鉄粒 | 0.06g | 外、内SYR7/3に似る白 | 8.2 | 8.6 | 10.8 | 全体にマツメ |
| 61 | 2 | | 商杯 | 5 | 195構 | 0.1~0.2cmの砂鉄粒 | 良 | 10YR8/2白 | (3.8) | *15.2 | - | 透かし透かし調整不 |
| 61 | 3 | | 商杯 | 5 | 195構 | 0.1~0.2cmの砂鉄粒 | 良 | 7.5YR6/8 | (4.5) | - | - | マツカシイ調整不 |
| 61 | 4 | | 商杯 | 5 | 195構 | 0.1~0.3cmの砂鉄粒 | 良 | 10YR8/19白 | (7.0) | - | - | 透かし透かし調整不 |
| 61 | 5 | | 商杯 | 5 | 195構 | 0.1~0.3cmの砂鉄粒 | 良 | 2.5YR8/3褐黄 | (3.9) | - | - | 透かし透かし調整不 |
| 61 | 6 | | 美 | 5 | 195構 | 0.1~0.3cmの砂鉄粒 | 良 | 2.5YR8/3褐黄 | (4.0) | *14.7 | - | 上部外露反対部内側する部屋内面板ナデか? 修部外露 |
| 61 | 7 | 21 | 美 | 5 | 195構 | 0.1~0.3cmの砂鉄粒 (角閃石、さき織合) | 良 | 10YR5/4に似る黄緑 | (5.9) | *15.2 | - | 体部外露面、タケキ内面ヘラケズリ縁端部小さくつまみ上げる縁端部外露ナデ、外露保有者生駒西製造 |
| 61 | 8 | | 美 | 5 | 161構 | 0.1~0.3cmの砂鉄粒 | 良 | 10YR8/2白 | (2.8) | - | 4.0 | - |
| 61 | 9 | 21 | 美 | 5 | 161構 | 0.1~0.3cmの砂鉄粒 (角閃石) | 良 | 5YR5/4に似る赤 | (6.3) | *16.6 | - | 上部部先端つまみ上げる部屋内面ヘラケズリ外露面のタケキ 生駒西製造 |
| 63 | 1 | 23 | 土師器皿 | 6 | 3~2層 | 密 | 良 | 10YR6/2白黄緑 | 1.0 | (10.4) | - | 上部内面ヨコナデ、施ササエ |
| 63 | 2 | 23 | 土師器皿 | 6 | 3~2層 | 3mm以下 | 良 | 外SYR6/4に似る白 内7.5YR7/1明瞭灰 内7.5YR6/4に似る白 | (4.1) | 9.7 | - | マツカシイ調整不 |
| 63 | 3 | 22 | 瓦器等身 | 6 | カクラン | 0.1~0.2cmの砂鉄粒 | 良 | 10BG7/1明瞭灰 | (3.4) | *14.5 | - | 体部外露下半→底部回転ヘラケズリ他擦ナデ |
| 63 | 4 | 美 | 6 | 3~2層 | 1mm以下の砂鉄粒 | 良好 | 7.5YR3/1黒褐 | (18.2) | (2.5) | - | マツカシイ体部内面ケズリ13縁内面ハケマチ 生駒西製造 | |
| 63 | 5 | 美 | 6 | 3~2層 | 1mm以下の砂鉄粒含 | 良好 | 10YR8/2白黄緑 | (18.8) | (2.1) | - | マツカシイ体部内面ヘラケズリ 生駒西製造 | |
| 63 | 6 | 美 | 6 | 第4面 | 1mm以下の砂鉄粒 (角閃石) | 良好 | 10YR8/2白黄緑 | (18.6) | (2.5) | - | マツカシイ体部内面ヘラケズリ 生駒西製造 | |
| 67 | 1 | | 美 | 6 | 159構 | 2mm以下 | 良 | 9.5. SYR8/2白黄緑 内10YR7/3に似る黄緑 | (3.2) | *16.0 | - | マツカシイのため調整不明13縁端部丸くおさめる |
| 67 | 2 | | 美 | 6 | 159構 | 0.1~0.3cm砂鉄粒 (角閃石) | 良 | 10YR5/4に似る黄緑 | (2.8) | *15.8 | - | 体部内面ヘラケズリ13縁端部つまみ上げ 生駒西製造 |
| 67 | 3 | | 高杯 | 6 | 159構 | 2mm以下 | 良 | 外10YR8/2白 内SYR5/4に似る白 | (2.8) | - | *15.6 | マツカシイのため調整不明外曲ミガキ |
| 67 | 4 | | 美 | 6 | 159構 | 0.1~0.3cmの砂鉄粒 | 良 | 10YR2/1黒 | (2.0) | - | 2.8 | 外曲ハケメのちナデ内面マツカシイのため不明内凹みの小さな隙間、二次焼成を行 |
| 68 | 1 | 24 | 石棺未堅化 | 4 | 3層 | サスカイト | | 厚1.5 | 長6.6 | 幅1.5 | 幅1.5 | 細かい二次加工は行っていない |
| 68 | 2 | 24 | 二次加工の ある石棺 | 4 | 4~2層 | サスカイト | | 厚1.8 | 長5.3 | 幅1.3 | 厚1.3 | 表面下縁に微細な二次加工 |
| 68 | 3 | 24 | 二次加工の ある石棺 | 4 | 4~2層 | サスカイト | | 厚1.3 | 長3.2 | 幅1.6 | 開隙に連続した二次加工 | |
| 68 | 4 | 24 | 洞片 | 4 | 5構 | サスカイト | | 厚1.5 | 長6.5 | 幅1.7 | 表面自然面 | |
| 68 | 5 | 24 | スプレー バー | 3 | 245構 | サスカイト | | 厚1.2 | 長6.1 | 幅6.5 | 表面下縁に片面から刃部をつくる二次加工 | |
| 68 | 6 | 24 | 二次加工の ある石棺 | 6 | 155構 | サスカイト | | 厚1.1 | 長6.2 | 幅6.7 | 平面に自然面残 | |
| a | 22 | 青磁碗 | 4 | 網溝 | 織紋 | 良 | 5G6/1灰 | - | - | - | 蓮瓣 | |
| b | 22 | 青磁碗 | 3 | 9カク内 | 織紋 | 良 | 5G6/1灰 | - | - | 4.2 | - | |
| c | 22 | 祖母綠 | 4 | 3層 | 0.1cm以下砂鉄粒 | 良 | SGNG5/1灰 | - | - | - | ハラ記号 | |
| d | 22 | 祖母綠 | 5 | 4層 | 0.2cm以下砂鉄粒 | 良 | SGNG5/1灰 | - | - | - | ハラ記号 | |
| e | 22 | 祖母綠 | 5 | 3層 | 0.1cm以下砂鉄粒 (粒子大) | 良 | SGNG5/1灰 | - | - | - | ハラ記号 | |
| f | 22 | 祖母綠 | 4 | 3層 | 0.1cm以下砂鉄粒 (粒子大) | 良 | SGNG5/1灰 | - | - | - | - | |
| g | 22 | 祖母綠 | 3 | 第1面鏡食 利ヤクラン | 0.1cm以下砂鉄粒 (粒子大) | やや 不良 | SGNG5/1灰 | - | - | - | - | |
| h | 22 | 祖母綠 | 4 | 4層 | 0.1cm以下砂鉄粒 | 良 | SGNG5/1灰 | - | - | - | - | |
| i | 22 | 祖母綠 | 4 | 4層 | 0.1cm以下の砂鉄粒 | 良 | SGNG5/1灰 | - | - | - | - | |
| j | 23 | 土師器皿 | 5 | 3層 | 0.1cm以下の砂鉄粒 | 良 | 10YR3/1黒褐 | 1.0 | *15.6 | - | 横方向のナデ | |
| k | 23 | 土師器皿 | 4 | 幾何图形 時計土 | 0.1cm以下の砂鉄粒 | 良 | 10YR3/1黒褐 | 1.0 | *10.0 | - | 横方向のナデ | |
| l | 23 | 土師器皿 | 4 | 3層 | 密 | 不良 | 7.5YR7/4に似る白 | 1.8 | *19.0 | - | 端部いナデ、他マツメ | |
| m | 23 | 土師器皿 | 5 | 3層 | 密 | 良 | 7.5YR7/2明瞭灰 | 2.2 | *16.0 | - | マツメ | |
| n | 23 | 土師器皿 | 4 | 3層 | 0.1~0.2cmの砂鉄粒 | 良 | 5YR6/8 | (4.9) | - | - | 口縁部内面ヨコナデ 体部外露ナデサエ | |
| o | 23 | 瓦器施 | 6 | 3~2層 | 密 | 良 | 5B6/1青 | - | - | - | 口縁部ヨコナデ 体部外露ナデサエ | |
| p | 23 | 瓦器施 | 4 | 3層 | 0.1cm以下の砂鉄粒 | やや | 7.5YR8/2白黄緑 | (1.2) | - | *4.6 | マツカシイ | |
| q | 23 | 瓦器施 | 6 | 3~2層 | 0.1cm以下の砂鉄粒 0.5cm以上の砂鉄粒含 | 良 | 5B5/1灰 | (1.8) | - | *6.0 | 見込みに丸い縫隙 | |
| r | 23 | 瓦器施 | 6 | 2層 | 密 | 良 | 5B2/1青 | (1.2) | - | 5.8 | マツカシイのため不明 | |
| s | 23 | 瓦器施 | 4 | 網底 | 0.1cm以下の砂鉄粒 | やや | 5B3/2青 | (1.1) | - | 5.2 | 見込みに平行縫隙の縫隙 | |
| t | 23 | 瓦器施 | 4 | 3層 | 0.1cm以下砂鉄粒 | 良 | 5B2/1青 | (1.1) | - | *6.4 | 見込みに平行縫隙の縫隙 | |
| u | 24 | 洞片 | 1 | サブソル | サスカイト | | 厚1.7 | 長2.9 | 幅0.5 | 幅0.5 | 風化が大きい | |
| v | 24 | 洞片 | 1 | サブソル | サスカイト | | 厚1 | 長2.2 | 幅0.7 | 幅0.7 | 風化が大きい | |
| w | 24 | 洞片 | 1 | サブソル | サスカイト | | 厚1 | 長2.8 | 幅0.6 | 幅0.6 | 風化が大きい | |
| x | 24 | 洞片 | 4 | 32層 | サスカイト | | 厚2 | 長5.6 | 幅0.6 | 幅0.6 | 打面上に原面残る | |
| y | 24 | 石核 | 4 | 113ビット | サスカイト | | 厚1.6 | 長7.2 | 幅0.9 | 厚0.9 | 原面残る | |

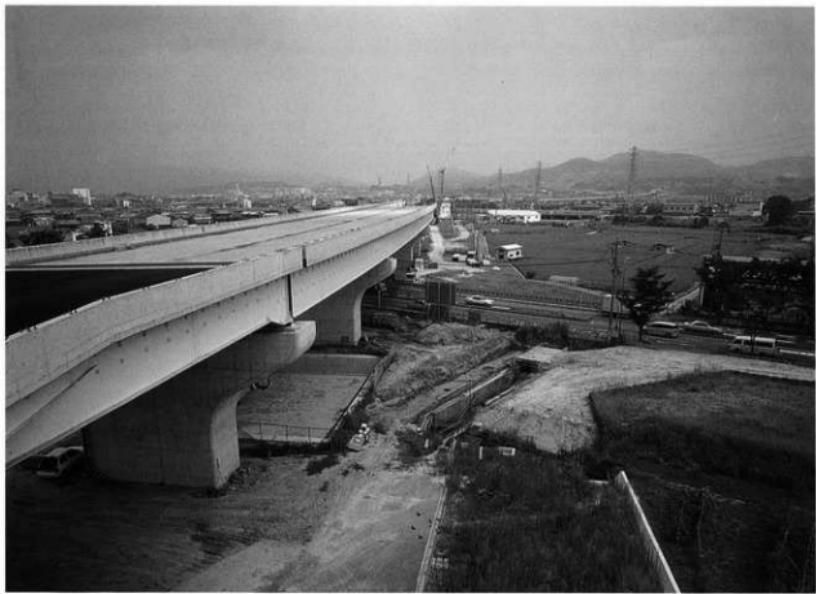
() は残存個

*は推定個

図 版



1、調査区から二上山を望む



2、調査区と南阪奈道路

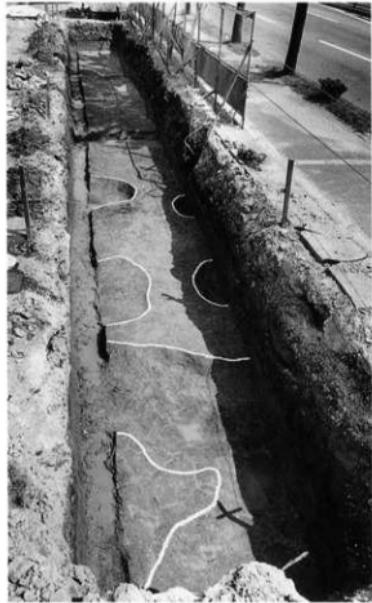
図版
2
4・1トレンチ



1、地層の乱れ
(4トレンチ第2面)



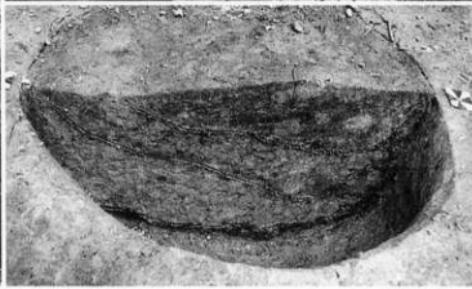
2、同上 断面



3、1トレンチ北側 第4面
遺構検出状況（南から）



4、1トレンチ南側 第4面 遺構検出状況（南から）



5、1トレンチ 251土坑 断面（西から）

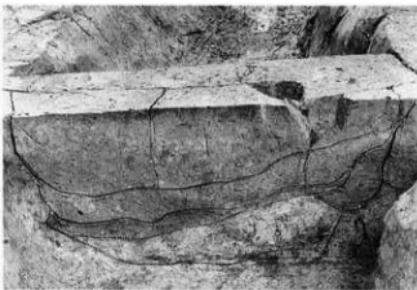
1、第4面
遺構検出状況
(西から)



2、47井戸
遺物出土状況
(南から)

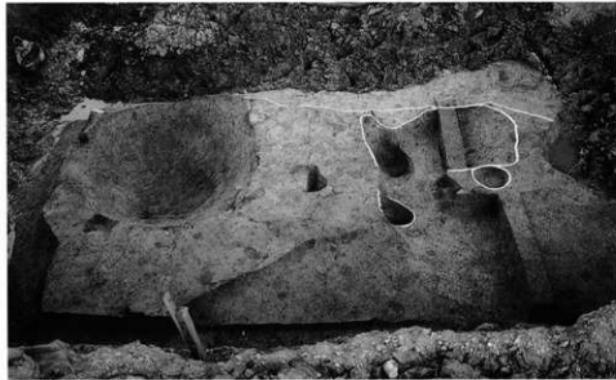


3、47井戸 断面 (南から)



4、46溝 断面 (北から)

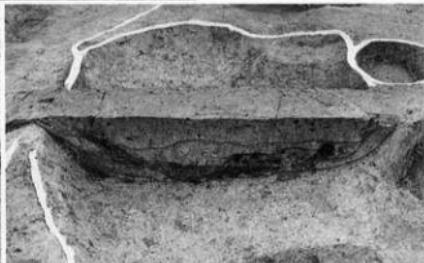
図版
4
2・3トレンチ



1、2トレンチ
第5面
遺構検出状況
(北から)



3、3トレンチ 第4面 遺構検出状況 (西から)



2、2トレンチ 97土坑 断面 (東から)
4、3トレンチ 228土坑 断面 (南から)



5、3トレンチ 246溝 断面 (南から)



6、3トレンチ 245土坑 遺物出土状況 (東から)



1、第1面
遺構検出状況
(北から)



2、第3面
遺構検出状況
(南から)



3、第2面 遺構検出状況 (北から)



4、5溝 断面 (東から)



1、第4面 遺構検出状況（北東から）



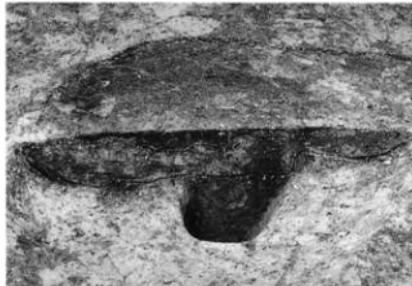
2、第4面 遺構検出状況（北から）



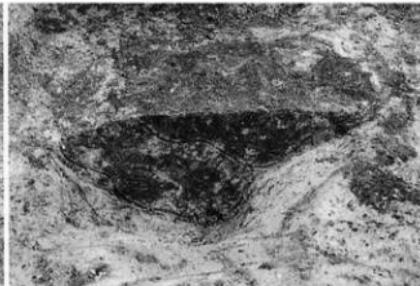
1、9竪穴住居
検出状況
(北西から)



2、9竪穴住居
完掘状況
(南西から)



3、9竪穴住居内98土坑 断面（南東から）



4、9竪穴住居内116ピット 断面（東から）



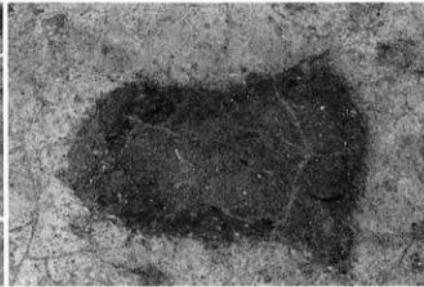
1、10堅穴住居 検出状況（南東から）



2、10堅穴住居 完掘状況（南から）



3、10堅穴住居内68土坑 完掘状況（北西から）



4、10堅穴住居内76炉 検出状況（西から）



1、18溝 完掘状況（北から）



2、18溝 断面（東から）
4、39溝 遺物出土状況（東から）



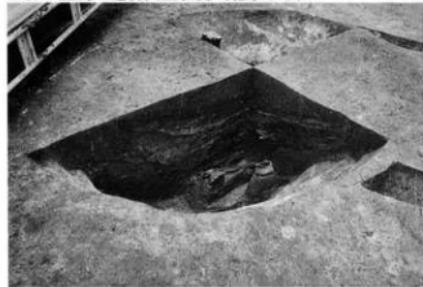
3、28溝 断面（北西から）
5、56ピット 断面（東から）



1、43井戸 遺物出土状況（東から）



2、7土坑 遺物出土状況（北東から）



3、43井戸 断面（南東から）



4、7土坑 断面（東から）



1、4トレンチ 40杭列 検出状況（北西から）



2、4トレンチ 35杭列 検出状況（南東から）



3、4トレンチ 40杭列 断面（南東から）



4、5トレンチ 第3面 遺構検出状況（南から）



5、5トレンチ 第4面 遺構検出状況（南から）



6、5トレンチ 第4面 調査区中央（北東から）



1、185竪穴住居 断面（北から）



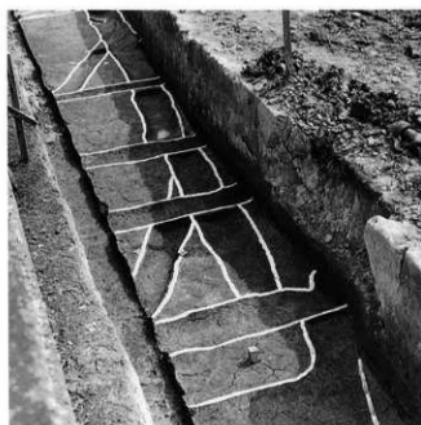
2、185竪穴住居 遺物出土状況（東から）



3、195溝 遺物出土状況（東から）



4、161溝 断面（東から）



5、小溝群 検出状況（北から）



6、横列2 検出状況（南から）



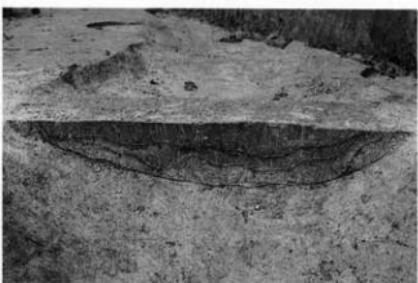
1、6トレンチ南側
第4面
遺構検出状況
(北から)



2、6トレンチ北側
第4面
遺構検出状況
(南東から)



3、155溝 届曲部 (南東から)



4、155溝 断面 (南西から)

図版 14
2・3トレンチ遺構出土遺物



図15-1



図15-6



図15-19



図15-20



図15-14

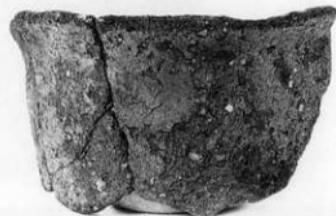


図23-1



図23-3



図35-11



図35-1



図35-13



図41-2



図35-16



図41-7

図版 16
4トレンチ遺構出土遺物 (2)



図41- 8



図41- 13



図41- 9



図41- 15



図41- 16



図50- 2

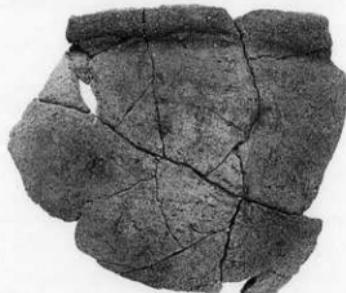


図50- 4



図43-7



図43-8



図44-8



図44-6



図44-7



図44-13



図43-4



図43-9



図43-11



図43-12



図43-13



図43-10



図43-17



図47-1

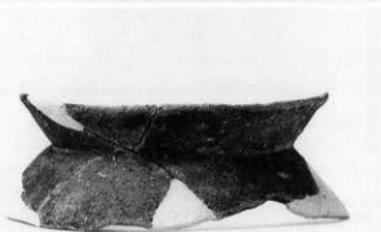


図47-6

図版 19
4トレンチ遺構出土遺物（5）



図44-12



図48-11

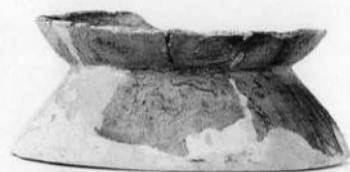


図48-4



図48-10



図46-1



図46-2



図58-6



図58-5



図58-7

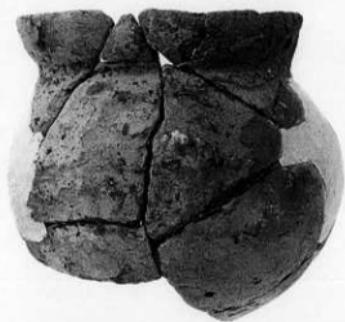


図58-20



図58-10



図58-11

図版21
5トレンチ遺構出土遺物
(2)

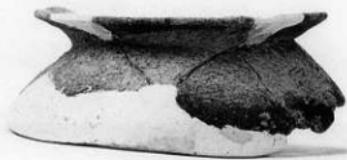


図58-13



図58-17



図58-16



図58-18



図61-7



図61-1

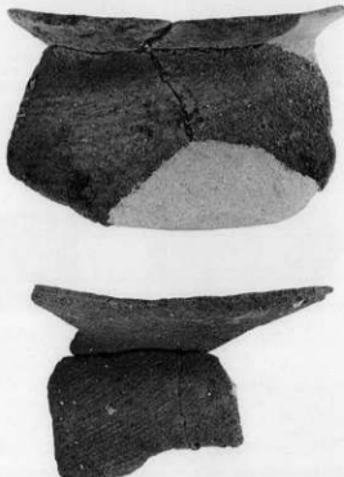


図58-12
図61-9

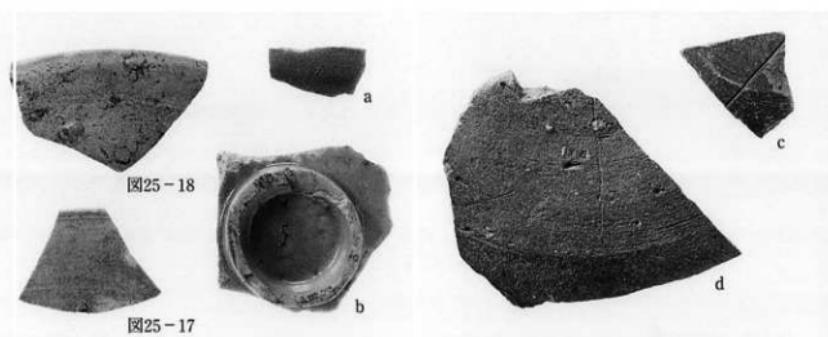


图54-1

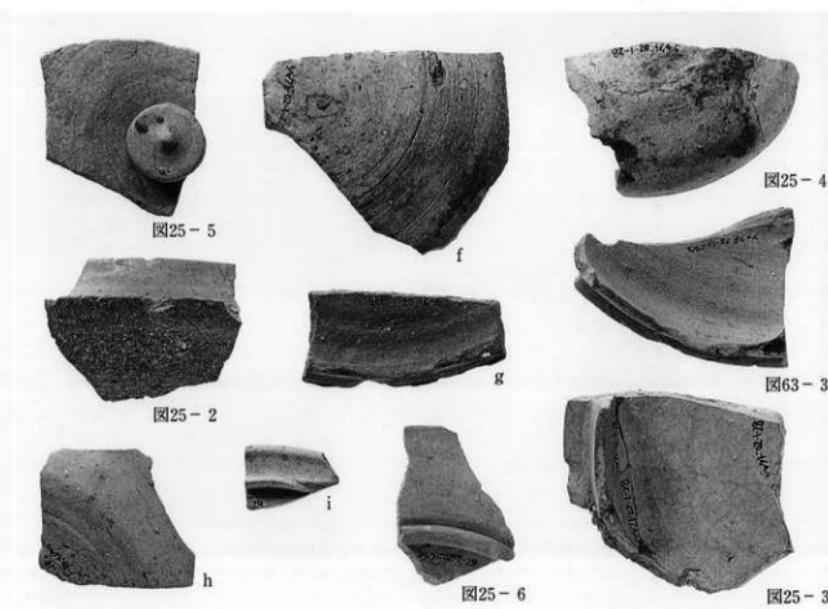
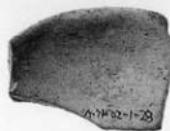


图25-3



圖25-10

圖25-7



l

m

圖25-9



n



圖63-1

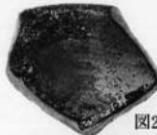
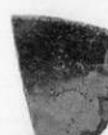


圖25-11



圖25-13



o



圖25-16



圖25-15



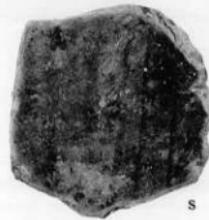
p



q



r



s



t



図28-1



図54-2



図25-21



図25-1



図68-1



u



図68-2



w



図68-5



x



図68-3



図68-6



図68-4



y

報告書抄録

| ふりがな 書名 | しゃくどいせきさん 尺度遺跡Ⅲ | | | | | | | |
|---------------|---|-----------------------------------|-----------------------------------|--|--|------------------------|-------------------|--|
| 副書名 | 南阪奈道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ名 | (財)大阪府文化財センター調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第110集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 島崎久恵 | | | | | | | |
| 編著機関 | 財團法人 大阪府文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL 072(299)8791・FAX 072(299)8905 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2004年2月27日 | | | | | | | |
| ふりがな 所取遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | コード 道路番号 | 北緯 | 東緯 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 尺度遺跡 | 大阪府 羽曳野市 尺度 蔵之内 | 27222 | 60 | 34度 36分 26秒 | 135度 36分 26秒 | 2003.2.28 2004.2.27 | 903m ² | 主要地方道 美原太子線 (南阪奈道路) 南阪奈 道路上に伴う 尺度遺跡発 掘調査 |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 尺度遺跡 | 集落 | 弥生時代 古墳時代前期初頭 古墳時代 古代～中世 | 土坑 竪穴住居、掘立柱 建物、ピット、土 坑、溝 | 弥生土器（中期）、 石器 土師器（庄内～布留 初頭） 須恵器 須恵器、土師器、瓦 器、瓦 | 弥生時代中期の遺 構、遺物出土 古墳時代前期初頭 の集落の広がりを 確認 | | | |

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第110集

尺度遺跡Ⅲ

南阪奈道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2004年2月

編集・発行／ 財團法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／ 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号

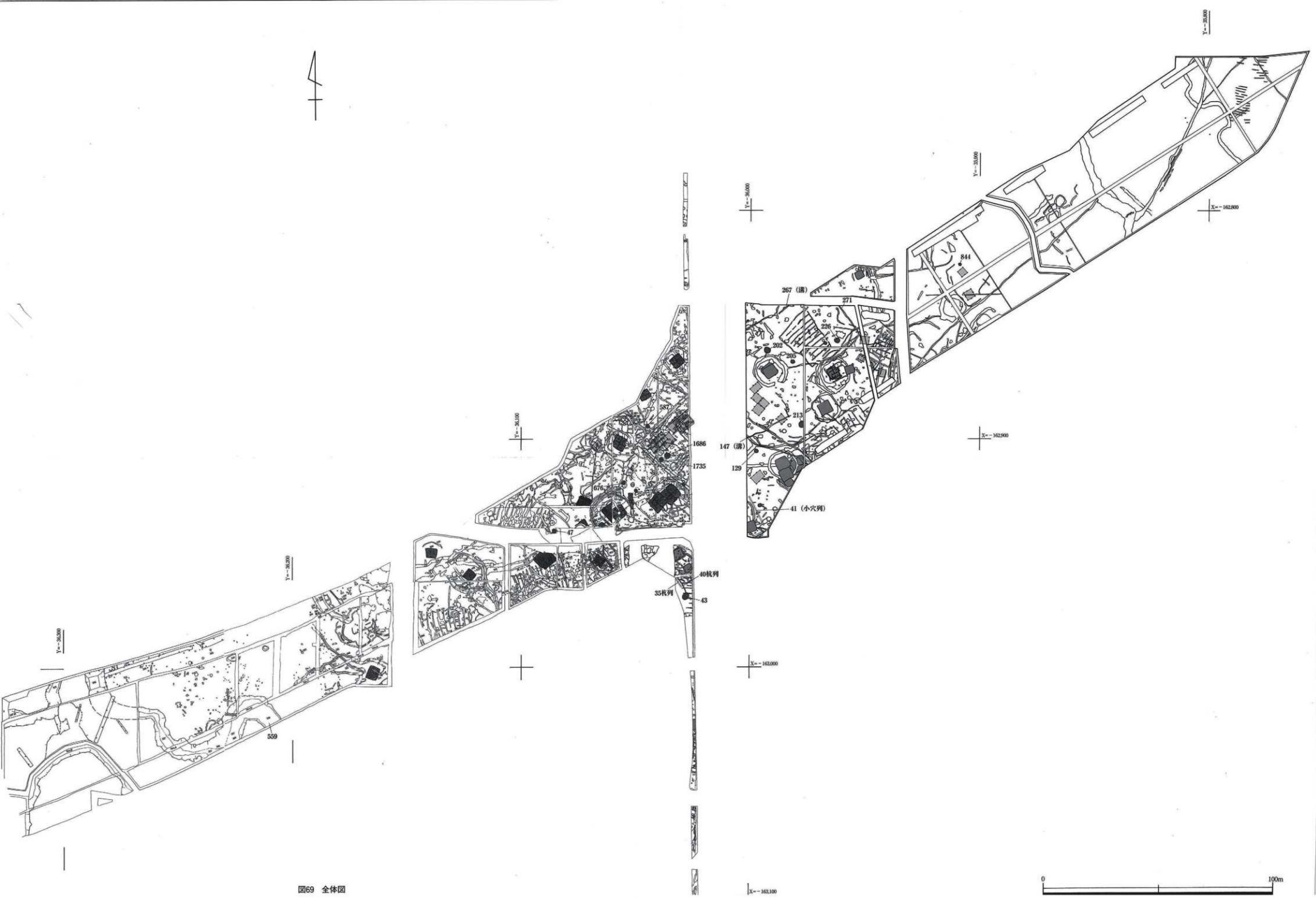


図69 全体図